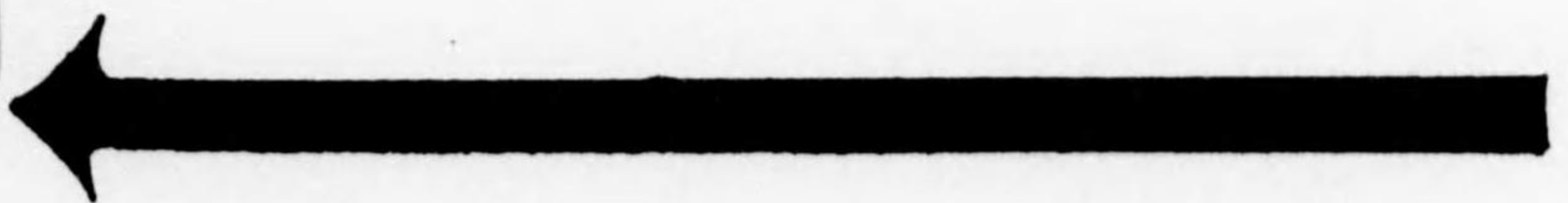
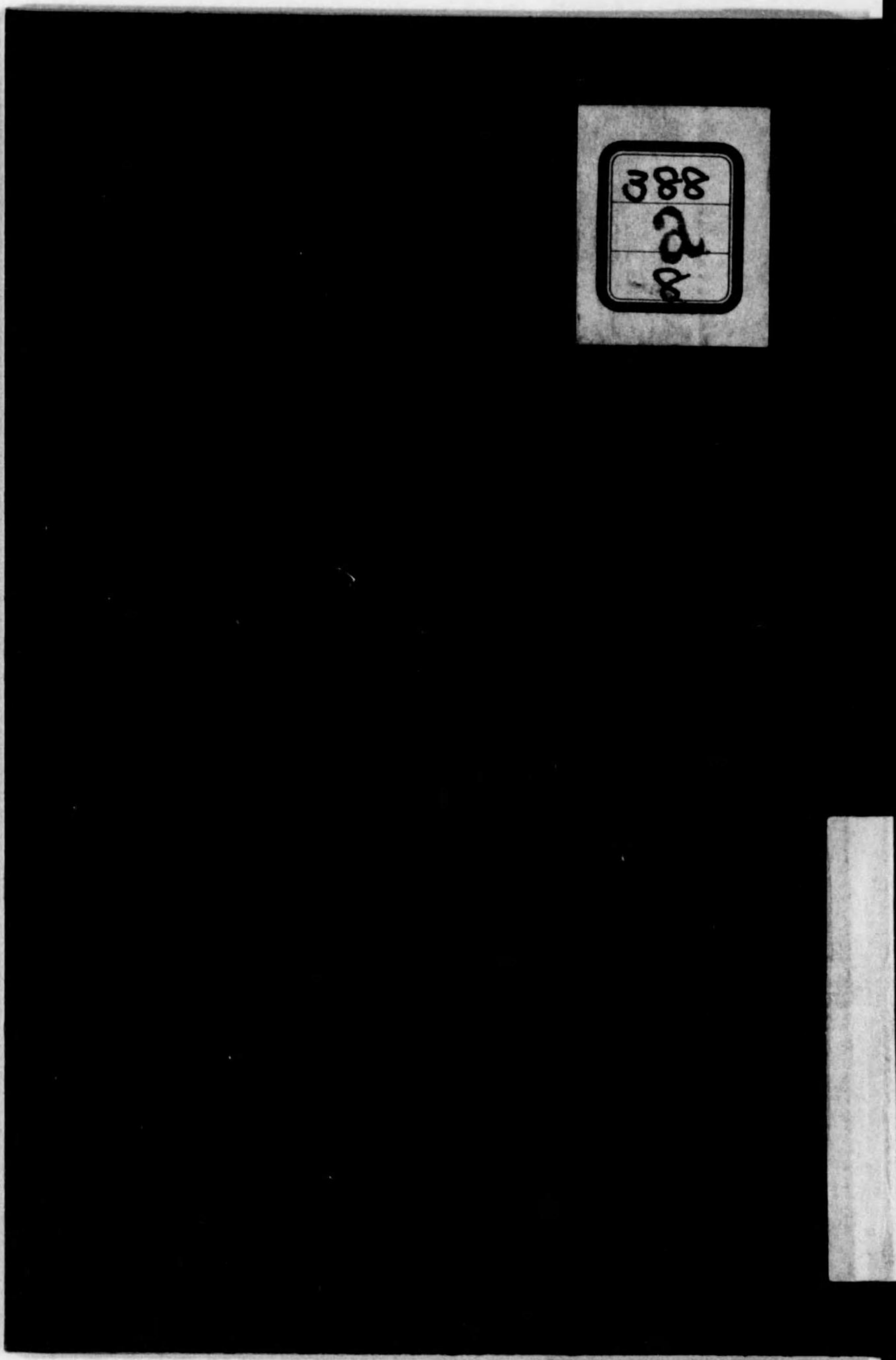




始



388  
200





工卜6S-1.0

388
8

著 男 國 田 柳

說 傳



書 新 波 岩





著男國田柳

說 傳

書新波岩

72

111  
24



388  
8

2388  
8



1606

### 自序

昭和十三年の日本民俗學講座で、六七回續けて私は傳説の話をした。それを本にして見ないかと勧められて、簡単に引受けてしまつたが、書き始めて見ると中々まとまらぬ。例は興味の有りさうなものを澤山に講座では引用したけれども、それを繋ぎ合せる説明が不十分であつた。少しでもそれを補つて置かうとすると、談義に流れて事實が乏しくなる。それで大に困つて實は二年近くの日を空しく過した。漸く此一冊の本は出來上がつたが、まあよからうといふ心持は少しも起らず、寧ろ竊かに公約を悔いるばかりである。強ひて氣休めを求めるならば、日本は傳説の殊に多く又色々の特徴を備へた國であつて、しかも各地方で無數の傳説集を出して居るにも拘らず、今以て之を利用するやうな小冊子すらも公けにした人が無い。是が最初だといふことは何ぞの意義がある。さういふつもりは少しも無いけれども、此本は問題をばらまいて、多くのまじめな人たちの論議の種にはなるであらう。だから其意味では又傳説の研究を促進するかも知れない。時事問題として傳説と



歴史との関係を論ずるのは、實は甚だ損なことである。私は地方を旅して居て、毎度この問題では當惑した経験がある上に、傳説の近代相といふものを説く必要から、つい少しばかり歴史化の批評をして見たが、静かな讀者諸君には是は決して勧めない。そんな事に手を出さずとも、傳説の研究は幾らでも出来る。寧ろ歴史上の人又は事蹟に觸れて居るものを避けて、其他の方面に入つて行く方が、興味も豊かなれば功益も多いのである。採集は今出て居るものでも間に合ふが、もう一度土地で年を取つた人々の口から、よそ行きで無い話を聽くに越したことは無い。ノートの紙はばら／＼のものを使つて、類似の傳説をまとめてにし、その異同を比べて見るのが面白いのである。最後に出来るならば『一つ目小僧その他』、一つ／＼の題目に就て前に私の書いたものを讀んで見て戴きたい。さうすれば少しは此書の言ひ落しを補ふことが出来るだらうと思ふ。

(昭和十五年六月十八日)

## 目次

一	「傳説」は新語 廣狹二つの用ゐ方 傳説の特殊性	一
二	以前は何と呼んだか かたりごと	六
三	傳説の要件 傳承様式の變化 傳説と昔話	二二
四	斧淵と蟹淵 弘法水と大根川 寶手拭の昔話	一六
五	水底の機の子 苧環の絲 夜叉が池の由來 猿聲入の昔話 蛙の王子も元は神話	三三



六	.....	中心がある 敘述の自由 傳説と歴史	.....	三三
七	.....	傳説と文學 信じやすさ 年代記の力	.....	三九
八	.....	第二の合理化 白鳥大明神 眞野長者の物語	.....	四四
九	.....	高倉宮御舊蹟 歴史化の経路 動機は至純	.....	五〇
一〇	.....	木地師の物語 固有名詞の力 傳説圏	.....	五七
一一	.....	平家谷 傳説は變化する 村の歴史の埋れたわけ 女性の記憶力	.....	六三
一二	.....	傳説への愛着 人を争はしめる 比較綜合の必要 傳説と縁起との差 共同信仰の保障	.....	七一
一三	.....	生きて居る傳説 古人の信じ得たもの 巫言と靈告 幻しも亦改まる	.....	八〇
一四	.....	新神勸請 民俗學の方法 本家と傳説	.....	八八
一五	.....	專業神職の起り 顯記の方式 二種の司祭職 巫女相續	.....	九五
一六	.....	神々の協調 王子神の信仰 傳説改造の機會	.....	一〇一
一七	.....	類似と同化作用 神語解説者 巫女の言葉 石清水式信仰 定まつた様式 かたりごとの型	.....	一〇九
一八	.....	解釋の發達 鳥と保元物語 空想の制限 知識の不精確	.....	一一〇
一九	.....	.....	.....	一二九



沖繩諸島の爲朝	文獻の根據	祝女の唱へごと	島の傳説の價值	島々の平家	一三九
女性の旅	二様の歴史化	鶯にさらはれた赤兒	おまんといふ女		一四七
旅する巫女	歌比丘尼	本地もの	全國共通の傳説		一五五
白米城	信仰は傳説の力	諸國の長者譚	文學の起原		一六三
傳説の種子	二流れの傳承	立聽といふ趣向	信仰の推移に伴ひて		一七二
傳説敬遠主義	歴史よりも古し	傳説の數と種類	接穂と藁木	榮え花さくもの	一七九

一

傳説が一つの日本語として通用するやうになつたのは、ほんの近頃からのことである。現在この言葉を以て呼んで居る言ひ傳へは、無論いつとも知れない大昔からあり、一方には又文字を識つた人たちは、傳説といふ語を時々使つて居たのだが、それが今日我々のいふ「傳説」ばかりを、言ひ表はすものともきめては居なかつた。四十年ほど以前、高木敏雄氏と其友人などが、頻りにこの問題を論じた際に、始めて獨逸語でザアゲ、佛蘭西語でレジヤンドといふ語とほゞ近い意味に、この「傳説」の文字を用ひ、それが又忽ちに全國の口言葉にもなつたのである。高木氏の書いたものは、『日本神話傳説の研究』といふ本に大よそ纏められて居る。同じ人は又東京朝日新聞に頼まれて、其頃ちやうど全國から募集した傳説の選者となり、後にそれを整理して一冊の本にして世に送つた。是が傳説の興味を我邦に普及させたと共に、自然にこの言葉の限界をきめる結果にもなつたことは、私たちが先づ活きた證人である。但し其範圍は僅かばかり、我々の考へて居るところと違つて居

「傳説」は新語



二  
るのだが、それを討究するまでにまだ世間の關心は進んで居ない。さうしてたゞこの一つの日本語だけが、むやみと國中に取囃されることになつたのである。

傳説はもと所謂漢語ではあるが、あちらでは却つて文字通りに、今でも二つの動詞の結合としか解して居らぬ人が多いやうである。故事といふ語を我々の「傳説」の意味に使つて居るのをよく見かける。日本でも漢學の出来る人、即ち耳から人の言葉を受取らうとせぬ人たちには、傳へて説くものならすべて傳説と謂つてよからうと思つて、可なり広い範圍にこの語を解しようとするむきも少しはある。結局は多數の行く方に従はねばなるまいが、現在はまだ折々の牴觸を免れぬのである。たとへば我々の携はつて居る學問なども、此頃は日本民俗學といふ名にほゞ落着かうとして居るが、前には物があつて衆人の一致した名が無かつた。或は民間傳承の研究と謂ひ、又は外國の習はしを認めて、之をフォーク・ロアと呼ぶ者も多かつた。三字でないと學らしくないやうに感ずる人々は、或は之を俚傳學と謂はうとしたこともあつた。ハートランドの一著『宗教と呪術』の國譯本を讀んで見ると、其中には傳説學といふ字が幾つも出て居る。ひどく氣になるので原本に當つて見たら、是がフォーク・ロアに對するこの譯者だけの日本語であつた。無論是を「傳説」のみを調べる學問と解して居るわけではない。國に傳はつて居る昔からの習慣や考へ方までを、傳説と呼

んでもよいやうに思つて居る人が、あの頃はまだ有つたのである。大正の半ば頃に出て居た雜誌に、『土俗と傳説』といふのがあり、十何年間も續けて出して居る『旅と傳説』といふ雜誌もある。幾分か範圍は狭いかも知れぬが、昔話でも諺でも、歌でもかたりものでもすべて其中に包容して居るらしいから、やはり國民の話題に上る古いことならば、一括してさう呼んでもよいやうに、少なくとも元は考へて居た人が付けた名であつた。しかも我々の傳説が紹介せられたのも、今までは主として斯ういふ雜誌の上であつたのだから、紛らはしかつたわけである。

それでまづ最初に、この二通りの意味を明かに見分けた上でないと、傳説の話は進めて行くことが出来ない。事實を有るがまゝに述べるならば、日本では傳説といふ言葉を、人によつて今でもまだ廣く又は狭く用ゐて居るのである。廣いといふのはすべての前代からの語り傳へ、口で人々が暗記して居るものは申すに及ばず、かはつた信仰や行事などの、問へば何とか説明してくれるものも、皆傳説だとする見方である。是に對してその傳承のほんの一種類、しかも我邦に限つて特殊に發達し、且つ途法も無く豊富に隅々まで分布して居る語り方のものだけを、傳説と謂はうとする狭い解釋があるのである。この二つはさういつ迄も兩々對立して居るわけに行かぬ爲であらうか。輪廓は幾分かばやけては居るが



近頃の口言葉では、追々に後の方に統一せられようとする傾きが見える。さうして自分が爰で考へて見たいのも、やはりその狭い意味の「傳説」の方なのである。民俗學で取扱ふべき現存資料の全體は、綜合して之を傳承と呼ぶことにして居る人が多い。その傳承を我々は假に三つに分けて居る。一つは眼で看ても大よそはわかるもの、之を有形文化又は行爲傳承ともいふが、何れにしても名が少しばかり覆ひ足りない。もつとよい名を見つけないならばならぬが、とにかく爰にいふ「傳説」が、其中に入らぬことだけは確かである。第二には専ら耳で聽くもの、即ち國語に通じない他國人などには、注意も採集も出来ないもの、之を言語藝術或は口頭傳承と謂ふのだが、更に此以外に言語にも現されず、畫にも寫眞にも残すべき形跡が無くて、大部分は直接に心に感じ又は覺らなければならぬ、内部傳承とも名づくべきものがある。その第三の傳承は、今までは信仰傳承、又は俗信の名を以て呼ばれて居たが、實は信仰といふ語の意味をよほど廣く解しても、まだ包みきれないやうに思ふ色々の觀念、好み樂み又は選擇などいふものをも含んで居る。是からも少し内容を整理して、もつと適切な名を付與しなければならぬ。傳説は人が語つてくれなければ知る便宜が無い故に、通例は口頭傳承もしくは言語藝術といふ第二類の中に入れることになつて居るのだが、よく氣を付けて見ると、傳説を語る言葉には定まつた形が無い。聽いて

も其通りを次の者に傳へようとはせず、長くも短くもし又改造をする者も多く、しかも要點になつて居る部分は、うそをつかうとせぬ限り元のまゝなのである。此點から見れば私たちの分類の、第三類の方に屬してよいものであつた。たゞ是と最も近い内容をもつたものが、言語藝術の中の昔話にも多く傳はり、或は「語りもの」となり歌謡ともなり、ことわざにも地名にも保存せられて居る爲に、丸々引離して置くことは不便なので、私などは是を二と三との中間に別置して、ちやうど橋架けのやうな役目をもたせようとして居る。すべての民間の傳承を一括して、之をデンセツと稱へる日本語は、現在はまだ行はれて居ないと謂つてもよいのだが、それにも拘らず是が我々の研究に取つて依然として大切なわけは、この特殊な地位を狭義の「傳説」が占めて居るからであつて、それが又日本民俗學の斯くも盛んになつた今日、まだこの興味ある問題に身を入れる人が少なく、よい加減な考へ方のなほ通用して居ることを、深く歎かねばならぬ理由ともなつて居るのである。



近世の教育の玉に疵は、やたらに古くから有るものに新らしい名を付けて、前後の續きを忘れさせようとして居たことにあるのだが、傳説は亦確かに其一つの例であつた。用語の新舊を別にして考へるならば、元は日本人くらゐ傳説を大事にし、よかれ悪しかれ是に制約せられて居た民族も稀なのである。古い國でも政治の變革が多いと、人が傳説を守らうとする念慮はもとのまゝであつたところで、傳説そのものゝ内容がちがつて來る。乃ち國がらは改まらざるを得ないのである。我々の邦とても、無論少しも變らずに上代の姿を留めて居るとは言へない。國民の智能が磨かれ經驗が加はると共に、松杉檜の木が古葉を落しつゝ伸びる如く、用の無いものは追々と棄てゝ來たが、外から強ひられて變へなければならぬ點が、よそとは比較にならぬほど少なかつたらしいのである。無論いつの世にも見た所は統一して居て、保存と變更との繼ぎ目は目に立たないが、それでも此中から追々に、久しく傳はるものを見付け出す方法はあつて、是から次々と話をして見ればわかることだが、存外に多くの昔の姿は消えずに居たのである。それが若干の變化を受けて居る場

合でも、變化そのものが既に古風であり、又その變りぶりにも前代人の氣持を認め得る。知らずに我々が傳説を承認し、甘んじて其限界の中に働いて居る場合は今も多い。さうして斯ういふまじめな場合だけは、寧ろ新しい傳説といふ語を用ゐることを好まぬやうに思はれるのは、又一つの過渡期の兆候であつて、いよゝゝ以て此問題を永く打遣つて置くことが、國の昔を粗末にする結果に、陥りさうな不安を抱かしめるのである。

さて傳説といふ名稱は新らしく、ものは遠い昔から既にあつたとすると、そんなら元は何と謂つて居たかといふことが、次に起る疑問である。是は土地々々の人に言はせて見ても、今のうちならばまだ知ることが出来るだらうが、大體にイヒツタへといふのが最も上品な、又誰にでもわかる口言葉であつたやうに思ふ。言ひ傳へは勿論書いて見ても明かなやうに、爰で謂ふ傳説よりも範圍が広い。藥の祕法や仕事のこつでも、書いて残さぬものは皆此中に入つて來るであらう。單語はいつの世にも最初は用途が寛やかで、後に必要と慣行につれて、たとへばカヤを或草に、グミを或果實だけに、追々と限ることになつたやうな例は多い。數ある口頭傳承の中でも、他のものにはナゾとかムカシとかそれ〴〵の新たな名が出來て、それを引去つたあとには、この傳説だけが最も有力に残るのである。だから實際には此語を使つても、誤つて解せられる懸念は先づ無かつたので、傳説といふ新

以前は何と呼んだか



語は必ずしも差別の必要に促された發明でなかつたことは、今なほ境目のやゝぼやけて居るのを見てもわかる。つまりは何か耳を新たにする二字の漢語がほしかつた迄である。

古い時代にも、このイヒツタへといふ語は通じたらうと思ふが、別に又カタリツタへといふ語も存し、或は「語り継ぎ言ひ継ぎけらく」など、二つ並べても用ゐて居たのは意味のあることであつた。カタルは本來は改まつた物の言ひ方をするのであつた。乃ち我々の傳説が、常の馴々しい口調を以て、人に聽かせるものでなかつたことを推測せしめる。現在は東北では「馬鹿かたんな」など、殆ど「言ふ」と同じ心持にも用ゐ、或は又人を騙して財を取ることだけを、カタルといふ例も多いが、それは後々の變化と見られる。今でもカタリモノと謂へば、必ず句の形の定まつたものだけになるのである。上代のカタリゴトは是よりもずつと弘く、我々が傳説と呼んで居るものも、其中に含まれて傳はつたことだけは確かだが、それがどの位の部分を占めて居たかは、もつと詳しく沿革を調べた上でないと言ふことが出来ない。名は同じであつても、内容が時につれて少しづつ變つて來るとは、其カタリゴトも傳説も共に免れなかつたからである。或はフルコトといふのが、特に歴史に屬する語りごとのみを意味して居たかとも想像せられるが、この單語もはや今日の口言葉の中には残つて居ない。さうして之を漢字化した故事といふ語が、支那とも又

ちがつたやゝ狭い内容を以て、教養ある人々の間だけに行はれて居るのである。

傳説をもし強ひて日本風な言葉で呼ぼうとするならば、イハレといふのが最もよく當つて居るかも知れぬ。此語の起りは普通に考へられて居るよりも古く、曾て至尊の御諱とさへなつた大和の磐余いよといふ地名などもそれであり、又沖繩の島にあるキコエ大君、又は阿母シラレ等の例と比べると（註）、ことによつては雙方同じ趣旨の語であつて、本來は「言ふ」といふ動詞の受身の形を、「忘れてはならぬ」ものゝ名として居たのかとも思はれる。たゞ何分にも近世は是を粗末に取扱つて居た。それといふのが餘りにも其イハレを説く者が多く、又しばしば名を是に借りて、自分ばかりに都合のよい主張をする人があつた爲に、聽く者が玉石一様に輕しめるやうになつたのであらう。江戸人士の物を茶にする氣風には、幾分時として腹立たしいものがあるが、イハレ因縁故事來歴など續けていふときには、幾分の可笑味をさへ含み、少なくとも何かといふとイハレを説きたがることは、老人の悪い癖のやうに認められかけて居たのである。だから是を再び往古の嚴肅なる用法に戻すといふことは、實際に於て簡単な仕事では無い。しかもさういふ色々の行掛りに囚はれずに、我は眼前の「傳説」を考察すべき必要を感じて居るのである。響きや字面は必ずしも満點とは言へなくとも、なほ時代の新たなる狀況に應じて、斯ういふ一つの新語は採用しなければ



ばならぬ。たゞ傳説と謂つたのではどうしても呑込めぬ人たちだけに對して、以前イハレと言ひ又は言ひ傳へとも云つて居たものといふ、註脚を添へたらそれでよからうと思ふ。何といふ名を用ゐても、境目には問題があり又誤解もある。是は要點を明かにすることによつて、自然に整理して行くの他は無い。

(補註) 關得大君、近世の沖繩人は字には斯う書いてチフィジンと發音して居た。神に仕ふる最高の女性で、多くの點に於て上代の齋宮と似て居る。名の起りは「世に知られたる」といふ意味かと考へられる。其下に屬した上級の祝女の稱呼にも、アムシラレといふのがあつて、アムは阿母と書き刀自又は夫人の義である。宮古島などの土官の名に豊兒親といふのも、禮讚を意味するトヨムといふ動詞がもとで、是は配下の民から見た語であつた。同じ語形はもう内地には行はれないが、大和のイハレも其例かと自分は思つて居る。

## 三

傳説の要點は人が之を信じて居るといふことに在り、之を信じて居る人の數の、歲月と共に段々と少なくなつて行くといふのが、又一つの争ひ難い特性であつた。古い時代に於ては、表現の方式即ち之を人に傳へる言葉の技術が定まつて居て、それが史實を語る方式と、雙方からよほど近づき似寄つて居たと思はれるが、その點はもう古今を一貫した不變のものでなかつた。第一に一方の史實の方は、文字に移されて次々に文書になつた。紛れて幾つかの傳説が其中に入つたことは有り得るが、大體に於て他の一方の傳説の方は、なほ久しい間口頭の傳承に残り、それに伴ふ徐々の變化を受けて居たのである。記録がその出現した或一つの時點の姿を、精確に傳へて居るのに對立して、是はいつでも成長の勢ひを示して居た。文書は破れ蟲ばみ又は讀み解きにくくなるといふ以外には、後の世からの影響を被らぬものなるに反して、傳説は草木の如く、種は無始の昔にあつても伸び茂り又は片枝枯れゆがんで居る。海の渚のやうに沈み又は遠ざかつて居る。詳しく見る人ならば此間に立つて、時の進みといふものが人生に與へた、大きな變革の跡をたどることが出



來るのである。是が二つのものゝ内容に於て、どんな事があつても混同してはならぬ理由であり、同時に又史料として高く評價せられなければならぬ傳説の價值である。

傳説の時世と共に變化して來たこと、それを具體的に説いて見るのが此本の目的であるが、其中でも外形即ち之を他人に話して聽かせる方法に至つては、もう細かな説明を必要とせぬほどに、誰にもわかり切つて居る昔今の差異がある。たとへば近頃の人は無やみに忙しい。土地に評判の珍らしい傳説があつても、停車場の揭示板にはたゞ一行の文字を録するのみで、旅人の聽いて戻つて人に語る場合は勿論、知つて信じて居る男女の故老でも、先づ結末を語つて、あとは質問に應じてぼつ／＼と補足するのである。郷土誌其他の書が新たに之を筆録する場合にも、順序を立て又年代や人の名を精確にしようとは努めるが、たゞ斯く／＼の事實があつたと言ひ傳へるといふ迄で止めて居るから、記述は簡明を極めて、之をもてはやす人々の感動は傳へない。ところが一方まだ現存する宮や御堂の縁起、もしくは父祖以前の舊記類があるとすると、是には丁寧に話に來歴があり、たゞ徒らに夢に近いことを信じて居るのでは無いわけを、言ひ添へようとして居るものが多い。元は恐らくは巡見使や、殿と名の付く人の御小休みの節でもなければ、路傍の立話などには言ひ出すべきものでないやうに、重々しく考へられて居た名残であらうと思ふ。世の中が改ま

つて人の往來が繁く、次第に今のやうな粗略な話し方が普通になつたけれども、なほ家々には昔からの、年寄から若い者への引繼ぎが行はれて居たらしいことが想像せられる。外部の我々には其様式を知ることが、今ではもう大分むつかしくなつて居るが、やはり神祭の御籠りの晩とか、年に何度かの集會の席上とかゞ、始めて聽く者は耳を傾け、知つて居る者は記憶を確かにする、大切な機會だつたやうである。以前は特別に莊重なる言葉使ひを以て、先づ傳説だけを語らうとした習はしがあつたのかも知れぬが、一夜を語り明すとすれば是ばかりでは足りない。他にも數あまたの雑談は其中に交へられ、少なくとも近世になつてはその話し方に、彼と此との差別は立てられて居ないのみか、寧ろ新奇なる外來の話題に、氣を取られる傾きが強くなつて居る。話は庚申の晩などゝいふ諺が行はれたのも、傳説以外のちつとも重要でない色々の説話が、斯ういふ夜ばかり盛んに持出されて居たことを意味するものであつた。是と傳説との境目が、段々と紛らはしくなつたのも已むを得ない。いづれ古くからの傳説でも覺えて居るといふ位の人ならば、大抵は話し上手であり、又他の多くの話の種も持つて居て、所望によつてはさういふものも聽かせてくれたことであらう。毎度くり返される古來の言ひ傳へよりも、少しは耳新らしい又時々笑ふやうな話題を、所望する聽手が追々と多くなつて、傳説の立場は押付けられるか、さうで



なければ是をまや、面白をかしく、他の説話のやうに修飾する風が生じたかも知れぬ。其中でも我々の謂ふ昔話、學者が民間説話又は民譚とも謂つて居る一種の説話は、殊に大昔以來の因縁があつて、傳説と混同せられやすかつた。その因縁は後に詳しく述べるつもりであるが、ともかくも傳説をまるで短篇小説でもあるかの如く、人が勝手に引伸ばして書き立てようとする流行などは、必ずしも近頃が始まつたものではないのである。

西洋でも或は限地説話(ローカルテールズ、英)などの名を以て、人が別種の取扱ひをして居るものは、實は説話ではなく、この傳説の昔話化したものをいふやうである。普通の昔話は誰でも知つて居る通り、必ず昔々或處に、或一人の貧しい木樵が住んで居てといふ風に、どこに持つて行つても通用し、又どこでも無いといふ印象を與へるものであるに反して、一方はあの山この淵、老いたる樹大きな巖、もしくは某の舊家の由來、土地に生れた豪傑や美女に關して、傳はつて居る幾つかの物語などは、たとへその話し方が昔話と近く、又其内容にも似通うた點があるにしても、地物と結び付いて居る以上は、其儘の形では何處へも移すことが出來ず、人も亦よそに同様の話があらうとは思つて居ない。私たちがから見れば、是は可なり重要な根本の相違であつた。即ち一方は最初から話す者も聽く者も、本たうに有つた事では無いのを承知の上で、次から次へと授受して居たに反して、此

方は少なくとも事實だと信ずる者が一部にはあつて、其證據には現に記念の樹がある、山の名があるといふやうな、一種昔風な論理で之を支持しようとして居る。人のこの二つのものに對する考へ方は、今でも可なり明瞭にちがつて居る。たとへ近頃は同じやうな話しぶりで之を説かうとする者が出來て居ても、既に限地的である以上は、所謂民間説話の中には入れることは出來まいと思ふ。



四

傳説が昔話と混同せられやすくなつた理由は、單に近頃の話し方が互ひに似通うて居て、しかも屢々同じ一夜の集まりに、まぜこぜに語られることが多かつた爲ばかりで無い。兩者が人に傳へようとする事件の内容にも、不思議に共通なものが以前から多かつたらしいのである。日本はさういふ中でも特にこの状態がよく保存せられ、従つて比較の試みやすい國ではなかつたかと、私などは思つて居る。ほんの二つ三つの最も著しい例を擧げて見ても、たとへば昔一人の正直な爺が、山に行つて木を伐つて居て、誤つて斧を谷川の淵に落す。水の中から白いきものを着た老人が出て来て、是はおまへのかと謂つて金の斧、次には銀の斧を示す。いゝえ私のは鐵の斧の古いのですといふと、正直な者だと褒められて三つともくれるから持つて行けと言はれ、大悦びで還つて来る。それを羨んだ隣の慾深爺は、眞似をする位なら其通りを眞似すればよいのに、うつかり金銀の斧も私のですと謂つたばかりに、怒られて自分の鐵の斧まで返してもらへなかつたといふ話。これなどは外國にもあり本にも出て居るので、或は輸入のつもりで居る人もあらうが、それにしては田舎

の隅々まで、あまりにもよく知られて居るのみならず、更に斧淵といふ名の淵が方々にあつて、その村限りでは昔それに近い出來事が實際にあつたやうに、語り傳へて居るものが稀で無い。或は話がもう一段と込入つて居て、爺が落した斧を探しに、裸になつて淵に入つて見ると、水の底には大きな家があり、美しい姉さまがたつた一人で機を織つて居た。傍へ寄つてよく見たら、それが前年居なくなつた長者殿のまな娘であつた。機臺の片脇になくした斧はちやんと立て掛けてある。斧は返してやるが、歸つてからわたしは爰に来て居ることを、誰にも言つてくれるなと堅く口止めたといひ、それでもしまひには父の長者が聞き知つて、多くの人を集めて淵の水をかへほして見たが、どうしても底に届かなかつたといふ類の話が附け加はつて居て、普通に機織淵はたオリの名を以て知られた傳説と、繋がつて居るものが東北地方などには多い。鳥根縣口碑傳説集に、隱岐島の安長川の蟹淵の傳説として載せてあるのは、又一つの別系統の例であつた。斧を瀧壺に落した木樵が、爰ではもう斷念してすごとくと歸つて來ようとする、美しい女性が出て來て後から呼びとめ、なくした斧を返した上に厚く禮を述べたと謂つて居る。年頃兇暴な大蟹が入り込んで、水の神を苦しめて居たのが、偶然にも木樵の取落した斧によつて足を斫られ、鐵氣の毒にあつて神の敵は自滅した。其功勞に報いる爲に、これより後は家の幸福を護つてやらうと



いふ約束があつたといふので、少なくとも子孫の者だけの、久しく信じて來た言ひ傳へであつたことが窺はれる。斧を淵に落すといふ昔話が如何に流布しても、それから斯ういふ種類の傳説を考へ出して、新たに信じ始めるといふことは不可能であらう。是には何か特別の起原があつて、聽く人記憶する人の心持次第、傳説ともなれば又只の昔話にもなつたものと、推測するのが最も自然なやうである。

或は又弘法水、土地によつては御大師井戸などいふ傳説があつて、我邦には殊に分布が弘く、先づ大抵の人が二つや三つは知つて居る。見馴れぬ旅の僧が村に入つて來て水を所望する。甲の村では女が機を織つて居て、手を止めるのが煩はしいのですげなく拒絶する。もしくは洗ひものをして居た汚れ水を汲んで出す。乙の村では女がわざ／＼機から降りて、遠くの井戸まで水を汲みに行つてくれる。この水は濁つて居て上げられぬから、遠くへ汲みに行きましたと謂ふのを聽いて、それは氣の毒なと早速もつて居た杖を土に突き立てると、清い清水が忽ち湧き流れて、永くこの通りと今でも其井戸があつて、村中が集まつて汲み、其傍には屢々大師の石の像などを祀つて居る處もある。旅僧は徴行の僧空海であつたと傳へて居るのである。水を拒んだといふ甲の村では、其報いだと謂つて水が悪く、近くに住む故にいつと無く隣の傳説を聞き知つて、名譽な話でも無いのに共々に之

を認めて居る。同じ種類に屬する傳説としては、九州には大根川だいこんがはといふものが多い。是も大根を洗ふ女が無慈悲で、行脚の僧の求めを拒絶した故に、今でも大根を洗はうといふ季節になると、此川だけは水が無くなつてしまふと謂ふ。若狭の水無し川なども是と同じ話で、やはり心掛けの悪かつたのは女、與へなかつた品は大根といふことになつて居るが、東の方へ來ると石芋・喰はず梨、又は團子石など稱して、團子の形をした小石のごろ／＼として居る土地も多い。何れも是は石ですとか堅くて食はれませぬとか、口實を構へて遣らずに置かうとした罰に、いつ迄もさういふものが残つて居るのだと傳へ、現に又裁ゑても作つても食べられるやうなものが出來ないと謂つて、梨や芋などは斷念して居る土地さへある。この不思議な旅人の物語は、弘法大師の出世よりもずつと前から、日本でも國々の風土記に録せられて居ただけで無く、搜せば外國の田舎にも幾らでも類型を見出すことが出来るが、事柄があまりに珍らしく、又原因と結果との繋がりが今風で無い爲か、大抵は更に一段の空想を取添へて、昔話の形にして之を興じて居る。我々の間でも、眼前に残つた證跡を見て、争はれぬものだと思ふやうな人は追々と少なく、やはり只斯ういふ言ひ傳へがあると、世間話のやうに説く者ばかり多くなつた。さうして又一方には、是から分れたことの明かな昔話もあるのである。我々が寶手拭といふ名で記憶して居る話も其



一つで、普通には昔々或處に、ある一人の旅僧がやつて来てと説いて居るが、時によつては是も何郡何村に、あつた事件のやうに言ふ者もある。主婦は心がかたましくて旅の僧に物を惜み、若い嫁又は女中が、そつと匿して施しをする。僧は行きがけに少しの布ぎれをくれる。又は片袖とか法衣の端とかを切つて渡したともいふ。その若い女は見にくい顔をして居たが、教へられた通りにその布で拭いて居ると、日ましに美しい顔かたちになる。主婦がわけを聽いて大急ぎで近在を捜しまはり、無理に連れて来て今度はうんと旅僧にもてなしをする。ところがちやうど舌切雀の重い葛籠も同じに、折角貰つた布ぎれで顔を拭いて見るが、段々と長くなるばかりで、しまひにはヒヒンと鳴いたなど、謂つて、座頭の坊たちは人を笑はせて居た。是はもう明かに傳説では無いのである。それからなほ一つ、此方は外國にもよく似た昔話が流布して居る上に、内容は又一段と傳説らしく無い。我々の間では弘法機といふ名で、この話と呼んで居る者もある。昔々弘法さまが貧相な乞食坊主に化けて、村々をあるいて居られた頃に、或家では心のすなほな女房が、機を織つて居た手を止めて、ねんごろに色々もてなしをした。御前は親切な人だから、果無しといふ仕合せを遣らうと謂つて出て行かれた。それから機の布を卸して巻いて見ると、いつまで巻いても布の長さは盡きない。端から其布を反物に切つて、家は大福長者になつた。それを美んで隣の女房が真似をしたが、先づ水でも汲んで来てから、ゆつくりと果無しの布を巻きましようと思つて、水桶を提げて歸つて門口で轉んだ。さうすると桶の水が果無しに流れて、その屋敷がしまひには池になつた。斯ういふ昔話は寧ろ御大師井戸の言ひ傳へが有名になつてから後の空想で、人が聽いて一段と面白がるやうになつたのであつて、たとへよく似たものが外國にあらうとも、是に基づいてはまじめな傳説は生れず、又まに受ける者も有り得なかつたのである。



機織淵又は機織池といふ名を以て、記憶せられる傳説も日本には至つて多い。土地によつて言ひ傳へは一樣でないが、その一つは五月機を織つてはならぬといふ女の物忌と關聯して居る。昔々田植の月に機の道具を背に負うて、水の邊りを通つて居た女が、どうしたわけでか水に墮ちて死んだ。それから以後は眞夜中に、又は雨の降る静かな日などに耳を澄ませて聽くと、水の底から機を織る音が聞えるといひ、素より幻覺である故に今でもどうかすると私は聽いたといふ人があり、従つて土地ではまだ之を只の話だと思ふ者が少ない。或は村の舊家に美しく慧しく、織機に巧みな少女があつて、水の神に誘はれて淵に入つたといふかたりごとくも數多く、是も空模様の變らうとする日などに、水の中で機を織つて居る音が、よく聞えるといふのが常である。社や寺の古來の縁起に、是を中心としたものがある外に、近代の小説がしばしば趣向を此方面に求め、積り積つて文學の古臭さを醸して居ることは、若い人たちは既に感じて居るであらう。しかし我々にはどうして斯ういふ傳説が始まつたか、實はまだ解けない大きな謎になつて居る。大抵まちがひ無しと思

ふ私の推定では、是は水の神の祭の奉仕者に、處女を任命して居た古い習俗の痕跡であつて、神の御衣の布を織るといふことは、御饌の飲食を調へることと共に、さういふ女の第一の役目であつた故に、之を人間の主婦の手わざと引き比べて、神の御妻といふ想像の生れたのも自然である。五月は水神の御力の最も強く、頼み又求められる田植時であつた。此月機を織つてはならぬといふ戒めは、専ら神の爲に彼女たちの布を織るべき季節であつたからで、之を民家日常の用に供するのを、禁じて居たことを意味するかと思ふ。ところが此信仰は時世の移り變りと共に、少しづつ弛み又衰へて來て、家々の愛情は人の子が神の御用に召されることを、怖ろしくも又不安にも感ずるやうになつた。さうして古くからの口碑に、次々の改造が加へられたらしいのである。その改造の幾つと無き段階が、日本にはすべて保存せられて居る。それを排列して見て細かな比較をすることの出来る國は、外にはあまり無いやうであるが、我邦の學問だけには幸ひにしてそれが許される。若い美しい一人の娘が水の神に娶られたといふ言ひ傳へは、一方の端では笑ふべき昔話となり、他の一方の端では歴史に近い確信となつて傳はり、なほその中間には無数の等差がある。名主莊屋といふ類の或舊家の娘のところへ、夜深く人知れず通うて來る若者があるといふのは、中世最も普通だつた婚姻の方式である。親はうすくは之を知つて居ても、ところ



現はしの日までは黙つて居るのが、是も亦昔の作法であつた。其うちに追々と娘は身もちになつた様子が見える。子の父は誰かと母が尋ねると、此あたりの人とは思はれぬ上品な青年であるが、まだ名も家も語らないといふので不審する。青い狩衣を着て來るとか、戸を開く音をさせぬとか、肌がつめたいとかいふやうな挿話が爰に伴なうて居る。それでは試みに苧環せたままの絲の端を、そつと其衣裳に附けて置いて見よと、教へる所までは古今共に同じで、それから後が物語の形は分岐して居る。或は其絲を針に通して、紋所に刺して置いたらそこが大蛇の眼であつたといふ話さへあるが、中世以來の多くの傳へでは、とにかくに水の靈は針の鐵氣の毒に中つて、巖窟の奥に返つて命を殞したとなつて居るのだから、此點はもう明かに大三輪の神話を改めて居るのである。しかも其苧環の長い絲をしるべに辿り辿つて神のありかを突き止めたといふ迄は、數千年の昔から少しも絶ち切れずに傳はつて居る繪姿であつた。立聽によつて神祕の世界の消息を知るといふ趣向が、是に續いて強調せられて居る。人が絲に附いて遙々と跡を追うて來たとも知らず、岩屋の奥では唸き聲が聞え、又ひそ／＼と問答の聲がする。それだからあの様にたつて止めたのに、由無い人間の娘などに戀をするから、斯うした悲しい目に遭ふのだと一方が謂ふと、いや／＼身はたとへ針の毒に傷けられて死なうとも、種は人間に残して來た。思ひ置くことは少しも

無いと一方が答へる。普通の昔話では、此處に又一つの趣向が添へられて居る。大蛇の母は死んで行く子の答を聽いて、いや／＼人間といふ者は中々賢い。もしも五月の菖蒲と蓬の葉を煎じて、それで行水を使はせたとしたらどうする。或は九月節供の菊を酒に入れて女に飲ませたら、胎内の子が皆下りてしまふでは無いかなど、謂ふことになつて居り、それを立聽して居た母もしくは乳母が、すつかり聽いて歸つて其通りにしたといふのが、多くの昔話の結末になつて居る。ところが一方に越後の五十嵐川の谷に於て、或舊家を中心にして語り傳へた話などでは、大蛇の計畫は絶望のもので無かつた。自分は斯うしてもう死んでしまふが、人間の少女には尊とい偉れた兒を與へて來たから、思ひ残すことは無いといふのを、立聽して歸つて來る。さうすると果して此地方一流の勇士、五十嵐小文次は此家から生れたといふのである。源平盛衰記にも載つて居る豊後の花の本、緒形氏一族の元祖の物語も、全く是と同じい著名なる傳説であつた。今も日本全國に亙つて繁榮し、中世には九州一角の歴史をさへ左右した武人の一族も、曾ては自分たちの家の由緒として斯ういふ傳へを信じて居た時代があるのである。紀州の或村ではその村長の美しい娘が、自ら山中に入つて神の夫と問答したといふ例もある。宮古島の漲水御嶽(ハリミゾオタケ)の歌縁起では、龍蛇と人との間に生れた童女が、父を尋ねて角を攀ち頭に登つて嬉遊したとも



傳へて居る。もしも是が昔話に説く如き、怖ろしくも又氣味の悪い一つの災難であつたら、家に其様な傳説を保存して、永く世上に誇つて居た理由は無いのである。

或はどういふわけで或一人の美しい處女が、特に水の神の嫁君に指定せられたかといふ點に、力を入れて説かうとするものがあつて、是も特定の舊家だけは傳説として久しく之を信じ、信じ得ない人々は又昔話として、面白く空想を展開せしめて居た。近頃世に出た福井縣の南條郡誌などは、その誠に興味多い一例であつて、大蛇の妻になつて池の底に入つたといふ同じ一つの言ひ傳へが、甲の村では或家の昔の出來事として歴史のやうに取囃され、乙丙の土地では昔話の形を以て行はれて居るのが、隣どうし竝べて採録せられて居る。噂に聽いた人も多からうと思ふが、此郡の山奥、美濃國との境村に夜叉が池といふ物凄の大池があつて、今でもよく／＼の早年には、農民が雨乞に行く場處となつて居る、又天氣が荒れることを恐れて、刃物を持つた人が此池の近くを通ることを嫌ふといふ風説もある。或舊家の一人娘が、夜叉が池の神にとついだといふ傳説の、最も早く書いたものに現はれて居るのは美濃の方であつた。父は安八太夫といふ一郷の富農であり、娘の名は夜叉御前でそれから池の名が起つたともいふ。爰で珍らしいと思ふことは其夜叉御前が、一年に一度日を定めて、生家に還つて來ると謂つて居たことである。是と根源が恐らく一つ

であらうが、東近江の村々にも又何箇所かの夜叉が池があつて、やはり清らかなる少女が里人の悩みを濟ふべく、自ら身を淵の底に沈めて神の怒りを和げたといふイハレを存する。越前の側にも某村の孫右衛門とかいふ舊家に、さういふ娘が出て生家を有名にし、又繁榮させた話がたしか新著聞集の中に出て居る。乃ち何れも皆稻作の田の水を程よくする爲に、水の神の心を取結ぶ必要から發したやうに、考へられて居たらしいのである。昔話の中にも此點はなほ往々にして保存せられて居る。昔々ひどい大旱の年に、或一人の百姓が水を見まはりに出て、あゝどうかしてこのひゞわれた田に水を掛けてくれる者があつたら、三人ある娘の一人をくれるにと獨り言をいふと、知らぬうちに一面の田が、漫々と水を湛へて居る。驚いて歸つて來るとその次の日、青い狩衣に折烏帽子といふやうな颯爽たる若者が一人、玄關に案内を乞うて拙者は聲でござる、約束の娘御を迎へに來ましたといふので、さてはと思つて周章狼狽する。所謂大蛇掣入の昔話には、斯ういふ發端をもつたものが今でもまだ稀でない。ところが他の多くの例では、爺が輕々しい約束を誇張するの餘り、或日田の水を見まはりに行つて、蛇が小蛙を追掛けるのを見て、やれ無慘や、呑むな娘を遣らうなど、ちよつくら約束してしまつたことになつて居り、其代りにはあとで蛙が恩返しに娘の厄難を救つたといふ點は、山城國蟹滿寺の古縁起と近くなつて居る(註)。我々が大



蛇と謂つたのは池の主、即ち水の底に住む靈物といふことで、人が幻しにもめつたには見ないものである。たゞ蛇の形に近いやうに想像した爲に、中世以後此様な名が出来たに過ぎない。だから九州などには河童の掣入、奥州には田螺の掣入など云つて、ほゞ同じやうな水貰ひの昔話があるのであるが、其以外にもう一つ、今日非常に人望のある猿掣入といふのも、同じ系統から分れ出た昔話であつた。此方は笑話であるが故に出来るだけ頓狂に、たとへば爺さんが粟畠の草取をして居て又は牛蒡を抜きに出て、やれ腰が痛い、誰ぞ助けてくれるなら三人ある娘の一人を遣るにといふ。畠の畔の木から猿が下りて来て、爺さんわしが手傳はうといふなど、發端から笑ふやうな話しぶりにもなつて居るが、それでも稀には近江や佐渡にもあるやうに、老翁が山田の早魁に、稻が枯れかゝつて居るのを見て愚痴な獨語をすると、娘をくれるならわしが水を當てゝやらうと、猿が田の畔に立つて小便をしたら、忽ち水が一ぱいになつて稻の葉が蘇つたといふやうな、有り得べからざる不思議を説いて居るものもある。何れにしても掣が猿だとあつては爺も困り、三人ある娘の姉も聽かず仲も承知せず、末の一人だけが幸ひにすなほな子で、私は猿のお嫁に行きませんが、嫁入支度には白を一つ下さい、もしくは水甕を一つ下さいと謂つて、それを猿の掣に背負はせてさつさと山に入つて行く。崖の櫻とか藤の花の盛りの枝を所望して、猿に木

登りさせるとしまひに枝から落ち、白なり甕なりに水が入つて、ぶく／＼沈んで行くのを見て遁げて還つたことに、今ある多くの昔話の結末はなつて居る。是は如何にも自由な空想のやうに見えるが、大蛇掣入の方でもこの白や水甕の代りに、瓢箪を千箇と針を千本、嫁入荷物として持つて行くといふ形にもなつて居る。いよ／＼池の岸に来てさあ是から入らうといふ時に、その瓢箪を残らず水の中へ投込んで、是を持つて行かなくてはならぬといふと、大蛇は泳ぎまはつてそれを沈めようとするが一つも沈まない。さうして疲れ弱つて居る處へ、千本の針をばら／＼と投げる。それが一つ／＼鱗の隙間に刺さつて、大蛇の掣は死んでしまふのである。曾て苧環の長い絲の端に、たつた一本だけ通して居た針が、こゝでは千本になつて水の掣を必死にして居る。瓢は恐らく猿掣入の白や水甕の原型であらうが、どういふわけがあつてか上代の川の神の祭の供物の一つとなつて居る。六月の天王さまの日に瓜を川に流し、又は其日以後もしくは其日まで、瓜を食べてはならぬといふ慣習、或は水の恠が胡瓜を好み、もしくは忌み嫌ふといふ各地まち／＼の俗信なども、どうやら關係が有るらしいが、まだ確かなことは言へない。少なくともこの昔話の瓢箪を投込んで、水の靈の力を試みたといふ話だけは、非常に古い時代から始まつて居る。日本書紀の茨田まただの連杉子むしきり、二つの全匏を水中に投げて、もし眞の神ならば此匏を沈めて見せたま



へ、匏沈まずば偽の神と知らん、何ぞ徒らに吾身をうしなはんやと謂つたのが其一つの記事であり、又備中の縣守淵あふたりのふちの由來として、三つの全匏を投じて水中の虬みづちを試み、虬は鹿に化けて匏を引込まうとしたけれども沈まなかつたといふことが、同じ仁徳天皇紀の末の條にも見えて居る。瓢箪は其頃から既に水の神の眞偽を確かめる手段として用ゐられて居たのである。昔話の大蛇掣入に、其數を一千にもふやしたといふことは、それ自身が水の神の信仰の絶縁を意味して居る。

しかも民間に在つては、是が必ずしもたつた一つの此話の結末ではなかつたのである。考へて見てもすぐ氣がつくやうに、三人ある娘の、上二人は親の意に背いて、嫁に行かうとしなかつたのに何の罰も無く、一方おとなしく大蛇の所へでも、とゞ様が行けと言はつしやるなら行きますと言つた末の娘が、瓢箪を池へ投げ込んでたゞ遁げて戻つたといふだけでは、昔話としても少しく釣合ひが取れない。だから又信州上伊那郡などの同系話では、嫁掣仲よく三日目の里歸りに、美しく着飾つて遣つて来て、親の言ふことを聽かなかつた二人の姉たちを羨しがらせたといふことにもなつて居るのである。相手がしまひまで大蛇であつたら、此様な幸福なる婚姻は望むべくもない。話の中には今は言ひ落して居るが、元は最もすぐれて貴といふ掣君が、假に怖ろしい姿を現じて妻問ひをして居たのだとい

ふ一條があつたものであらう。西洋ではグリムの説話集などに、蛙の王子といふのが是に該當する。日本でも古くは大和の箸塚の物語の如く、神が錦の小蛇の形を以て、姫の櫛くしの中に居たといふ語り方もあり、又現在でも東北地方の田螺の長者、もしくは九州各地にある蛙の掣が湯に入つて人間になつた話のやうに、最初は何か理由があつてさういふ人並でない者の姿をして居たのが、忽ち新妻の力によつて、立派な若者となつて楽しく榮えたと説く例は幾つかある。獨り傳説が名家の誇りとして、この奇恠なる婚姻を記念して居るのみでなく、昔話の方でも亦斯ういふ風に、所謂大蛇掣入の結果が、孝行娘の爲にも又その親たちの爲にも、幸福なものであつたと説くものがあつたらしいのである。それが民衆の趣味と合はなくなつて、話は排撃とか征服とかの方向へ變つて來たけれども、なほその事件の前半分を並べて見て、是と傳説と雙方もとは同じ種であることを疑ひ得る者は無い。さうして日本はこの比較資料の、特に豊富に保存せられて居る國、即ち又傳説の問題を、最も自由に研究し得られる國なのである。

(註) 元亨釋書に出て居るので古くから有名であるが、同じ傳説は今も諸國に行はれて居る。蟹に食物を施して居た女が、その報恩によつて大蛇に取られる厄難を免れる話である。



傳説と昔話と、二つはしばしば題材を同じくし、又甚だよく似通うた敘法を以て語られる故に、それ故に特に其境目をはつきりとして置く必要がある。といふわけは根本に肝腎かなめともいふべき相違があつて、それを無視して居ては二つとも、到底その成立ちを考へることが出来ぬからである。前にも述べたことだが今一度要約して言ふと、第一には傳説は人が之を信する。昔話の方では「昔々あつたさうな」、「舌を切つて放したといふ」、其他ゲナとかチフとかを必ず附け加へて、自分は決して實驗者では無いのだから責任を負はぬ。もしくは只さういふ噂だから信じない方がよいといふ意味を、むしろ丁寧すぎる程も反復して居たに反して、傳説の方はうそだらうといふと時には怒られる。但し以前は知つて居る者だけは皆信じたといふ時代もあつたかと思ふが、近頃は信する人の數に限られようとして居る。同じ一家のうちでも老若によつて態度がちがひ、又一般に中心から遠ざかるにつれて、其紹介が冷淡になり、殆ど昔話と同様に「さうな」を添へて話す者も今は多い。乃ち傳説には中心のあることが第二の特徴であつて、是も最初からのものと思はれるが、

此頃更に顯著になつて來たのである。傳説の中心には必ず記念物がある。それは當然に神社佛閣塚墓その他の靈地、家も本家だけとは信仰の機關でもあつた故に、それ／＼に傳説の花壇ともいふべき地位を占める。村が一つの中心になつて居るのも、この發生地の外廓としてあり、奇巖老木清き泉、橋とか坂とかの一つ／＼も、元は大きな織物の一模様の如きものであつたらうかと思ふが、現在は多くは獨立して或傳説の記念物となつて居る。記念物が存在するからには其傳説は確かだといふ推理法は、もはや一般には承認せられて居るわけで無いが、とにかく物が眼の前にある限り記憶には絶間無く、その記憶は又信じて居たといふ記憶でもあつたので、一方の何處へでも持つてあるかれ何處にでも通用して、たゞ新らしさをかきさすによつて珍重せられて居る昔話とは、はつきり區別することが出来たのである。

傳説の定義として擧げ得べき第三の點は、是もすべての信仰と同じやうに、人に説き明すのに定まつた形が無いといふことである。昔話も今では敘述の長たらしいのを嫌つて、單に要點だけを拾ひ上げて紹介する者が多くなつたが、以前は「日本一の黍團子」でも、又は舌切雀の「お宿はどこぢや」でも、ちやんと順序があり言ふべき言葉がきまつて居て、それが一つ落ちて逆になつても、幼ない聽手などは聽く方からちがふと謂ふ。わざとちが



へて言ふとすれば、又一つの別の昔話になるので、其點は寧ろ手鞠唄や盆踊のくどきといふものに近かつた。之に反して傳説は、知り且つ信ずるといふ心のうちの働きに過ぎぬ故に、同じ話主でも相手と場合により、幾通りにも言ひかへることが出来る。老人や女性の固く信じて居る者ほど、却つて言葉少なに問はれたゞけを答へようとする。それを今まで豫想もしなかつた人々に、合點の行くやうに説き聽かせようといふことになつて、始めて前後の説明を添へ、又は切れぐのものを繋ぎ合せる類の技巧が試みられる。三百年來の寺々の縁起などは是に屬するが、口で語らうとする場合にも、後世はやはり多少の加工を必要とせぬ者が無いやうになつたのは、つまりは傳説の表現が夙くから自由であつて、是非ともこの形式を以て語らねばならぬといふ、何等の約束も無かつた結果である。人が昔話を聽くことを楽しみにして居たと同じ晩に、輕々しく土地の傳説をまじへ語るやうになつて、もしくは傳説の夕ともいふべき時刻に、昔話までを持出す風が始まつて、一方が他にかぶれて來たといふことは確かにあるが、獨り兩者の話し方が紛らはしくなつたのみで無く、話の筋にも互ひによく似たものが此通り多いのだから、兩者の境目は紛れやすかつたのである。しかしさういふ中でも昔話は古び且つ侮られてゆくに反して、傳説は幾分か久しく残り止まらうとする傾きがある。だから旅人の來往が繁く、又は遠征冒險が盛んに

なつて、只の所謂世間話が面白い時代になると、昔話は引込んで、傳説は又その世間話にかぶれる。政治や社會問題の關心が熾ばたの話題を彩どるやうな地方でも、傳説の信仰がなほ續いて居る限りは、是が又新たな方式を以て、所謂有識者の論議の種ともなるのである。近年の短篇文學、殊に郷土の歴史小説の流行が、しばしば傳説を餌の棒のやうに引伸ばしたことは、我々の記憶に新たな事實である。彼等は何かといふと農夫やその美しい娘に名前を付與し、又その問答を會話體に書かうとした。傳説は昔話でないから、昔から會話などは傳はつて居ない。それが斯ういふ形で世に行はれるやうになつたのも、やはり其表現に定まる方式が無かつた結果である。

或は傳説の第四の特徴としてもう一つ、「歴史になりたがる」といふ點を擧げなければならぬやうに、思つて居る人もきつと有るだらう。いかにも傳説の或一つの部面だけを見て居ると、是はたしかに看過することの出来ない現實であるが、しかし傳説の數は日本には非常に多い。其種類も亦色々に分れて居る。弘く全體を見渡した上から推斷するときは、寧ろ徐々として歴史から遠ざかつて行かうとする傾向の方が強いのである。一方には少なくとも土地人の眼から、歴史と一つになつて何處を境とも、見分けられなくなつたものも有るには有るが、是に對してすつと數多くのものが、今や永年の管理者の子孫によつて、夢



だ空想の美しいものだと、解せられ咏歎せられようとして居るのである。歴史がまだ文筆の士の手にかゝらず、均しく記憶によつて保持せられ、口から耳へと受け継がれて居た時に溯つて考へて見ると、是と傳説との差別は、實はどこにも無かつたのである。傳説も昔或時、めい／＼の祖先が直接に目で視、手で探つた實驗であつて、それをよく覚えて居て語り傳へたのだと信じて居る上に、それと同じ形の言葉で説くのみだから、是をも歴史と認めたと何の不思議も無い。乃ち以前は却つて「歴史になりたがる」必要などは無かつたのである。然るにいよ／＼紙の上に、文字を以て書き残して置かうといふ企てが始まると、漸うにして茲に人間の辨別が働くやうになつて来る。或事件は既に數十代の記憶を重ねて居るに拘らず、疑ふ餘地も無い重要な實歴であるが故に無論載録する。又或ものは是に伴なうて、夙くその當時の人々に斯くありと信ぜられて居たといふことが、明かなる事實であるが故に是も亦大切に存置する。この用意は普通今日の人には望み難いことで、深く我々の感謝しなければならぬ親切であつたが、彼等はなほこの以外に、多くの雜然と並び行はれて居る言ひ傳へを、或は後になつて新たに生れ、もしくは著しく改定せられたかと氣遣つて、知りつゝもわざと書物の圈外に置かうとしたらしいのである。その中には信する人があり又中心の記念物があつて、明かに傳説としか呼べないものが幾らでもあつた。

傳説に定まつた形が無く、時と共に成長するものだといふことを、今ある比較研究の方法に依ること無しに、別に古人は經驗する機會をもつて居たので、是と歴史とを區別する必要を認めて居たのである。史學といへば何やらむつかしくも聽えるけれども、是が必然なる人の智能の進みでもあつた。智能が進めば信仰も之に伴なうて改まらなければならぬ。それに支持せられて居た傳説だけが、獨り形を變へずに居られる筈は無かつたのである。

地方の舊家門閥と呼ばれる家々では、文字を基調とした近世の教養を受けてから、次々に家傳由緒書の類を子孫の爲に書き残すことになつたが、是にも亦何人の勸説をも待たずして、おのづからなる史料の選擇が行はれて居た。同じく先祖の時代にあつた出來事として記憶せられて居るものゝ中でも、自分と周圍の者のみは牢く信じて、他人は必ずしも之を認めぬかと思はれる部分はわざと省き、もしくは少なくとも斯く語り傳へて居ると、豫め明示して之を載せて居る。さうして主人の學問の風によつては、更に若干の自分にも信じ難いと思ふものを取除いて、それだけは家族門黨の昔風な保管に、委ねて居る例を折々見かける。乃ち或種或階級に屬する傳説は、決して歴史の方へ接近して行かうとはせず、寧ろ反對の趨勢に向はうとしたものが、もう大分前からあつたのである。記録と全く交渉をもたぬ人々の傳説でも、尙且つこの歴史との對立を許す傾きがあつたのを見ると、或は



是が本來の性質であつて、たゞ新らしい社會の狀勢に動かされて、急に一段と顯著になつただけかとも考へられる。異なる經驗ちがつた感情をもつ者が、めつたに接觸することのなかつた時代には、問題は起らずにすんだ。一たび複雑なる心の交通が開けると、一方には成るべく多數、出来るならば全部の承認を得ようと思ふやうな傳説が、幾つと無く抜き出されると同時に、他の一方には今まで抱へて居た當人すら之を信することを斷念し、外側から世間の人々と共に、興味深く眺め且つ楽しむやうになるものが、又若干は出來て來るのである。傳説を以て歴史と文學との混合體のやうに、考へることは無論正しくない。しかも片方の端が歴史と近くて時としては其境が紛らはしく、他の一方の端は文學に接して居て、しばしば其中へ移り動かうとするまでは事實であつて、其兩端の距離は世の中の開けて行くと共に、次第に遠く伸びるといふこともほど確かである。或は斯うして伸びて居るうちに、しまひには切れるのでは無いかとも思ふが、少なくとも今はまだ繋がつて居る。さうして又盛んに成長し變化して居るのである。傳説を觀察する者にとつて、後にも先にも斯んな都合のよい時期は無いやうに自分には思はれる。

## 七

この歴史と文學との中間といふ言葉は、ちよつと耳に響くから標語として用ゐて見たが、是が正確に當世の文學、乃至は歴史と謂ふものと、合致するとまでは私には保障することが出来ない。寧ろやゝ漠然と信仰と空想、もしくは「おのづから」と作爲との中間と、言つて置く方がよいのかも知れない。とにかく如何に衆人が信じて感はなかつた時代にも、傳説は外に在つて之を承認しなかつた者が少々は有り得たと同時に、他の一方の端即ち昔話と最も近いものでも、自分等だけは眞事と心得て、うそを感歎して居た者は小兒のみとも限らなかつた。乃ち雙方は下に隠れて行き通ふ溝の如きものがあつたので、たとへを引くならば露の葉と露のとう、又は杉菜と土筆とのやうに、單に季節の早い晩いによつて、斯ういふちがつた形で我々の目にはとまるのである。元は一つの根の伸び榮えて來た跡であるといふことが、特に研究者の興味を深くする。人の性情と是に働く世の力と、この二つのものが爰でも大きな仕事をして居る。それを現在はまだはつきりと見ることが出来るのである。



大體の趨勢は時の進むと共に、次第に兩端の間が遠く、繋がりは弱くなつて、しかも文藝の分子が表に出て、濃く彩どられて来るやうに思はれるが、日本はそれでもまだこの變遷の、よほど緩やかな國である。我々の周圍には無數の過渡期が見られ、或は以前の動かない確信の方へ、もう一度戻つて行かうとする試みさへ折々は見られる。私たちの謂ふ所の歴史との距離が、元は今よりもずつと近いものであつたことが、是によつて推測し得られるだけで無く、傳説は本來之を信ぜんが爲に、又信する人々の手によつて保管せられるものであつたことが、段々と判つて来るのである。出来るものならば自分も共々に信じたといふ心持は、今でもまだ一般にと言つてもよいほど、弘い區域に亘つて行はれて居る。輕々しく人の信じて居ることを疑ふまいとするのは、必ずしも單なる社交上の禮儀のみではない。多くの場合にはこちらの方にも、亦別種類の若干の傳説を抱へて居て、それを自分等ばかりで大切に居たゞけでは物足らず、成るべくは人からも粗末にせられぬやうに、互ひに認め合はうとする下の動機も、手傳つて居るらしいのである。それ故に個々の傳説には既に問題があり、釋き切れない不審が指摘せられて居るに拘らず、國總體としては、傳説はまだ信じ且つ認めなければならぬものゝやうになつて居るかと思はれる。永く其様なはつきりとせぬ状態に、國民の知識は止まつて居られるものでない。乃ちこの研究

のやがて大に起るであらうことを、自分たちの豫想して居る所以である。

過去に傳説が今よりも一段と自然に、たやすく信ぜられた事情が幾つもあつて、其事情がもう消え失せようとして居ることを、先づ初めに注意して置く必要がある。一つの最も興味深き變化は、「昔」といふものに對する考へ方で、是が單なる時の距離では無く、「今」とは全く類を異にした法則の、自在に行はれて居た世の中であつたといふ想像が、何よりも傳説を信じやすくして居た。古い記録には、「草木ことゝふ」などいふ文字もあつて、人と自然の木や鳥獸との間にも、意思を通ずる道が昔はあつたと、思ふことが出来たのである。さういふ安らかな、印象の強い言葉は既に忘れられたが、我々の間にも昔ならばさういふ事があつたかも知れぬといふ心持が、今なほ少しばかりは残つて居る。しかも一方ではいはゆる昔話は之を口實にして、特に信じ難い奇譚を説く時には、わざと大昔だの「ずつと昔のその昔」だのといふ言葉を用ゐて、非常に「今」からは遠い時のやうに語つて居たが、沖繩の神歌などでは、屢々ムカシの對句として、ケサシといふ語を用ゐて居る。ケサシは後に今朝といふ意味になつたケサと同じであらうから、さう遙かな過去では無い。ムカシも語の起りは多分ムク・ムカフと一つで、もとはたゞ現在と對立して存するものゝやうに考へられたのであらう。それが主として其「ムカシ世の始まり」をのみ説き立てる習



はしとなつて、次第に今との隔たりが大きくなつたらしいことは、琉球神道記などに現はれた土地の祭の沿革からも窺はれるが、それでもまだ南の島々の神代はよほど近世に近かつた。時を算へる多くの目安をもたぬ人々が、昔を目前の親しみあるものゝ如く取傳へて居たことは、沖の島も山あひの静かな村里も同じであつたらう。乃ち最初に兩者の間を引離した力は、我々の年代記の知識であつたといふことが言へるのである。

歴史の學問が精確になればなる程、元の姿のままでは信じ續けられない傳説が多くなつて来る。殊に我邦では修史局の學者たち、たとへば久米邦武翁などが、出雲民族に對する外交とか、經津主武甕槌二神の戰略とかいふことを言ひ始めて、古代の言ひ傳へを普通の人事と認める類推法が盛んになつた。いくら大昔でも其様なことは有らうと思はれぬと、素朴な記録の文をその儘は受入れようとせず、寧ろ其背後に隠された政治上の大事件を、判讀しなければならぬものゝ様に、主張する人さへ多かつた。斯うなれば勿論傳説はすべて歴史となり、少なくとも記録の上からは一掃せられるであらうが、如何に亂暴な臆測を下しても、あらゆる傳説から第二の意味を見付け出すなどいふことは出来るわざで無く、第一に又そんな假託をしなければならなかつた理由といふものが、昔あつたらうとは考へられない。殊に文書にこそ定まつた管理者は無いが、家々に取傳へた傳説はそれ自身が説

明である。今更それは斯ういふ事實を暗示して居るのだと言つて見たところで、承知する氣遣ひはないのである。昔を今日とまるでちがつた社會だと認めることが出来なくなつて、まごつき又悩んだのは傳説を守つて居る人たちであつた。自分等が祖父母から、聽いて覺えて居ることには誤りの餘地が無い。しかも一方には歴史の次々の教育が、急に「有り得べからざること」の領域を擴張して来るやうに感ぜられる。是を或祕密の暗示だといふやうな、學者くさい解釋は素人には出来ない。だから一部は性急に概括して古い言ひ傳へ、老人の說いて聽かせようとすることを輕蔑し、他の半分のなほ何とかして信じて居たいと念する者は、僅かな隙間を見つけ許される限りの修飾を加へて、ちつとでも信じやすい形に傳説のかたり替へをしようとし、茲に他の國々では恐らくは類の少ない、第二の合理化といふことが始まつたのである。



人が傳説を出来るだけ信じやすい形にして、いつまでも信じて居ようとする念慮には、同情しなければならぬ眞剣味があつた。祖先は無意味に有りもせぬことを記憶し、又語り残す筈が無いといふ心持は、時あつて近代教養の所得、我々の名づけて常識と謂ふものによつて脅かされる。その常識と今までの確信とを折合はせ共存させることは、固より自己の利害であつて、外部の思はくなどを顧みた結果では無かつた。だから變化の跡によつて判断すれば、確かに傳説の改定と見るべき場合にも、當事者は寧ろ之を補充と考へ、もしくは今まで隠れて居た點を、明瞭にし得たとも思つて居る場合が稀で無い。以前の傳説はそれ程にも單簡で言ひ残した部分が多く、拔きさしの可なり自由なものであつた。それが人の名は明かになり年代がきまつて、追々と具體的に歴史と結び付くことになつたのは大きな變化であつた。之をも傳説の成長と謂つてよいか否かは問題であるが、とにかく爰まで進んで來るともうこれ以上には變へられず、又元あつた形にも戻つて行くことが出来ない。少なくとも之を一つの固定の状態として、新たな比較をして見る事が許されるのである。

例を搜して見ようとすれば、もつと多くの適切なものであらうと思ふ。私のふと心づいたのは宮城縣の南部、刈田郡宮村の式内刈田嶺神社を中心にした一團の言ひ傳へである。この御社の信仰は今もまだ少しも衰へて居ない。近世は參詣者の便宜の爲に、里の宮の祭を主とするやうになつたが、以前は一年を半分に分けて、山の宮からの往來の日、四月と十月の八日に祭を營むことにして居たのは、なつかしい古式であつた。藏王といふ名で世に知られて居る高嶺は、此あたりから最もよく拜まれ、殊に古來の官道に接して居た故に、遠近の語り草となつて居たものと思はれる。この御山に祭る大神を父の宮と崇め、里近く齋いははるゝ西の宮・子の宮を御妃王子として、年々御通ひなされるやうに信じて居たことは、二荒その他の山の信仰も同じだつたらうと思ふが、爰ではいつの頃よりか日本武尊が、東征の旅の途すがら、やゝ暫らく淹留なされたといふ傳説が行はれて居る。神の御妻はこの土地の人であつた故に、都に御伴して行くことが出来なかつた。一人ある美しの御兒を、悲しみの餘りに川に投げ棄てると、靈異の御生れとて忽ち白鳥に化して、遠く西の方に飛び行きたまふとも傳へて、兒投川・長袋等の地名が其昔の跡といふことになつて居た。會ては語りものがあつて特にこの別離の條を咏歎して居た名残かとも思ふが、その詞章はも



う保存せられて居ない。奥羽觀迹聞老志の記する所によれば、菟田宮の祭神を日本武尊にしたのは、吉川惟足（よしかわ）が始めださうである。それを確かめることは容易でないが、少なくとも此人などが世に尊敬せられて居た時代に、京都の學者に頼んで御社の縁起を書いてもらひ、それに始めて日本武尊の御名が掲げられた、といふまでは想像し得られる。其以前は又よほど久しい間、用明天皇の御妃を祭るといひ、又は其王子の御魂、化して白鳥と現じたまふものを祭ると謂つて、土地には今なほ之を説く人もあるから、此改定は専ら文書の上に行はれ、口碑は寧ろ古いまゝを引繼がれたものが多かつたかと思はれる。隣の柴田郡の方にも同じ傳説は及んで居る。こゝにも大高山神社、民間に白鳥大明神といふ古社があつて、封内風土記の編纂せられた元文の頃までは、土地では普通には用明天皇の皇子を御祀り申すといひ、別當寺にある縁起だけが、日本武尊といふことになつて居た。さうして民間には新舊を通じて、たゞ一通りの語り傳へしかなかつたのである。この御社から近い金ヶ瀬（かみせ）の小豆阪（あまのさか）といふ處に、昔萬能長者といふ有徳の人があつた。或すぐれて尊い御方が遠い都から遙々と御下りなされて、この長者の聲となりたまひ、神々しい若君御誕生の後、京に御還りあつて三年が間何の音信も無い。それを歎き悲んで命死なんとしたまふ際に、御母はその幼ない君を、祝して川の流れに投げ入れたまへば、乃ち白鳥と化して飛び去り

たまふといふ點は、菟田の宮の方に傳へたのも一つであつた。さうしてこの白鳥の奇瑞といふことは、兩處の信仰の最も主要なる部分であつた。つい近頃になるまで此地方一帯に、非常に白鳥を崇敬して其飛翔を見ても拜をなし、追うたり捕へたりせぬは勿論、たま／＼誤つて其肉を食へた者と合火（あひび）しても、忽ち大熱を發し又は口中が腫れ痛むとさへ畏れて居たのも、全く神が時あつて此鳥の形を假りて、去來したまふことありと信じて居た結果と思はれる。京都の神道家たちが用明天皇説を有り得べからざることゝし、白鳥といふからには東夷を征伐なされた日本武尊の御事なるべしと、考證したのは歴史の知識であつたが、奈何せん皇子の御墓所について語り傳へて居る白鳥はシラトリで、しば／＼立居をする鷺（うさぎ）などかと思はれるに對して、この奥州菟田嶺の麓の白鳥は、ハクテウ即ち鶴（つる）といふ大きな鳥のことである。津輕小湊の雷神様を始めとし、東北には今でも毎年この白鳥の渡つて來る場處が幾つかあつて、土地の人の感覺はどれも一樣に、程度はちがふか知らぬが皆之を靈異視して居る。さうして是を日本武尊の東征と結び付けて考へて居る例は爰だけにしか無いので、それには今一つの誘因があつたからかと思はれる。

用明天皇がまだ御位に御即きなされぬ頃に、遠く奥州に御下りなされて、稍久しい御滞留があつたといふことは、今から見ると一段と信じ難いことであるが、是にはなほ色々の



言ひ傳へが附いて居て、其來由を説明することが出来る。たとへば江戸時代の始め頃に、金ヶ瀬の惣兵衛といふ家の先祖の者、林の大木を伐つてその空洞の中から、古い一つの笛を見つけたことがある。土地の人々は是を山路さんろの牧笛だと謂つて、永く持傳へて居たといふことが封内風土記に見えて居る。この山路の草刈る夜の笛といふのは、有名なる中世以來の舞の曲であつた。國中第一の美女を御妻に得たまはんが爲に、牛飼の童に姿をかへて遙々と御下りなされたと説く物語は、多分は三輪山系統に屬する古い神話の名残であつて、是を用明天皇の畏れ多い御名に繋げるやうになつたのも、決して單なる文藝の趣向ではなく、本來は神と人間の清き少女との婚姻によつて、世にもすぐれたる聖の御子の誕生があつたとのみ説いて居たのを、然らば必ず聖徳太子の御事であらうと解釋して、乃ちその御父君の遠い御旅寢を、語り傳へるやうにもなつたものかと思ふ。日本の民間の言葉では、君にも神にも共通の敬語が多かつた。それを漢字で書き現はすやうになつて後も、なほ宮とか王子とか御幸とかの、無差別に使用せられる名目が幾つも残つて居る。歴史の知識がやゝ進んで、所謂合理化の必要が感じられると、寧ろ斯ういふ誤解は起り易かつたのである。しかも此誤解の如きは或一つの土地だけに孤立して起つたものでは無かつた。遠く九州の山間の村に於て、宇佐の信仰を中心として先づ唱へられ、それが印象の深い文藝に化

してから、追々と東の方へ流布して來たものであることは、神の御妃の名を玉倚姫、其父の名を萬納長者、又は山路の牧笛といふことを、人が容易に心づいたのを見てもわかる。さうして同じ物語の断片として傳はつて居る處は、まだ何箇所か奥羽地方にもあるのである。この問題に就ては海南小記といふ本の中に、「炭焼小五郎のこと」といふ見出しで詳しく述べて置いた。それを見て下さると私一箇の空想で無いことがわかる。



## 九

それからもう一つ、歴史の學問が段々と進んで、古い解釋を守つて居たのでは、到底信じ續けることが出来なくなつて、後に再び傳説を説明しなほした例が、やはり爰から餘り遠くない會津の山の中にもある。越後東蒲原郡の中山といふ奥在所、ちやうど會津との境の御神樂岳みかづらだけの麓に、深山には珍らしいやゝ大きな古塚があつて、土地の人は是を高倉天皇の御陵だと傳へて居た。天皇は世の中の亂れを御厭ひなされて、伊豆守仲綱といふ武士を召し連れたまひ、潛かに此地に行幸あつて數年の後、御隠れなされたと稱して、其從者の末といふ者が十數戸、祖先の誇りをもつて今もそこに住んで居る。御廟山みびのやま・御所平ごじよだいらその他數々の地名は後に附けたとも見られるが、土地の人々の注意せず居られなかつたのは、塚の傍に御所車の形をした石の工作物があつて、其左右に彫り添へた車の輪が、十六瓣になつて菊の紋に似て居たといふ。かゝる山奥に石工の技藝の跡を見ることが、既に珍らしい事實であつた上に、この意匠は確かに又尋常に異なつて居る。それ故に高倉天皇の御陵といふことは、何分にも信することが出来ないが、多分は御兄弟の高倉宮、以仁王の御事

であらうと、弘く外部の人たちが考へ始めて、之に關する著述などが出てからでも、土地の住民や關係者だけでは、なほ前からの傳へを改めようとしなかつたのである。此事は温故之栞といふ越後の本にも見えて居る。或は二通りのちがつた口碑があつたのかも知れない。越後の方にも五十嵐川いごらしがはの上流、有名な八十里越、その山道に接した吉が平よしがひらの附近にも、點々として御遺跡といふ處が多く、蝶名林ちようなばやしの舊家には高倉を苗字とする家もあり、すつと離れた頸城の高倉村にも、高倉天皇の御妃、故あつて爰に隠れ住みたまひし故にこの村の名が出来たといふ傳説もある。ところが一方に會津の方面で主張するのは、以仁王は宇治川敗戦の後、近江の信樂しんがきから東海道に出て、甲斐信濃を経て上州の沼田へ、それから尾瀬沼ぬま・檜枝岐ひのえまたを越えて、段々と今の御藏入みくらいりの方へ入つて行かれたと、まるで其頃の日記でも残つて居るやうなことをいふのである。宮城三平といふ人の高倉宮以仁王御墳墓考といふものが、北越史料叢書の名の下に印刷に附せられて居る。是が最も有力なる近世の考證であるが、數十年も前から少しづつは京江戸の學者にも知られて居た。續群書類從にも採録せられた會津高倉宮勸進帳といふ文書が、或は村々の傳説合理化の元祖ではなかつたかと思ふ。明應九年書記する所とあるけれども疑はしく、文體は幕末の日本外史式ともいふべき漢文であつた。其大要を見ぬ人の爲に抜書きすると、高倉宮は陸奥の探題某を頼んで、檜



枝岐山から南山に入り、關山峠の麓に留まり住したまふに、探題及び大寺三千坊等、慾心を起して宮を攻め奉る。車輪の如き火の玉散亂して敵軍を惱ます。今の火玉峠是なり。村民宮を奉じて新たに殿を作る。大内倉谷は其故迹である。一年の後此地を去りたまふとて、御運もし開けずば、永く氏神となつて村民を護ると仰せられ、神輿に乗せまつりて伊名に至り、泣く／＼御別れ申して歸つて來た。遺愛永く存して一字の小社を建立し、高倉大明神と崇め祀るといふので、御終焉の地とは謂つて居らぬのだから、隣國東蒲原郡の御墳墓の言ひ傳へと、必ずしも兩立しないものでもない。しかし會津の村々に行はれる同系の傳説は、一言でいふならば餘りに多すぎる。たとへ互ひに直接に抵觸することは無くても、到底或一人の生涯に於ては、爲し遂げられさうにも無いさま／＼の事蹟が、今は悉く高倉宮の御經歷となつて居るので、是を取集めて考察するとなると、一部は少なくとも信じ難いといふことに歸するのである。人が少しでも作りごとをしようと思つても、斯ういふ結果になることはあり得ると、私などは思つて居る。つまりは此地方には古くから、斯ういふ風に解しても大よそ差支へ無い傳説が、村毎にあつたのである。以仁王の御行方が不明であつたことは、玉葉その他の當時の日記にも見え、殊に東國奥州の方に、御立退きなされたらしいといふ風聞はくり返されて居た。今でも交通の便利とは言はれぬ南會津

の山間に、都方からといふ或貴人の足跡があつて、御名は高倉とまで傳へて居たとすれば、時代がはつきりとして居らぬ限り、もしやさうではあるまいかと想像するまでは、歴史を讀んだ者のまづ義務と言つてもよい。それを若松城下の教養ある人々が試みたのである。しかも一旦さういふ説を耳にするや否や、隣の土地との關係は考へても見ずに、必ずさうだと決めてしまつて、其積りで説明もし主張もするのは、寧ろ學問をせぬ者の所行であつた。平家物語や盛衰記の有ることも知らず、有つても讀むことの出来なかつた時代に、斯ういふ固有名詞などは一つでもあつた筈はない。勿論最初は口にするのも勿體ないやうな旅の御方がとか、何でも遠い都の方から貴とい神様のやうな御人が御降りになつてとか、いふ風に語り繼いで居たのを、それが事實ならば日本武尊の他にはない。もしくは高倉宮の御事としか考へられぬと、新たに教へてくれる人は外に在つたのである。既に自分は事實と認めて居るのだから、其點だけを疑ふことは出来ない。まして書物を讀む人に對する信頼は、昔も今の如く分外に強烈であつたのである。是に就いて想ひ起す一つの逸話は、會て武州松山の近くの百穴に於て、至つて篤實さうに見える年とつた番人が、見物の衆に説明して居るのを脇で聞いたことがある。百穴は葬處か又は穴居の跡かといふ問題は、發見當時から今に未決であるが、この番人は坪井説であつたらしく、誰が斯んな穴を掘つた



のですかといふ間に對して、頻りに大昔ドジンといふ人が爰に来て、掘つたものだといふことをくり返して居た。ちやうど岩窟ホテルといふものゝ進行して居た頃なので、自分には一しほ興味が深かつたが、つまりあの時分の學者が先住民を土人と呼んで居たのを、この老翁には或一人の英傑のことのやうに感じられたのである。同じまちがひは又東北にもあつたらしい。仲夏流行病の不安の多い際に、村の境や大きな屋敷の門口に、藁又は萱の葉で男女の人形を作つて立てる風は古く、以前は草仁王くさにわう又は鹿島香取、大助人形おほすけにぎひらうとも謂つて居る處があつて、眞澄の紀行などにも幾つかの寫生が出て居る。是を秋田の附近では現在ではドウジンといふ人が多い。元は少しも聽かぬ言葉だから、やはり此地方の學者が之を蝦夷などを威嚇する手段と推測して、土人人形と謂ひ出したのが起りかと思ふ。學者は固より「と思はれる」、もしくは「に非ざるか」を添へて述べたことでもあらうが、そんな言葉はいつの間にか飛び散つてしまつて居るのである。

自分などが常に惜しいと思つて居るのは、無始の昔から承け繼いで來た村々の言ひ傳へ、神が遙々と一つの土地を目ざして訪らひ寄り、ゆかりを住民との間に結んで、永く四時の祭を享けようとなされるといふ信仰を、斯んな只一度きりの歴史の片端と繋ぎ合せて、しかも折々は矛盾を指摘せられ、もしくは可能性を疑はれて居ることであるが、是とても根

原には世の進みにつれて、少しづつ本ある姿ではたより無く、又一方には斯んな草深い山谷の空間にも、曾ては直接に中央の大御門と、何か一つの關聯があつたといふことを信じたかつたからで、動機は至純であり、さうして又誤解にも一わたりの順序はあつたのである。殊に高倉といふ名稱の如き、由緒無しには生れ又記憶せられるわけが無いと、今でも會津の人たちにはさう思つて居る者が多いであらう。しかし山嶽の麓に居て神を祭る人々が、この古語を口にして居たのは不思議で無い。クラは巖石の重疊した土地をいふが、同時に神座であり又祭壇のことでもあつて、元は一つの語の分岐かと思はれる。さういふ場處に於て天降ります神を祭つたのは常の事で、従つて他の地方にも高倉といふ神は多く、京都の地名なども元はその一つの適用に過ぎなかつた。至尊流寓の長れ多い物語を、是から導き出すことは土地の人には出来なかつたらう。全體に他から暗示を受けて輕々しく信じたりしい形跡は多い。たとへば中山の御所平に伊豆守仲綱を説き、さては渡邊の唱競兄弟、猪俣太などいふつはものゝ忠節と奮戦とを傳へて居るのは、平家物語を讀んだことの無い者の能くする所でない。さうかと思ふと一方に南會津の方では、檜枝岐大納言・尾瀬中納言といつたやうな人々が、殿下を奉じて防衛の任に當つたとも謂つて居る。斯ういふ飛んでも無い名流を假説するのは、木地屋きぢやといふ山中の職業團體にしか無いことだがと



思つて居ると(註)、果してこの武將の連名に、小椋少將實何とかいふ人もまじつて居る。それでわかるのは東蒲原の山中に、御所車の形をしたといふ石の塚を作り、其左右の車の輪を十六瓣の菊花に擬したことで、是も轆轤師の彫刻には折々見られ、江州の本據の寺では近頃まで之を紋にして、それによつて又何とか御所といふ名をさへ用ゐて居た。會津は蒲生家の縁もあつて、夙くから多數の木地屋が近江から呼寄せられたことが、新篇風土記にも詳しく出て居る。この人たちが先づ土地の古傳に由つて、少しづゝ自家の立場を作らうとした例は他にもよく見られる。然るに會津の地方史家は其跡について、是をさへ合理化しようとして居たのである。傳説は變化せずには居られなかつたわけである。

(註) 木地屋又は轆轤師といふのは、轆轤を以て椀類の木地を製作すべく、山中に生活して居る一派の人々で、現今多くは其土地の住民と見られて居るが、近年までは滋賀縣の東小椋村から出稼したものであつた。家の苗字は殆ど皆小椋(ヲグラ)で、東北だけには佐藤と名のる者もある。惟喬親王の従者の後裔なりと稱し、それと信じさせるやうな色々の書き物を持つて居て、それが皆歴史とは合致せぬ。

我々にとつて最も大切なことは、この勘定も出来ぬほど遠い先祖の代から、土地毎に語り傳へ傳へ切つて居た古事が、本來は如何なる種類の眞實を、保存して居たのであつたかを見出すことであつて、其研究が今は却つて御留守になつて居る。村に育つた人々が老少男女、擧つて年久しくさう思つて來た事柄が、空な無意味なものであつた筈が無い。多くの傳説が御社を中心とし、もしくは際立つて尊敬して居る御方と、因縁のあることばかりを説いて居るのを見れば、恐らくはもと神々の祭に仕へる人たちの、至つて嚴肅なる考へ方が、さうであつたものと見てよからう。たとへ書物の上には全く痕跡が無く、又は兩立し難い記録があらうとも、それによつてすぐに根本から、まちがつて居ると斷することは不當だつたのである。人が親々から聽き傳へて居るものを、出来るだけいつまでも信じ續けて居たいといふ心から、所謂合理化の運動に参加しようとするのは無理も無いことやうだが、大抵の場合にはその提案者は外部の人であり、實は又傳説の少なくとも一部を、否認しようとする人であつたのである。彼等は近世の史學にかぶれて、固有名詞と年月日



を重んじ過ぎて居た。伊勢貞丈などいふ人は、氏名が無く年代の知れぬことは歴史で無いとさへ明言して居る。ところが前代の日本人には、貴とい方々の名は忌諱であつた。假に知つて居たところで口にする者は無い。さうして自分たちだけの呼び名を設けて居た。それだけでうそだらうと思はれては、古い傳承者はたまらなかつたのである。傳説の變化は斯ういふ隙間、即ち土地の人々も後には何と無く物足らぬやうに感じて居る區域から、入つて來るのが普通であるが、中にはそれ以上に突き進んで、若干の調和し難い部分を刪除させようとする場合も稀でない。其點ばかりは何かのまちがひであらうとか、爲にする所ある者の造りごと、しか見られぬといふだけの理由で、近年になつて無視せられ、強ひて忘れさせられた言ひ傳へが随分ある。幾つもの例を掲げることは出来ないが、長野縣南境の山村に、昔ユキヨシ様といふ貴とい御方が、こゝで悪者に攻められて御果てなされたのを、御祭り申して居るといふ傳説などは、後に南朝の皇孫、信濃宮とも申上げる御方のことかといふ説が出た爲に、次第に遠慮をして引込めた口碑も少なくなる。たとへば或部落では草鞋をくれと、ユキヨシ様が所望なされたのを、すげなく御斷り申した罰に、今でも或舊家では代々足の病を煩ふ者があるといふなどは、事は小さいが注意すべき手掛りであり、土地の誇りでも無いことを記憶して居るのだから、簡単な作りごとではあるまい。

又波合といふ村では不思議と家の猫に蚤が居ない。是もユキヨシ様が御滞在の頃に、猫を憐んでさういふ御誓ひをなされたからと謂ふので、例は秋田の七座山麓の里を始め、随分各地で信じて居る神の奇瑞の一つであつた。ところが現在歴史のやうに見られて居る浪合記などの記録では、宮は僅かな日數であはたゞしくこゝを通過せられ、さうした靜かな日は無かつたやうになつて居るから、今はごく愚直な者しか之を誠とすることが出来ないのである。それよりもつと重大な否認は、此地方の人は永い間、口と耳とによつて只ユキヨシ様の名を記憶して居た。それを二百年ばかり前から誰が始めたものか、尹良親王と字には書いて居たが、土地での稱へ方はまだ元のまゝであつた。然るに歴史の知識の進むと共に、是をどうしてもタダナガ親王と言はねばならぬことになつて、傳説はすつかり眞二つに割れてしまつたのである。斯ういふ保存のし方といふものはあらう道理が無い。村々の言ひ傳へでは宮御最後の日といふのが、八月十五日ともいへば又三月二十四日ともなつて居り、其場處といふのも方々にあつて、文書に残つて居るだけでも幾つかある。御辭世の歌といつて多くの人の記憶するものも、少しづつ言葉がちがふ迄は已むを得ないとして、中には二度目の合戦の折に、宮の御子の爲に忠死した世良田某といふ武士の作とした本もある。記録が出来たり石の表に刻まれたりすると、それと反するものはすべて誤りになつ



て、文字を識る人が先づ忘れて行かうとする。さうで無ければすべての他に存するものを贗作としなければ、成り立たぬ主張を強調することになるのである。曾て豊富を極めた村の傳説は、この前後を顧みない歴史化の爲に、追々に瘦せて行かうとして居る。それも人間らしき自然の迷ひではあるが、斯ういふ變化の歩みの中から、以前の生活の姿を窺ひたいと思ふ人々には、この急激な近年の改定によつて、少なくとも大きな困難の加はつたことだけは否めないのである。

今まで考へて見ようとするとする人の無かつた原因がまだ二つある。その一つは傳説の所謂合理化が、如何なる場合にも或一つの場處、甚だしきは僅か數人の群の爲に、丸々よそのいふことを參酌せずに企てられたこと、さうして第二にはその各地各人のもつ傳説が、既に其時までと思ひ／＼の發達をして居て、もはや一筋繩では括れなくなつて居たことである。つまり傳説は我々の歴史とはちがつて、夙くから全國共通の知識では無かつたのである。他處に類似の言ひ傳へがあることも知らず、ましてやそれが如何なる形を以て、記憶せられて居るかなどは少しも考へずに、自分たちばかりに關係のあることを、仲間限りで固く信じて居たのである。其仲間の大小は區々であつて、是によつて著名とか著名で無いとか謂はれるが、とにかく之を支持する土地と人の數とが限られて居たことは、歴史と區別

してもよい傳説の特徴であつた。個々の傳説の行はれて居る區域を、私たちは便宜の爲に傳説圏と名づけて居る。伊那谷や南會津の山村のやうに、同種の傳説の傳説圏が接觸もしくは重疊して居る地方では、當然に統一が行はれ又多くの場合には勝負がある。いくら小さな傳説にも必ず核心があつて、併合又は兩存がむづかしいからである。一つの折合ひの方式は、主人公を非常な旅行家にするのであつた。東京内外の多くの八幡社、それから關東東北へかけての、色々の遺跡を歴史と見る爲には、八幡太郎の父と子とは、前後の九年三年を旅路に費したとしてもまだ足りない。弘法大師は杖を突立て、千に餘る清泉を迸り出さしめる爲に、終生全國をSの字形に、行脚しなければならぬことにも歸着するので、乃ちこの歴史解釋なるものが、當初から個々の傳説圏の爲に試みられ、未だ曾て今日の比較綜合を、豫期したもので無かつたことがわかるのである。

しかも一方には個々の傳説圏が孤立して、互ひに相知らず又は矛盾撞着を氣づかずに居る場合も、今はまだ相應に多いかと思はれる。平家谷といふのはその一つの良い例であり又日本を特色づける傳説でもあつた。ブルノ・タウトは飛驒の白川村の珍しい家の建て方を、恐らく平家文明の名残であらうと謂つて居る。平家はその世盛りにも西國が地盤であつて、阪東の平氏は寧ろ源家に從屬して居た。それが白山の東側まで遁げて來て居るの



は解せぬやうだが、そんなことに驚いて居ては切きが無い。越後の山奥から出羽奥州へかけて、大よそ屋島壇浦とはかけ離れた僻村に、そこにもこゝにもといふほど平家谷がある。今まで住んで居る人々と、類を別にしたやゝ氣品の高い群が、後から入つて來れば即ち落人である。さうして平家は夙に最も有名な落人だつたから、我も人もさうらしく考へ出すのは自然である。起りを尋ねて行けば種々あらうが、主たる一つは平家物語が、目からも耳からも早くから普及して居たこと、其次には小松といふ名が、何か仔細あつて可なり弘く、斯ういふ新來者に用ゐられて居たことで、是は自分なども少しばかり考へて見たことがある。彼等の傳説圏は地形や生活事情によつて、通例は孤立して居る。もしもこの人々が遠い昔の由緒を以て、崇敬して居る神様があるとすれば、是を一族が西海の果まで奉戴した、尊とい大君であつたかと思ふのも、必ずしも學者の示唆をまたぬことであらう。

今日の交通状態を以てすれば、かゝる容易ならぬ聖跡の言ひ傳へが、幾つとも無く各地に併存するといふことは、想像も出來ぬことであるが、それが許され又土地毎に信じ且つ傾聽せられて居たといふのは、畢竟は互ひに相知らず、もしくは稀に傳へ聞くことがあつても、始めから我村以外のものを、到底有り得べからざることとして、問題にせず置くことが出來たからである。百年餘り以前、葦葭堂雜錄の世に出た頃には、既に京以西に八箇所の、養和のみかどの御隠れがと傳ふる土地があつた。攝津の能勢の山奥の舊家から、一通の古文書が出現して、こゝに最後の御宮居があつたと言つて騒いだのも、同じ頃の出來事である。土佐と薩摩大隅にもまだ此以外に、領内の學者のみはよく知つて居て考證し主張し、他郷では難波の葦葭堂のやうな博識でも、全く心づかずに居たものが幾箇所かあつた。それが現在は大抵は皆顯はれたのみならず、新たに探り得たといふ遺跡も附け加はつて、今や全國を通じては其數が大分のものになつて居るのである。一部の人たちの謂ふ郷土研究のやうに、單に或土地限りの知識を守つて、よそで何と言つて居るかに掛構ひ無



く、附近の者ばかりで感歎して居るだけだつたら心配なことも無いが、今日はそれを全國に承認させようとして居るのである。奈良縣では鳥見の靈時の御跡に相違ないといふ場處が、あの狭い管内に十箇所近くもあつて、目下判定者を困惑させて居るといふが、是に似た眞偽の争ひは實は他にもたくさんあつて、今は只少しでも問題の解決を遷延しようとして居るに過ぎない。同胞國民の多くの者を、無知なる誤信者、乃至は有りもせぬ證據を虚構して、人を動かさうとする者の如く斷定するに非ざれば、到底成り立つ見込の無いめいめいの主張を、もしも此勢ひを以て貫徹しようとしたら結果はどうなるであらうか。

我々が是非とも先づ考へて置くべきことは、當代の史學に果して之を決定する能力があるか否かであつた。少なくとも第三者の承知するだけの理由を具して、一を正しく残りのすべてを誤りと明示し得るまでの用意があるかどうかであつた。私の見る所では、恐らくは誰にも其用意が無い故に、この豊富にして又興味深き日本の傳説をうるさがり、内心窃かに今のやうな「傳説の研究」の、餘り盛んにならぬやうに念じて居る者が多いのである。歴史と傳説との境目、殊に傳説といふものゝ性質と範圍とを、明かにしてかゝる必要は爰に在る。傳説は或一部の人が思つて居るやうな、「やゝ不確かな歴史」では決してない。といふわけは時代と共に、現に傳説の形態と内容とは變つて來て居るからである。同じく

信するとは言つても傳説を信するのと、歴史が過去の事實だつたといふことを疑はぬのとは、本來は二つ別のものであつた。是をこつちやにするやうになつたのは、固有信仰の側から言へば衰微である。歴史の二葉は多くの民族に於て、最初は傳説の中に包容せられ、記憶せらるべき歴代の大事件は、すべて信仰と結び付けて傳へようとしたことは事實であるが、一たび記傳の道が朝に行はれるや、其分界は世と共に明瞭になつて、歴史は終に一つの學問の根柢を形づくる迄になつた。獨り文字の恩恵に與かり得なかつた草莽の民のみが、なほ久しい間以前の狀態に止まつて居た爲に、彼等が管理する傳説の中にも、同じく若干の歴史が含まれて居なければならぬといふ、類推が下され得たのみである。是も勿論絶無とまでは斷言が出来ない。現に村として又家としてのよく／＼の大事件は、百年以上に互つて之を記憶する者があり、其方式も亦大よそは傳説と似て居るのである。しかも經て來た年代の長さに比べると、村々の言ひ傳への總量はあまりに少なく、且つ其種類が甚だしく限られて居る。大抵の場合には或すぐれた人の、一つの事蹟を中心とした一群の記憶ばかりが特に鮮明であつて、それも私が列擧するやうな、全國共通の型に屬するものが寧ろ多いのである。田舎の生活が極度に平穩無事であつた證據と、之を解することは出来ぬだらう。飢饉疾疫その他の怖ろしい大災害でも、記録があつた場合だけに改めて之を知



り得るので、辛うじて其厄難を切抜けて來た家々の後裔でも、それを口頭の話題として居る期間は四代とは續かない。近代は殊に文書に信賴して、忘れて行く速度が早くなつたやうであるが、しかも歴史は必ずしも斯ういふ土地毎の大きな不幸までを、筆に傳へて置くべきものともきまつて居なかつた。歴史は一國の大事、殊に偉人の傳記を中心として、時代全體の動きを明かにするものだといふ先生が、日本には今でも居る。英傑以外の人の色々の小さな生活が、どうして斯うなつて來たかを知りたいといふ願望の、強く表示せられたのは近頃のこと、それにはまだ十分な方法が備はらず、古人は素より豫め其答を用意して置いてはくれなかつた。だから此様な無理をしてまで、平家物語とか太平記とかいふやうな、最も通俗な書物の知識と結び付けることだけが、所謂合理派の歴史化であつたのである。斯ういふ一般の思ひ違ひも、それを助長するやうな知識人の態度も、亦一種の弘い意味の史實には相違ない。其證跡の我々の世まで残つて居てくれたのは有難い。たゞ一つ困ることには、是が前面に立ち塞がつてしまつた爲に、折角悠久の昔から保存せられた傳説の眞の價值が、いつまでも我々の寶とはならぬのである。人が是ほど大切に親子代代覺え續けて居たことが、笑ひや嘲りや、又時としては憎み罵りの目標とさへなるといふのは悲しいことで、それがもし學者の輕慮、乃至は比較綜合の怠慢から起つたとすれば、

我々はこゝに改めてこの大御國の爲に、反省し且つ精進しなければならぬのである。

村々の歴史が中世以後に對しては忘却せられ、たつた一つか二つの大昔の出來事にばかり、精彩を盡した語り傳へが残つて居るといふことには、先づ隠れたる理由が無くてはならぬ。香や煙草が人間の嗅覺を弱めたことは、山で原始に近い生活を續けて居る人々の、鼻の感じの鋭いのに比べてもよく判ることだが、是と稍似た事情は或は文字の教育の結果にもあつたのかと想像せられる。是は後にきつと再び入用があると思ふことは、帳面につけ又は證文に書いて、其他は安心して記憶の爲に格別の苦勞をしなかつたといふことが、全體に我々の口頭傳承の任務を、小さくして居ることは争はれない。もちろん其中にも筆豆と筆無精とがあつて、前者は次第に減じ又は職業化して行くやうだが、以前とても誰でもかでも、すべてがこの傳承に熱中して居たわけでは決して無く、寧ろ記憶の特技をもつ者が有ることを知つて、他の多數は安心して其人に記憶を託し、勝手に其日々の事ばかりに注意を向けて居たことは同じであつた。たゞさういふ傳承者を重んじ、其言葉に耳を傾けようとする念慮が、書冊文化の進出につれて、追々と淡くなつて來たらしいのである。暗誦の特技には素質があり、どうやら又遺傳の働きもあつた。だから今日でも折々は突發して、何でも無いたゞの民家の子女が、妙に古い事を知り且つ之を人に語りたがるのに出



逢ふが、それ等の傳承者の現れた事情も、根源を辿れば尋ねられる。即ち一部にはやはり若干の利害があつて、たとへば賞讃せられ利用せられるが故に更に努力し、もしくは他の記憶の良い人の言ふことに感動して、それを承け繼がうと心掛ける者も出たには違ひないが、其間にもおのづから血筋家筋といふものがあつたのかも知れない。固より衣食の種といふやうな露骨な動機からでは無しに、或は由緒ある名門の少しく衰へかゝり、又は老女が生き残つて幼ない孫にかゝらなければならぬといふやうな場合に、殊に昔を説く念慮が盛んになつて行くのを見ると、以前も一族の中心となつて、群の誇りを失はぬ責任を感じずる家から、斯ういふ技能のある人は輩出したので、それが主として貞淑なる女性であつたといふことも、恐らくは偶然では無からうと思ふ。性の分業は今でも可なり明瞭に、日本では認められて居る。獵とか釣とか戦闘とか、女には出来ない又させてはならぬといふ多くの仕事があると同時に、他面には家の存立といふことにかけては、男の執心は寧ろ一方よりは淡かつたのである。さういふ人々の氣力が、どんな方面に向つて發揮せられたかは想像することが出来る。さうして又行く／＼は心理生理の學問の開發によつて、この必然性は證明し得られるかと思ふ。少なくとも歴史は女性の記憶力の貴とかつたことを、推測せしめる資料に充ちて居るのである。それが文字の教育の世に入つて、單に彼等の分け前

のやゝ少なかつた爲ばかりに、この古くからの機能を輕視し、之を不十分なる記録の歴史に、委讓せしめようとして居るのである。書かれざる歴史の保存が不可能になつたのは、其結果で無かつたとは言へない。さうで無くとも歲月が積り、人事が日増しに錯綜を加へて來れば、次第に覺えきれなくなるわけなのに、おまけに今までほど女の物覺えを感謝せず、又大事にもしなくなつたとすれば、口から耳への傳承は段々と興味のない文藝の方に向ひ、土地の新たな歴史も忘れがちになつて、たま／＼古くから消えずに居る傳説まで、是を通俗の史書に附會して、後には却つて信じにくくしてしまつたのも已むを得ない。文字の恩恵は他の片隅に於ては、斯ういふやゝ過當の信頼によつて、今まで發達して居た記憶の技術を衰微させ、もしくは別方面に轉回させてしまつたのである。此事はもう少し詳しく説明する必要があるが、日本には限らず、我々の知つて居る多くの民族では、必ず後世に傳へたいと思ふ大事件だけは、言葉を精選し句形を整へて、聽いて印象が深く、又暗記の練習に便利なやうにして居た。對句やたとへといふやうなものも、其爲に數多く設けられて、聽いて悦ばしく又永く忘れ難いものになつて居た。其様式は今でも傳はつて、決して我々は之を粗末にして居ないが、其器物うつわものに盛られるものは、既に文藝と化し又信仰とは分れてしまつて居る。さうして人が娛樂の爲に、頻々と之を演ぜしめるやうになつて



からは、年々歳々の生活記録は、却つてこのカタリゴトの方法を以て傳へることが不似合ひになつた。是が又村々の歴史の埋没した一つの理由かと私は考へて居る。

(註) カタルといふ動詞は昔のまゝに行はれて、近世のカタリモノは淨瑠璃をはじめ、すべて皆男子の管掌になつた。是はまことに大きな變遷であるが、幸ひにして以前の姿はまだ少しばかり、民間に痕跡を留めて居る。御前と呼ばれて居た盲の女の職業組織もその一つである。一方には舞といふものにはまだ女性の領分が少しある。さうして舞は本來語りと不可分のものであつたやうに私たちに考へられる。少なくとも信仰行事の方面では、曾て傳説が女子によつて取傳へられたことが、今は無言の舞の手からでも窺はれるのである。

以前は或はもつと色々の言ひ傳へが、こま／＼と語られて居た時代もあつたのか知らぬが、それはもう確かめて見る方法も無い。現在とはとにかくこの大昔の言ひ傳へだけが記憶せられ、之に續くものといへば僅かに祖父母の見聞、又はたまさかに残つた舊記の類ぐらゐの、それもすつと現代に近いもので、其中間の數百歳は茫とした空虚である。村に住む者がその少しばかりの傳説を、又無く重要視し愛護したのも尤も千萬なことで、後世時として解説を補充したり、又は固有名詞を嵌め込んだりしたといふのも、動機は全く之をいつまでも信じて居たかつたからで、別な言葉で言へば元からの形のまゝでは、何とやら頼り無く感ずるまでに、時代の智慮分別が進んで來たからであつた。多くの土地の傳説はそれ故に、少しづつは皆變化して居る。あるものは特に荒唐無稽のやうに思はれる部分を、意識して取除いて居る。又或者はよその話を借りて來て、説明の脱落を補填しようと思つたものもある。仔細に視て行けば加工の痕はわかるのであらうが、中には丸々型にはづれて居て、ちよつと研究者をまごつかせ、それだけに又興味の高いものがある。何れにしたと



ところで最初は皆、父祖と同様に自分たちも、信じ続けることが出来るやうにといふのが趣旨で、人が成程と言つてくれればなほ嬉しかつたであらうが、そればかりを目當てにしたものなどはないのである。如何に昔のまゝと言はれる慣習制度でも、斯ういふ愛着に出發した徐々たる改廢は皆許されて居る。恐らく傳説にも夙くからそれが目立たずに行はれて居たので、歴史の知識の應用なども、言はずその新らしい一例に過ぎぬのかも知れない。たつた一つの悲しむべき點は、其中に結果の甚だ良くないものがあつたことで、しかもそれが傳説の特に重々しいものであつた。弘法慈覺最明寺時頼といふやうな、幾らでも行脚をする人が、曾て通過し去つたといふだけの話ならば、少しはをかしいかも知れぬがそこも爰も、さてよくあるいたものだと敬服しても居られる。之に反してたつた一人しか無い英傑が、こゝで生れたと言つて産湯の井戸があり、又は貴とい御方が此地で御果てなされたと稱して、墓どころがあつたりするとなると、同種の傳説を抱へて居る二つの土地は、排撃し合ひ又諍はなければならぬのである。めつたに突き合せるやうな機會が無いといふ一事で、辛うじて一時凌ぎをしなければならぬのである。是が傳説の學問を永く今日の状態に、打棄て、置けない實際上の理由で、世人は寧ろ學者より以上に、其急を感じて居るのである。

學問はいつの世にも疑惑から發足して居る。さうして何の不審も抱かず、是が當り前だ是でも些しも差支へが無いと思つて居る人たちは、よほど程經てから、多くの研究が通説と化してしまつてから、やつと其恩恵に浴することが出来るのである。我々は之に先だつて、是非とも平家谷のやうな同型のしかも兩存し難い傳説が、全國十數所に互つて行はれて居るのは何故かといふことから、疑つてかゝらなければならぬ。是まで耳にした普通の解説は、いつでも一方的だから一向に當てにはならない。小さい例でいふと番町の皿屋敷、あれは私などのくには播州皿屋敷と謂ひ、現に井戸もありお菊蟲も居る。口拍子が似て居るから作者があつて、番町の方へ捲き上げられたものと皆考へて居る。ところが同じ言ひ傳へは土佐の幡多郡にあり又長州にもある。何れも六部か行脚僧が聽いて還つて、播磨にも江戸にも移植したに相違ないと土地ではいふ。さうすると關東方は頗る歩が悪いやうに思はれるが、何ぞ知らんや上州妙義山麓の小幡氏一族には、ちやんと足利時代からの同種口碑があつて、信州松代藩の小幡家を始め、此一門の移住先では多くその怨靈を祀つて居た。主人又は主婦が慘虐で、召使の美女が怨みを含んで死んだといふ點は皆同じで、おまけに其幽霊の名は必ずお菊であつた。お菊などいふ女の名は、さう古くから用ゐられた筈はない。さうして美女虐待の物語といふだけならば、是は寧ろ有り過ぎると評しても



よい程に、我邦ではよく流行したカタリゴトであつて、中世にはたゞ觀音地藏の靈驗によつて、現世の苦艱を救はれたといふ風に傳へて居たのを、後に一くねりくねつて執念の鬼となり、大いに化けて出て悪い者を惱ませ、最後に念佛の功力によつて得脱したといふ風に語られ、更に又一步を進めてはぞく／＼と身振ひをしなければならぬやうな怖いところで、話を切上げてしまふといふ趣味も起つたといふのみである。勿論斯ういふのは一方の端の例であつて、多くの傳説がすべて同じやうな、流轉のし方をして居たといふのでは無い。しかし是によつても或一つの見當が付いたやうに、もしも我々が同じ型、幾つかの共通點をもつて居る傳説を、一つ／＼丹念に又遠慮無く、集めて比較し且つ考察して見たならば、末には此一致の決して偶然で無く、寧ろ斯うあるのが當り前であるやうに、思ふ時代が來ぬとは限らぬ。同じ國語を用ゐて數千年の昔から、山越え海を渡つて往來して居た日本人が、土地のちがふ毎にそれ／＼異なる傳説を抱へて居たとしたら、其方が却つて不可解といふことにならうも知れぬ。さうで無いまでも一つの根源から、分れて出たものといふ證據を擧げるだけは、今ですら或程度にはもう出来るのである。それよりもやゝ困難なのは第二の問題、即ち此様なむしろ有りふれた、しかも時としてはどう考へても二つとは有り得ない昔の事蹟、冷淡なる外部の者の眼から見れば、一つ以外は必ず誤り、事によると皆どうかと思ふやうな言ひ傳へを、何故に又そこでも爰でも、誠とせぬ人を憤り怒るまでに、斷乎として信じ切つて居るのかといふ點であつた。

是には色々の現世利害、複雑なる動機の加はつて居ることも認めずばなるまいが、そんなことは我等の管轄の外だから言はない。何よりも土地の人々の忍び得ないことは、是ほど純一に又いつの世からとも無く言ひ傳へて居る神聖な物語を、たゞ有り得ないといふ一言を以て評し去り、時としては肩を聳かし頸を振つて、意味ありげな冷笑を浮べる人があり、それでは私等をうそつきと仰せあるかと、詰問でもせずには居られぬやうな、變な態度を示されることである。もしくは日頃こちらでこそ疑はしいと思つて居る同種類の傳説地で、さも／＼にせ物のやうに、自分の方の噂をしたことがわかつた時である。うそつきとにせ物は此世にもあるが、傳説を信する人などは大よそそれからは縁が遠い。うそは田舎では元は戯れについて遊ぶものとなつて居た。笑はずにうそを言ふ者などは非常に憎まれた。人が眞顔になり言葉を改めて、心無い者には説くまいとまで、慎しんで話して居ることを、さもにせ物かの如く噂せられたのでは、單にめい／＼の輕信が侮られるといふだけでは無く、同時に又父祖の靈に對する侮辱でもある故に怒るのである。無論欺いたのは諸君等では無い。すつと以前に諸君をさう信ぜしめるやうに、巧んだ者があつたのだと言



つて見ても、それとても格別の慰めにはならず、又實際に證據も無いことである。近頃參詣を集めて居る地方の堂宮の中には、二百年此方の縁起をもつて居るものが多い。一時に急激な需要があつた爲か、其内容には全國同型が多く、たとへば本尊の水中出現、又は異人の彫刻とか神龍の呵護とか、古く著名であつた中央の記録の、受賣としか見えぬものが随分ある。だから傳統にもこしらへものが無いとは言はれぬと、思つて居る人もあるか知らぬが、縁起は書いたもので始から明かな目的があり、寧ろ山下の住民の參與せぬものが多い。それでも土地に口で傳へた傳説があれば、それを足場にせずには居ないだらうが、其解釋に至つては獨自のものであつて、再び里に下つて受賣せられることの不可能な話になつて居るのである。まして全然こゝには種の無いことを、如何に巧妙に記述し又讀み聽かせたとしても、信徒總代でも恐らくはあつけに取られて、相槌を打つことは出来ないであらう。土地に一つの傳説が根を張つて居るといふことは、素より縁起の盆栽仕立てのやうなものを意味しては居ない。單に種がこぼれて芽を吹いたといふ以上に、別には是を大きく成長させ、美しい花を開かした土の力、空氣の力にも譬ふべき、目に見えぬ因縁が年久しく働いて居るのである。だから我々は末々の枝葉の問題をあげつらふ前に、是非とも先づ其根と幹とを見ようとしなければならぬのである。

單に親々の言葉を疑はなかつたといふ以上に、前にもそれ／＼の時代の知性の限度に於て、信すべきものであつたといふことを認めなければならぬ。今でも多くの傳説の縁起と異なつて居る點は、後者が汎く一般の神威佛德、即ち深く信じ熱烈に祈願する者に對し、應驗を示したまふと説くのを通例とするに反して、一方は進んで一郷の安寧と、一門の繁昌とを守護なされ、又さういふ御契約が、古くからあつたと傳へて居ることである。この新舊の信仰のちがひは、もう誰でも知つて居ることであらうが、それが此様に顯著に傳説の上に、認め得られるとまでは氣づかぬ人が多い。傳説の神々は或土地或家の、特に年久しいゆかりの有る人々を愛せられる。笈に負うてあるく神體が俄かに重くなり、又は三たびまで同じ漁夫の網に入りたまひ、我を此地に齋いひき祀れと示現なされる。或は樹の小枝、鞭や杖や幕串、晝餉ひるかきに用ゐた箸などを土に刺して、もし神慮に叶はゞ此地に根付かしたまへと念すると、程無く芽を吐き成長して今見る大木になつたといふなど、何れも皆或一定の地域のみが、神の尋常に絶した眷顧を受くべき、道理が有ることを説かうとして居るのである。だから斯ういふ單純なる傳説の領分には、一人の特別に信心深い者などは出て來ない。人は一様に恭敬であり、又信するのが當り前であつた故に、取立てゝ賞譽を受けるといふ者も無く、たま／＼全體の感覺に背く者だけが、罰せられ災ひを蒙ることになつ



て居たので、寧ろさういふ場合のみが數多く記憶せられて居るのである。昔の神々が峻嚴で、個々の罪咎を寛假したまはぬやうに見えるのも、我々には少しも不思議ではない。人は常の道を履み常の式によつて仕へ申すことを條件として、尊とき當初の御約束の永遠に變るまじきことを、總括的に信じて居たからである。沖繩では御祭の日に遊ばぬ者だけが、ハブに咬まれると考へられて居た。越後の田舎でも、物日に働くと田植に雨が來ぬといひ、雨が無くてもよいなら雨除けも無用だらうと、村の人たちから屋根を剝れたといふ話も残つて居る。たつた一人の小さな違反でも、結果が公共に及ぶから制裁は大きかつたので、傳説はつまり近世の歌にも有るやうな、「禱らずとても神や護らん」の状態を確保するが爲に、必ず衆人をして牢記せしめようとした、最も大切なる神と土地との由緒譚であつた。だから近世の多くの縁起に見るが如き、個人が恩寵を被つたといふ例は一つだつて記録せられては居ないが、背けば罰せられるといふ此言ひ傳へこそは生活の基礎、村の福祉を支持した唯一の證據物であつた。たまく其眞實性に向つて疑ひを插まうとする者が、非常な勢ひで排撃せられたのも、當然であつたといふことが出来る。しかも時代の力とは言ひながら、之を昔のまゝの形で持ち傳へて行くことが、當事者たちの間にも追々と困難になつて、僅かばかりの書物の力を以て之を修飾しようとした爲に、却つて一段と早く傳説を

信じにくいものとしたことは、考へて見ると如何にも淋しい話であつた。



しかしこの傳説の變化成長といふことは、必ずしも近世に入つて始めて現はれたものではないやうである。一つの傳説を有るがまゝでは信じにくく、何等かの小さな思ひちがへ又は聞き落しがあつたのではないかといふ不安は、それをはつきりと意識し得ない時代から、もう少しづゝ萌して居て、それが寧ろ純朴無垢な信頼をもつ者には、一段と忍び難い眼の中の微塵のやうなものではなかつたかと思はれる。今となつては抜き差しのならぬ、國として殆ど始末に困つて居る各地の歴史化なども、決して單なる事を好む者の進言では無く、實はやゝ久しい内からの需要に誘はれて、いつと無く浸み込むやうに入つて來たものかも知れぬ。だから傳説の今でも生きて居るものと、殘形又は痕跡ともいふべきものを、區別して見ることは必要であるが、この徐々とした経過を考へると、境目を何れの點に置くのがよいかに、可なり迷はずには居られぬのである。最も我々の心を打つ言葉は、「何だか知りませぬがこの土地では、みんなが斯う謂つて居ります」といふ謙虚なる辯明であつて、是には私などはもう反對は出來ない。つまりは現在是だけのこと信じられて居

るといふ事實を、一應は受け入れるの他は無いのである。歴史の學者がこの百年ほどの間に、自分も固く信じ人にも強く説いて居たことが、後に誤謬を指摘せられ又は意外な證據が出て來て、當然に自ら改めもしくは人から訂正せられた例は、至つて寡聞な私でももう大分數多くを知つて居る。それを我々は學問の進歩と名づけ、なほ將來に向つても更に多くの發見を期待して居るのである。たつた一人か二人の或一時に考へ付いたことが、如何なる事情の下にも易へられない解釋となつたとすると、それはもう學問の領分の外である。形はいくら歴史と似て居ても、又土地に取つてどれ位大切な知識であつても、之を管轄すべき力は全く別な處に在るので、多くの史學者が淡く之を見放し、もしくは避けて觸れまいとして居るのも、必ずしも無責任とまでは言はれない。傳説がもと／＼信仰を根として生ひ立つたものである以上、その續いて居る限りは今日の状態になつても、まだ生きて居ると見た方が正しいやうな氣がする。古い言ひ傳への絶対に信すべく、それには又二つ以上の解釋が有り得ないことを、固く執つて動かぬ人々が無かつたら、却つて斯ういふ次の改訂も誘致せられず、末には本來の傳承とよほどちがつたものとなつてしまつて、もはや化石によつて古生物の面貌を窺ふやうな手がかりを、丸々得られなくなつて居たらうと思ふと、たとへ誤りにもせよ大切に守つて居てくれたことは嬉しいのである。



つまりは傳説は生きて居るが故に、成長しないでは居られなかつたのである。たゞさういふ中でも注意せられることは、其成長ぶりにもやはりそれ／＼の時代の型があつて、初期と中期には又著しい差異がある。さうして幸ひに國內にあらゆる段階のものが並び存するので、或程度までは之を比較して見る事が許されるのである。ちやうど最近の考證方式が、前人の曾て豫想もしなかつたものであるやうに、我々の祖父母曾祖父母等は、今日全く無視せられて居る證據もしくは宣言を、非常に力あるものとして公認して居た。手短かな語でいふと神靈の啓示、夢の告げとか巫覡の言葉とかいふものがそれである。夢は雜然と取止めのないものが多いことを、誰でも氣づいて居る世の中になつても、なほ其中には正夢といふものゝ、稀には有るものだといふことを認める人がある。機會は極めて稀であり、寧ろ物語にしか傳はつて居らぬと言つてもよいのだが、たとへば夫婦兄弟の者が、あり／＼と同じ筋の夢を見たといひ、又は三夜續けて同じ枕神のさとしがあつて、しまひには何故にさまでは疑ひ惑ふぞと、戒められたといふ話さへある。今一つ以前にはその夢を待ち迎へて、宮堂の中に籠り明した者も多かつた。斯ういふ人々には夢とも無く現とも無く、ちやうど其中間の所で尊とい御聲が聞かれ、或は内陣の戸を引き開けて、還り入りたまふ御後影を見たといふ記録さへ傳はつて居るのである。それを現實の實驗と同様に、

固く信じて疑はぬ者が有つたとしても、昔の世の信仰では、些しでも批判を挿むべき餘地は無かつたのである。

或は迷信といふ語を以て之を呼ばうとする人も今日はある。其名の當つて居るか否かは私にはまだ斷言しきれないが、とにかくにさうした古風な物の考へ方が、新たに注ぎ込まれた所謂科學常識と入りまじつて、到る處に存續して居ることだけは事實である。神様の御告げだもの、窺つて見たら斯ういふ御示しがちやんと有つたのだもの、其通りの事がたしかにあつたものと、見るより他はないぢやないかといふ人が、實は百年前に比べて、今も格別少なくなつても居らぬのである。此種の人たちの立場から考へると、同じ人間どうしの説いて聽かすことですら、優れた賢い人のいふことは皆事實であり、自分が直接に耳にしたことでなくとも、書物に載せてあれば誰でも之を信じようとして居る。ましてあらたかな神靈の啓示を、まのあたり自ら受取つたのだから、是ほど確かなことは有り得ない道理である。國史の教育が普及してから、自然と過去を語る言葉が制約を受けて、歴史と矛盾しさうな問題に、觸れまいとする傾向が見えて來たことは確かだが、その部面といふのも實は限られて居た。我々常民の背後には、茫漠とした人跡未到の野がある。何に染めても染められるやうな、記録の空白は遠く連なつて居るのである。轉生の教理は佛者が



もたらして来たものであらうが、是が又ひどく俗衆の空想を自由にしてくれた。たとへば私などの少年の頃までは、生れて滿一年の兒の餅踏みの日に、愛する親姉たちは箕を以て三度その子を搦ぎ、おまへは何ぢやつたと前の生を問ふ風習があつた。大抵は半ば戯れにしたことだが、周囲の若干の者は之を信じ、且つ色々と解釋を付け加へる。やつと歩く位の緑兒はさう多くの物の名を知つて居ない。普通に答へるのはモウモウとかワンワンとかンマとか、動物の名であつたのも不思議は無い。さうするとどんな牛、馬ならばどういふ人に飼はれて、生れ替つて人間になるやうな因縁を結んだかといふことが問題になり、假に川中島へ上杉謙信が乗つて来た黒の駒だつたと推定しても、聊かも正史と牴觸することにはならなかつたのである。奥州には曾て清悦といふ奇僧があつて、頻りに落城以前の高館の舊事を語り、人は之を常陸坊海尊の長命して今も居るものと信じて居た。源義經が反齒の小男であつたといふことも、この清悦の説に基づいたものらしく、又武藏坊辨慶は面長で色が白く、存外の好男子であつたといふことも、亦彼の口から出たことであるが、此方はどうだかと思つて居る人がまだ多い。しかしともかくも是等は皆今日の未知世界であつて、何と説明して置いても一應は事實として通用し得る。要するに之を信する者の有るか否か。もしくはどれほどの熱心と專念とを以て、之を傾聴するかといふことに由つて決

するのである。近代の傳説の昔と異なる一點は、牢く信する者の隣家に全く信じない者が住んで居て、蔭でひやかしたり批評したり、すなほにそれを又其隣へ運んでくれぬことで、其爲に我々の謂ふ所の傳説の社會性が具はらず、従つて往々立消えの姿で終ることもあるのだが、之に對しては一門知音、同じ志の者を糾合して、進んで所信を世に説かうとする運動も一方には起り、或は又新たに實を結ぼうとする傳説を賞美する餘りに、翻つてその根柢となつた夢や幻覺を、是認してもよいと云ふ者も出来て来る。是が恐らくは一つの末期現象と名づくべきものなのであらう。とにかくに丸々孤立して伸び育たずにしまふといふ傳説も、思ひの外少ないと共に、何の批評も受けず又妥協もせず、昔のやうにく／＼と成長して行くといふことも、もう段々と望み難くなつた。さうして土地により又人によつて、力の入れどころがかはり共通の點が減退し、個性が著しくなつて却つて他を感動させる條件を失つてしまつた。斯うして或は傳説といふものが、一つの國土から跡を絶つ時代が来るのかも知れない。

しかも現在はなほ過渡期であるが故に、その見究めが殊に付きにくいのである。田舎には今でも祖先の抱へて居たものを、ちつとも改めないで持ち傳へて居る人が可なりある。或は又熱烈の度にかけては、聊かも前代に劣らない信仰を以て、新たな幻しを見て是に動



かされ、何の疚しい心も無くその「眞實」を説き立てようとする者も居る。學問や才能を加味して、時世に適應するやうな解釋を下された傳説と、是が入り交り並び進んで居るのだから、手短かには處理し得られないわけである。我々の方法としては、判るだけはこの新しい事情に生れたものを引離して、成るべく多くの昔からのものばかり、集めて比べて見るやうにしたいのであるが、其境目は紛はしいのみで無く、古いと謂つてもそれに又段階があつて、少しづつ移つて今の世に續いて居るのである。歴史の知識が傳説に干涉する風が、既に三百年も前から始まつて居ることは前に述べた。それとは反對に靈驗を根據として、新たな事實を主張し得る者が、今でもまだ少々は残つて居るかと思ふ。斯ういふ氣質は誰が考へて見ても、新たに學び取り又は作り立てられるものでない。さうすれば爰にも遠い昔の傳説の生ひ立ちを、推測する手掛りの一つはあつたのである。以前私の親しくした壯年の實業家で、特に神信心の深い者があつた。それが或時大變なことを私にさやいた。御伊勢様は昔から女性の神様だと傳へられて居ますが、あれは誤りでした。私は拜みました。御年は七十ばかりの、途法もない丈の御高い、白い長い髻をはやした御方ですと謂つた。自分はそれを制して他言をせぬやうに戒めたのだが、後になつて考へて見ると、この幻覺にもやはり由來する所はあつたやうである。中世の神々は記録の存する限り、

いつもけだかい童子の御姿を以て、示現なされたやうに傳へられる。諸社に奉安した木像繪像にも童形が多く、さうでなければ美しい女體の御神とし、稀に男神の若くすこやかな御形を寫し出すだけで、老年の御姿といふものは殆ど無かつたやうである。ところが中世以後、神が白髪のお翁と現じたまふ例は段々と多くなつた。たつた一つの最も身に近いものを挙げると、私の生れた村では五年七年に一度、兒童が夜に入るまで家に戻つて來ぬので大騒ぎをすることがあつた。さういふ場合には必ず氏神の御導きで歸つて來たやうに傳へられ、中には白い髻のおぢいさんが、早ういね、路はこつちぢやと言はれたとか、わしは鈴の森ぢやと名乗られたとさへ謂つた少年もある。さうして私などはそれを些しも疑つて居なかつた。つまりは知らぬ間に我々のまぼろしは新たになつて居たのである。純一無雜の信仰によつて支持せられる傳説は、活きた傳説といふより他は無いが、その信仰の態様が世と共に少しづつ變つて來て居るらしいのである。是は民衆の心の内の現象で、教理の統制の及ばぬ區域であつたのみならず、その教理も亦次々に變化して居る。即ち活きた傳説ならば寧ろ成長せずには居られなかつたのである。



## 一四

人が靈夢を見、又は不思議の奇瑞を實驗するといふやうなことは、一生に一度も無いのが普通だから、この方の影響はまだ事が小さい。それよりも遙かに大きな力をもつて居たのは、幽界の消息を傳へる者の言葉であり、それが常例となり又職業と化するに及んで、傳説はその面貌を改めずには居られなかつた。所謂小道巫術の制禁は既に上世に存し、託宣の必ずしも信じ得られなかつた證據は、國史の上にも一再ならず掲げられてあるのだが、もと／＼信するが故に之を聽かうとする者が多く、聽いてさて信すべきか否かを決するといふことは容易で無い。しかも其内容はいつも新らしく、今まで人間が知らずに居たことを、始めて是によつて學び知るのである。古い言ひ傳へが段々と下積みになり、時としては訂正せられ、又は少なくとも重要性を減じて行くことは、託宣の殊に盛んであつた宇佐や北野の、今残つて居る記録を見てもよくわかる。この二つの御社には限らず、都方では賀茂貴船を始め奉り、稻荷祇園愛宕の諸社、大和では春日、西國では宗像、東國では香取鹿島に富士淺間、越の白山信州の諏訪等、大よそ二十所ほどの尊い神々だけが、弘く全國

の町村に互つて、幾千百ともなく勸請せられ、各々其土地の鎮守うぶすなとして崇敬を受けて居られるといふことは、上代には全く無かつたとは言はれぬまでも、少なくとも中世以後に於て、非常に顯著になつた現象であるが、是にも數々の奇瑞のうちで、特に託宣が大なる力であつたことが、それ／＼の社傳に記し留められて居る。傳説の最も嚴肅なるものが、之に伴なうて新たに生れ、且つ最も熱烈に支持せられて居たことは、現在漸く消え薄れ、又は解説を改めようとして居るさまざまの口碑の中からでも、なほ之を窺ふことが出来ると思ふ。日本が何れの國よりも傳説の豊富な、又異常の成長ぶりを示して居る國であつた原因の、一つは爰に在るやうに私などは考へて居る。

この固有信仰の大なる特徴、さしにも隆盛を極めた託宣といふ風習が、どうして又今見る如き變化を経たのかといふことは、早晚何人かの努力によつて解き究められなければならぬ大切な一問題である。人が神がりの言葉に耳を傾けるといふ心は現在も強いが、それはもう内務省の管掌する神社を離れ、文部省の宗教局がその一部を監督し、他の大部分は警察が之を取締つて居る。託宣といふ言葉は憚つて我々は之を用ゐず、もしくはゴタクといふ類の淺ましい戯語にまでおちぶれてしまつた。さうして多數の神がりをする人々は、過半は後暗いしかも放膽なる發言を以て、人を迷はせて居る連中なのである。是が傳



説の驚くやうな變化と、假に何等の關聯は無いものとしても、この歴史こそは明かにして置かなければならない。昔もこの通り亂雜で檢束し難いものであつたやうに、想像する者があつたら大變なことだからである。

單に記録の上に散見する史實ばかりを拾ひ集めて、この千年を越える永い経過を、明かにしようといふことは不可能に近い。民俗學の方法としては、先づ眼の前の世相の中に、どれだけ迄の古い世の習はしが、残り留まつて居るかを見渡すことである。丸々痕も無く會て有つたものが、消え忘れられて居る場合も絶無とは言へぬが、日本は人も知る如く、さういふものゝよく保存せられる國であつた。昔の生活ぶりの衰頽して居るといふことは、單に其後に生れ出たものが幅を利かし、社會の表層に現はれて顯著になり、前からあるものを蔽ひ又は片隅に押付け、偏鄙な山間とか離れ島とか、さては舊弊と言はるゝ物固い人の周圍などに、幽かに傳はるだけにしてしまつたことを意味するのが通例で、それは氣を付けて捜せば見つまり、又數度の觀察の繰返しによつて、誰にでも共同に認識し得られることは、自然史の分野も異なる所は無い。我々の採集が進むにつれて、あらゆる變化の各段階が、それ／＼の條件に應じて保存せられて居ることがわかつて来る。それを時の順序に排列することは、技能の問題であつて練習もさして困難で無いが、別に史籍の斷片的な

るものに引當てゝ、古い新らしいの照準とすることも出来る。國が全體として一齊に變化しきつてしまはなかつたといふことは、制度教理の何度とも無き沿革を透して、國固有の信仰を跡づけようとする者に取つて、どの位しあはせな事か知れぬのである。

一例をこの神がりの方式の變遷にとつて、民俗學の方法を説明しようとするのも、目的は單に傳説の今と昔との比較の爲であつて、こゝで此ついでに神道の歴史を略敘しようといふやうな考へは無いのだが、或はさういふ方面にも少しは参考にならうも知れぬ。私などの見た所では、神の示現の突如として、我も人も何の豫想もせぬ際に、不意に或一人の口を假りて、神祕の語を宣りたまふといふのが、最も古いものゝやうであるが、是は現在も甚だしく零落した、いかゞはしい形で稀に残るのみであり、記録の上にも殆ど確かなる實例は無い。たゞ僅かに第二の方式を書き傳へた筆の跡に、その若干の面影を窺ひ得るに過ぎぬ。たとへば天滿天神託宣記に、近江國比良宮に於て、禰宜神良種じんのよしねが男太郎丸、年七歳なる童に託きて宣はく、我言ふべき事あり、良種等聞けとて、子が父に向つて神像の御姿、物の具の所在、二人の從者の氣質其他の事を告げたといふ記事がある。是は如何にも突如たる、思ひ設けぬ現象のやうであるが、實はこの前後に京都にも筑前にも、同じやうな異變が起り、大和の御嶽みたけには又亡靈の憤怒を説いた僧などもあつて、當時菅公が神に



祀られたまふべき民間の機運は醸成せられ、人は漠然と既に此種の奇瑞を豫期して居たのである。文書の表面には明記せられてないが、神に指定せられて隠れたる眞實を語る者が、神と何ぞの宿縁をもつて居たことは推測し得られる。ミコとかカウノコとかいふ古い名稱が、その由緒を説明するものと私などは解して居る。即ち或場合には神の後裔、又は神の仕へ人として選ばれた清い處女によつて、尊とい御血筋を傳へた者のみが、この樞要なる任務に服することが出来るので、人はその時々によつて新たに指示せられるまでも、少なくとも家だけは兼て定まつて居るといふ考へ方が、よほど夙くからこの國民の間に行渡つて居たらしいのである。其痕跡は後世にも認められる。たとへば伊豆の島々では、村長の家がもと祝はらであつた。近世に入つて始めて祭の職を第二の家に委ねたことは、諏訪氏鹿島氏等の中古の歴史とも似て居る。沖繩では本所根所もとところねところ、即ち一門の本家の家刀いへとうじ自が祝女であつて、今でもまだ別に専門の神官といふものが無い。内地の村々でも氏神を村總體の鎮守とせず、もしくは別に小さく一門の神を、同族限りで祭つて居る例は多いが、さういふ場合にも祭祀の事務を主管する者は、必ず本家の主人夫婦であり、豊後の緒形家の家傳として特に有名な花の本式傳説、即ち先祖の最も美しい女性が、神に愛でられて半神半人の英雄を生んだといふ類の言ひ傳へが、もし有るならばきつと其本家に屬して居る。周圍の

人たちはたゞ單に熱心に之を支持し保障するだけである。元は少なくとも舊家の繁榮が、決して偶然の原因からでないといふ證據であつた故に、徒らに之を包み隠したり、もしくは否認しようとしたりする者は無かつた。ところが世が變り交通が開けて行くと、先づ外部に冷淡なる人々が多く出來、之に次いで全く別の角度から、斯ういふ家々の大切な古い由緒譚を、批判し又鑑賞する風が年増しに盛んになり、あの家では昔話を歴史だと思つて信じて居るなど、笑ひ嘲りもしくは訝る者も稀にはあつて、新らしい時代に觸れた舊家の若主人等は、苦惱せざるを得なくなつた。前にも擧げた福井縣の南條郡誌でも、あの地方で特に評判の高い夜叉が池傳説が、實に色々の形式に化して人々に記憶せられ又記録せられて居る。或家では是を自分等の先祖の代に、女兄弟の一人の身の上に現實に有つた事だと思ひ、それ故に水の神の恩寵が今もなほこの一門に厚く、土地が榮えて居るやうにも謂つて居り、さうかと思ふと他の一方には、大蛇が夜な／＼娘の閨に通うて兒を生ませたとか、又は田の水の乏しい年に、思慮の足らぬ親爺が三人ある娘の一人を嫁に遣らうと約束して、魔性のものに末の子を連れて行かれたが、其子が賢いので、難なく遁げて還つて來たといふやうな話し方をして居るものもあり、なほこの二つの中間に位する話も幾つかあつて、雙方縁の無い言ひ傳へでないことだけは誰にもわかる。弘く全國の類例を比



べると、水の神と縁組したといふ傳説を、信じて居る家の方はもう追々と少なく、之に反して所謂蛇掣入の説話の方は、自由にどこまでも流布し、且つますます面白をかしく、子供でも聽いて笑ふやうに作りかへられて居る。どうして又斯んなたわいも無い昔話と似通うた出来事を、我家だけでは實際あつたことのやうに、代々信じて來たのだらうと、恠しむ人々はまだ實直な方で、多數は概括的に之を古人の無智蒙昧に歸し、努めて問題の外に置かうとしたのが、所謂歐化時代の普通の狀勢であつた。それが全然跡形も無くなつてしまはぬ前に、早く此事に氣が付いたのはしあはせだつたと思ふ。疑ふ必要などは始めから無かつたのである。是は最も小規模なる祭政一致、即ち個々の族長が自ら神を祀り、別に專業の神職を設けて居なかつた時代に、直接に啓示を受けたものゝ保存であつた。たゞ後後の發明と展開と流行とが、それを段々に蔽ひ包み又は混雜させて居るのである。此點だけは新たに立證する方法を見つけないければならない。

## 一五

神が、り様式の第三次の變遷は、神社專屬の或家筋の者の活躍によつて誘致せられ、是が又大きな影響を傳説の今ある形の上に及ぼして居る。儒教を中心とした近世の合理派教育は、出来るだけ奇瑞を公認せず、寧ろ人心の動搖を抑制するやうな、行政方針を執り續けさせて居た爲に、この痕跡はもう大分幽かにはなつて居るが、それでも期間が非常に長かつたのだから、今も氣をつけて見ると端々には、古い世の姿を思ひ合せるやうな現象がくり返されて居る。新たに神を迎へ小さな祠を建て、心の行くばかり祭りたいといふ心持なども其一つであつて、其動機は既に複雑を極めて居るらしいが、なほ大半は何か不思議の靈告があつて、さうせずには居られなかつたやうに説明せられる。ともかくも殆ど禁止にも近い嚴密な條件があるのに、いつとは無しに屋敷の隅、又は持山の片端などに、さういふ登録もせられない小社が幾つも出来て、よい機會があればそれが少しづつ大きくなる例は、今日も必ずしも稀有でない。以前は更に多かつたものと思はれて、名ある神社の舊記のうちにも、たゞかりそめの草葺きの中に、最初僅かな里人のかしづき仕へて居たの



が、程も無く遠近貴賤の信心を集めて、莊嚴美々しい御造營を見たといふ類の記事が屢々ある。現在無格社の名を以て認められて居る數多くの御社にも、事實その過程に在るものが幾つとなく算へられる。その創立が特に或一つの時代だけに限られて居らぬのを見ると、斯うして次々に新たなる神を勧請してもよかつたといふことが、或は我邦固有信仰の一つの性質では無かつたかと思ふ。少なくともこの大御國の始めから、既に在つたといふ御社などは一つも無く、何れも皆それからの二千六百年間に、遅く早く其地に御鎮まりなされたことだけは確かである。

古い書物の上では、是を顯祀と謂つて居る。顯祀は今日の解釋からいふと、祭場の固定といふことが主たる目的のやうにも見えるが、それよりも前に必要であつたのは、住民が先づ神の御名を知り、且つ神徳のすぐれて高くあらたかなことを、身にしめて感じ覺ることであつた。勿論個人は單獨に之を發明することが出来ない。感謝と祈願の毎年の方式、何を御供へ申し又どれだけの物忌をすべきかといふことも、人が定めたものに依ることは心もと無く、普通は神様の御差圖を受けて、それを守ることになりまつて居た。右か左かといふやうな單一な疑問ならば、卜によつて決する方法もあるが、言葉の説明が無くては判らぬものは、依りましの口を通して聽くより他は無かつたのである。神を顯はし奉りし者が乃ち其神の仕人となり、御名を家の名に負うて世襲したといふことは、夙に猿女君氏の舊辭にも掲げられて居る。同じ原則は末代にもなほ認められ、多くの御社には女子で相續する特殊の家筋が從屬して居たのみならず、巫女を教祖として新たに一派の信仰を開き、職を肉身の子孫に傳へて居る例が現在もある。神に最も親しいことを證明した者の特權として、何人も之を争はうとしなかつたのである。

所謂司祭職の沿革に關しては、算へきれない程の色々の説があるやうだが、少なくとも我々が自ら證明し得ることは、日本では是に變遷があり、大きく分けて二つの段階があり、しかも前のものは全く消え盡さずに、片隅には残り留まつて居る故に、今見る國民の信仰形態に、餘分の複雑さをもたらして居るといふことである。その二つといふのは、専門の神職の無いか有るかの差であつて、是は職といふ言葉の定義にもよることだが、とにかく以前は祭の事務を掌ることによつて衣食の營みをして居る家、即ち職業の世襲などは有り得なかつたのである。神様が或土地及びその住民の一團と、久しい特別の縁故をもつて居られるといふ考へは、昔の方が遙かに強かつた。そこに自然に定まつた中心の家があつて、其主人は代々奉仕の任に當つては居たが、是は族長であるが爲に祭の役を勤めただけで、すべて一方にめい／＼の生産事業を持ち、通例は皆富裕であつた。御互ひのまだ記



憶する頃まで、草分けの舊家で村一番の物持といふ家の、屋敷は昔から御社の境内に近く、祭日には必ず出て最も重要な役目に就き、人からは鍵取とも、又時としては神主さんとも呼ばれて居るものが、幾らも榮えて居た。斯ういふ家々の主人は由緒に明るく、神の恩徳を仰ぐの念は誰よりも深く、是を譽れとも誇りとも考へて居たことは專業の家に譲らず、殊に其信仰が世に弘まつて、領主を始め外からの參詣が多くなれば、公けの交渉は此側面のみに繁く、次第に世襲の神職と同視せられるやうになつたが、大きな相異はこの方は家あつての祭であり、祭に仕へるが故に興じた家では無かつた。是と現行の任命制度とを比べて見て、變化の著しいことは言ふにも及ばぬが、以前も頻々たる移動が無かつたといふだけで、神を祭るといふことを職業とした家が、別にはと對立して可なり古くから出來て居たのである。之を神職と呼び、職で無い方を神主といふ呼び方も稀に残つて居るが、一般には二つの語はもう混同してしまつた。社領給付の方式にも差別があつて、舊家は屢々家舊來の持地に、公課免除の特權を付與せられて居ただけであつたが、是も後々には直接に神社に寄進せられるものが多くなつて、之に養はるゝ神職の地位を有利安固にし、農民地主として兼て神を祭るといふ家が、進んで專業の列に加はることを辭せぬことになつたのである。物質の問題に觸れるのも好ましくないが、是は何分にも大きな變革であつた。

一方では年々の祭典が支出であり消費であつたに反して、新らしい職務では是が收入であり又生計であつた。このプラスとマイナスの相異は、やはり暗々裡に信仰の形態を動かさずには居ない。少なくとも地方の傳説の發達の上には、是が目立つほどの影響を與へて居る。それを説明するだけが私の此話を試みる目的であつた。

前に傳説が神がゝりによつて展開することを述べて置いたが、その神がゝりといふものが非常に面貌を改めたのである。第一にはこの重々しい任務に指定せられる人の種類がちがひ、第二には其機會がもと少なく、後には著しく増して來た。第三には又之によつて傳へられる言葉が、次第に内容を異にして來たのである。族長が自ら神の祭に勤仕して居た時代は、同時に又新たな啓示の必要の最も少ない時代でもあつた。人は其高祖に與へられたといふ神の教を誠實に銘記して、之に基づいて毎年の恆例を立て且つ守り、一方世の中は平穩であつて、問うて決しなければならぬ迷ひ疑ひが稀だつたからである。尤も月の晴雨冷温、作物のよさあしきは不定であつたらうが、是は年頭の粥占灰占氷の様、其他自然の兆候によつて、簡単に告知を受ける慣行が、殆ど經驗と近いものになつて利用せられて居た。さうして何か人智を超越するやうな、大きな事件が起らうとする前には、必ず我神の御示しがあるものといふ、確信だけは續いて居たのである。是にも異常な物音



がして盜賊火災に心付いたとか、山の鳥獸の鳴き立てるので敵の攻め寄せることを知つたといふ類の、人を介せずして覺る場合は多かつたが、愈々事態が錯雜して、群に何等かの心構へ、又は轉禍爲福の方法が講ぜられるべき際に臨み、爰に始めて神の託宣は降つたのである。めつたに無いことである故に、極度に其印象は強烈であつた。文字が具はつて居れば無論記録が出来、上司にも申告せられる。その能力の無い人の集まりでも、記録に優るほどの細密なる言ひ傳へが出来る。是が傳説の源を養うたことは、幸ひにして若干の證據を留めて居るのである。大體に求め又は豫期して聽くといふことは尠なく、意外な時と處と人に於て現はれるのが例だつたかと思ふが、突發と云つたところで實は空氣はもう動搖して居たのである。従つてその空氣に觸れ易く、又特に敏感であつた者が、依りまじになつたのは自然である。初期には幼童の私の心無しと見られる者が、忽然として庭上に走り出で、跳り上つて神靈の語を吐いたといふ話が多かつた。それが妙齡の處女を主とし、後更に人の妻も指定せられることになつたのも一つの變遷だが、何れにしたところが家主の身うち又は從者などの、自身獨立して何等の主張も利害も無い者の言でなければ、人が歸依禮讚の耳を傾けなかつたことは同じである。但し一たび此様な神變奇瑞に參與した童子女性の、残りの生涯は特殊のものであつたらう。さういふ人々をたゞの亭主女房とし、

尋常の勞作に服せしめることは、貴といふ記念が之を許さなかつたかも知れぬ。少なくとも周圍は之を別扱ひにし、本人も亦色々の物忌を守り、その一言一行は自他ともに注目して居たことと思ふ。神の祭の日にはなほ更のことで、是には定まつた座席や役目のあつたことも想像し得られる。もしも三十年五十年に一度づゝも、同じ現象が再起するやうであつたら、同じ大家族の屬員でもあつたことだから、この前後二人の神依女かみこめの間には、相續と謂つてもよいやうな聯絡が行はれ、内部には又氣質の遺傳、氣風の感化といふことも有り得る。たとへば叔母の一人が曾て神の御言葉を傳へたことのある家では、それを目撃し又は話に聽いて居る姪女の中から、又一人の神つきが出るといふ場合が多く、自然に女系の相續のやうに見られることになつたらうが、たゞ此方の神がよりはそれほど頻繁に現れたらうとも思はれず、又少なくとも神おろしの作法が、技術として傳授せられるやうなことは以前は無かつたのである。乃ち靈媒の地位の専門になつたのには、なほ一つの有力な理由が、隠れて久しい昔からあつたといふことを考へさせるのである。

(註) 正月十五日の粥の中に芦の管などを入れて、作物の豊凶を卜し、又は十二の豆や胡桃を焼いて月々の晴雨を問ふの類は、今でも各戸の行事として行ふものが多い。



是は日本人のみが特に豊富にもつて居る經驗であつて、他國の學説を借用するといふことが、わけても固有信仰の理解の爲に、大きな妨げになつて居るよい例かと思ふ。所謂一神教の國では、稍似た現象があつても、ちがつた見方をしなければならなかつたらうが、我邦では昔から天神地祇、もしくは國中大小の神祇といふことを謂ひ、それを中央の官府のみで無く、後には個々の地方に住む者も皆口にするやうになつて居た。顯れたまふ神々の數は多かつたのである。大直日・大禍津日の御名は古記に見えるのみで、善惡二神の對立鬭争はむしろ聽くことが稀で、小神はよく恚り屢々崇るが、之に對しては大神の統御があり抑壓があつた。八幡北野を始めたてまつり、中古の多くの神々の、全國に尊奉せられた起りはそれらしいが、其點は別に述べたものがあるから爰では省略する。地方の神々は各々土地を劃して、専ら緣由ある住民の庇護に任じたまひ、元は相互の交渉は無かつたらうと思ふのに、甲乙境を接し人の往來の多い處に限つて、屢々神いくさ又は神の御仲が悪いといふやうな口碑がある。是などは寧ろ住民の歴史、もしくは過去の感情を映發したもので、由つて來たる所は別にあつたものか、私にはまだはつきりと説明しかねる。是だけを外にして考へると、少なくとも一つの地域内に於ては、神々の間には協力があり分擔があり、讓歩があり又時としては交代さへあつて、大小新舊の數多い御社があつても、曾て衝突といふことは無かつたやうに思はれる。京都あたりの古い大きな御社には、その境内に全國の著名な神々を、幾つとも無く末社として迎へ祭つて居る。田舎でも神信心の盛んな村といふと、氏神以外に算へ切れぬほどの祠を建て、それへ順繰りに參つて居る。門の戸口には諸社の御札を貼り、神棚には又幾つもの神を齋いはひ籠めて、毎朝その御名を唱へて拜んで居る家も多い。さうしてまだ一方を拜むといふことが、他の一方の御氣に入らぬといふことを聞いたことは無いのである。是は確かに日本の神道の、一つの特徴といふべきものだと思ふが、果して大昔から此通りであつたか。又はさうなつてもよい理由だけはあつて、後にこの傾向が殊に顯著になつたものか。何れにしても説明せられなければならぬ。今まで構ひ付けずに居たことが寧ろ奇恠である。

私などの解する所では、是は神々の新たなる出現、此地に祭り申せといふ御示し、即ち昔の記録に顯祀と謂つて居る現象が、末々小規模に又非公式に、しかも頻々と續いて起つて居た結果であつた。早期に鎮座なされた御社の基礎が既に固く、且つ其數が多くなると、



あとから顯れたまふ神々の立場は、勢ひ若干の變化を示さなければならなかつたのである。昔と後の世との可なり著しい相異は、延喜式の三千餘社を始めとし、古史に見えたる神の御名が、大半は所在の地名を稱へ、又はそれ〴〵の意味をもつ言葉を以て呼ばれたまふに反して、今日は全國共通の著名の御社の名ばかりが多い。この中には戦亂流離の間に元の傳へを失ひ、もしくは便宜の爲に表向きの名稱だけを改めたといふものも有るやうだが、大抵は社記が残つて居て勸請の年と、その神祕なる動機とを説いて居る。實際又神を奉じて新たに移住して來た村も多かつたらうが、もしもこの御社の勸請以前から開かれて居た土地だとすれば、斯ういふ新たな神々の名などは、内に居て一つの御社だけに年頃仕へて居た者の想像には浮びさうも無い。一言でいふならば世上の知識である。必ず外側からそれを運び入れた者があるのである。さうして其機運はもう久しい前から動いて居た。

古くは鹿島の王子神が、奥州の各地に出現なされたといふ記事は三代格に見えて居り、又その御社が後世までもあつた。京都の周圍に於ても、王子又は若宮の信仰を伴なふ大社は、すべて皆移動したまふ神であつた。今の解釋はどうなつて居るか知らぬが、是は神の御子の言葉によつて、御父神の神徳を感じ知るといふ、一つの託宣方式が備はつて居たことを意味し、従うて多くの神人の是が爲に旅行して居たことを意味するかと思ふ。さうい

ふ中でも八幡の若宮だけは、特にこの教理が發達して居たかと思はれて、恨み憤りを含んで世を去つた人の靈を、若宮として祭つて居るものが全國に多い。長くなるので詳しい話は出來ないが、是も神が〴〵によつて大神の力を示された點が、他の多くの御社の若宮信仰と一致して居た故に、さうなつて來たのだらうと私は解して居る。

とにかくこの神々の新たな出現は、地方にとつては非常に鮮かな又力強い印象であつた。祖先以來のところの神様は、どちらかといふと受動的で、無事平穩の日の恆例の祭には、心の底からの感謝を捧げることも出來るが、一朝災厄に脅され又は憂患不安の絶えない時代に入ると、慰撫の力はあつても惑ひを釋くまでののはつきりとした御教へが無い。冷淡なる外部の者の目から見れば、是は神が〴〵に任ずる者の能力と素養、もしくは用語の不足と形式化との致す所なのだが、物をさういふ風に考へないのが純朴なる昔の人の性であつた。神も亦その氣質を反映して、率直に他の神の威力を認め、或は禍害の今までの方法を以て、防ぎ難いものがあることを告げられて居る。乃ち託宣の様式は此際に於て又大に變化し、その機會もやゝ頻繁になつたかと思はれるのであるが、それが聽く人の心を動かす力に至つては、なほ遙かに新たな來住者、即ち信仰に關する色々の知識を積み貯へ、自在に數多くの神の名を擧げて、其靈驗を積極的に述べ立て得る者には及ばなかつた。



是が傳説の時代相、即ち後々持込まれたものゝ色彩に富み、且つ幾分か文藝に近く、展開して行かうとした事情を説明するかと思ふ。旅の神人たちとても、最初は必ずしも技術として、神降しの道を學んだのでは無かつたらうが、彼等を感化した信仰の雰圍氣は特殊に濃かで、殆ど練習と名づけてもよい程の経験を重ねて居る。是が一處に定着して形式化してしまふまでは、始めての印象は花々しくも又感深いもので、到底素人の家に成長した臨時の神憑きの、肩を並べることも出来ぬものであつた。其結果として、少なくとも諸國の名ある御社だけには、みこの家といふものが專屬し、神は必ずある定まつた女性を介して顯れたまふことになつた。新舊大小の社毎に、祭祀の方式が著しくちがつて来て、古い形が寧ろ日蔭にまはつたのも、原因は是に在るやうに私などは想像して居る。勿論土地の信仰と調和しなければ、外から入つて来た者の定住し得る筈も無い。又在來の氏人の中から、家産を分たれて社家となつたものも多いことであらう。とにかく今まで持傳へて居た家の傳説が、正面から否認せられるやうなことは絶対に無かつたらうが、それが新たな解釋を添へられ、もしくはもつと複雑な物語の一部に編み込まれてしまつたといふことは有り得る。この雄大な同化作用は、實はもう千年も前から始まつて居た。それが色々と形をかへて、私領割據の時代にもなほ續いて居たことは、次々に擧げようと思ふ事例からもわ

かつて來るのである。さういふ變革を計算に入れられないで、直ちに今ある傳説を以て上世信仰の倒映と見ることは、學問としては確かに不當であり、又危険である。警戒しなければならぬ。

出来るだけ話を手短かにしようとして、或は説き漏らした點があるかも知れぬ。こゝに是非とも附加へて置くべきことは、神降しの職能の發達した結果、第一には專業の巫女の隷屬して居る大きな御社と、他の從來の土地の住民が主になつて祭を營んで居るものと、信仰行爲の外貌に非常な差異を生じたことである。公けに知られて居るのは素より前者に限る故に、是が正規となつて後者の特徴は認められずに終り易い。たとへば古い靈感がなほ潜み流れ、たま／＼此間から臨時の神憑きが顯はれて、人の心を捉へたとすると、作法が手筒てづつであり言ふことが粗朴に過ぎる爲に、折々は淫祀を以て目せられることもあつたのである。第二には一方専門の巫女の役目が、段々と形式化して行くことである。今まで知られなかつた神の名を顯はし、祈願の必ず驗ある幾つもの前例を説き示すといふことは、斯ういふ人たちのすぐれた能力であり、それが又御社との因縁を動かぬものにした理由でもあつたが、一旦その地位が固まつてしまふと、同じ奇瑞はさう度々はくり返すことが出来ない。新たな示現に大きな効果があれば、信條は之によつて改まらなければならぬか



らである。それ故に基礎の確立した多くの御社の祭典には、湯立てとか笹ばたきとか、其他色々の託宣の外形はあつて、年の豊凶日の吉凶といふ以上に、耳を驚かすやうな意外な靈告はもう聽かれなくなつて居る。もとは稀にそれがあつたのもあらうが、近世は殆ど其跡を絶つて、舞やかたりごとは古い定まつた記憶の復習に止まり、それも追々に技藝としての独自の發達を遂げることになつた。神と人との年久しい交通の一つの路、さうして又新たなる傳説の一つの泉は、却つていつと無く埋もれて行つたのである(註)。

(註) 村の農家に生れた娘たちの説く言葉は、どんなに強烈な信仰に裏付けられて居ても、單調であり又素朴であつた。是と色々の素養をもつた外來の巫女の、花やかで又整つた神語りとが比べられると、印象に大きな差等があつたことは明かである。しかも、之を信じようとした人の心は元のままだつたとすれば、古くからの傳説の消え薄れるのも止むを得ない。さうで無くとも新らしい託宣は、前からあつたものを訂正する性質をもつて居たのである。

## 一七

傳説が少なくともその發生の地に於て、信ぜずには居られなかつたわけ、しかも歴史の知識の普及すると共に、屢々訝られ修正せられ、又は丸々否認せられなければならなかつたわけは、私だけは説明することが出来ると思つて居る。たゞその説明のし方が拙な爲に、もしや合點せぬ人がありはしないかと危むばかりである。最も大きな今までの不審は、同じ傳説があんまり方々に有り過ぎるといふこと、是は二通りに解することが出来る。元來一つの民族だからそこでも爰でも、一つの事を信じたのは當り前である。それをたゞ歴史上の事實に引當て過ぎる故に、同じ人が數處に生れ、數處で世を終つたといふやうな結果にもなるので、是は寧ろ後の修正が悪いのである。第二には或は同じ傳説の種をもつた者が、手分けをして諸國を歩きまはり、無意識に又は意識して、其種を行く先々に播いたかも知れない。この方は比較的後世のことである故に、尋ねて見れば其形跡は確かめられぬことも無い。仍て順序として先づその部分を説いて見ようと思ふ。

もしも自分などの推測する如く、神が、りが傳説の主流であつたとすれば、その方式の



古今の差といふものは、必然に後者の形態に影響して居る。示現の言葉はいつの場合にもたけ高く力強く、日頃の物言ひとは異なつて居たであらうが、單に里人の中から或一人の童兒なり女房なりが、俄かに之を宣べ傳へる役に指定せられ、他の一同が集まつて承はるといふ際などに、さういかめしい辭句が用ゐられたらうとは思はれない。方言が既にあるならばそれも恐らくはまじつて居たであらう。ところが後世は之に關する特別の用語が、いつの間にか數多く出來て居る。さういふ中でも口寄せなどいふ者の言葉は、全國が大よそ同じで聽き馴れた人には解るが、他の多くの場合には通譯のやうな人が必要で、是が普通には問ひ手の役をも兼ねて、段々と重要な地位を占めることになつて居る。所謂司祭職の發達には、常人に企てられない作法の端嚴、もしくは物忌潔齋の徹底ぶりといふことも、確かに原因の一部ではあつたらうが、もとはそれよりも更に大きな條件として、この人々の仲介能力、即ち神の語を最も適切に且つ感銘深く解説し得る力が、重んぜられて居た。何れの宗教でも、一度はこの段階を経過せぬものは無いと思ふが、殊に日本には今なほ痕跡といふより以上のものを留めて居る。是が練修と冥想により、乃至は學問の進みに伴なうて、次第に精密に又論理的になるといふことは、ちつとでも歎かましい傾向では無いのだが、その暗々裡の影響を受けて、他の半面には神の直接の御言葉が、愈々幽玄微妙

のものになり、殆ど獨立しては意味を取り難く、もしくは幾様にも解し得られるやうな、餘りにも大まかなものになつてしまふことを免れなかつた。以前の臨時の依女よめ因童よわらひが、斯ういふ語り方をして居た氣づかひは無い。それでは多くの人が只あつけに取られて、信心の統一すらも望めなかつたらう。まして其印象を後の世の語り草に、斯うして數あまた留めることは出來なかつた筈である。神學の研究が盛んになつて、始めて啓示まげはが間遠まげはになり又日蔭のものとなつたことは、よその宗教も異なる所はなかつた。たゞその中間の過渡期現象が、日本では今もまだはつきりと認められるだけである。

出來ることならば是をやゝ詳しく、實例によつて説いて見たい。八丈島の八郎爲朝傳説は、その根據かと思はれる巫女の語りものが幸ひにして記録せられ、それが又栗田博士の古謡集にも轉載せられて、誰でもたやすく讀んで見ることが出来る（國文論纂一三四五頁以下）。今ある保元物語を假に眞實の記録と定めても、是は又それとさへ合致せぬ點が多いのである。第一には爲朝が狩野介の軍船に攻寄せられて、最後の花々しい矢いくさをしたといふ場所が、彼には明白に伊豆大島の館とあるに反して、此方は八丈島の屬島、小島といふのが其遺跡と傳へられて、そこにはいつの頃よりか爲朝大明神の祠があつた。物語には九歳になりける嫡子島の冠者爲頼を喚びて刺殺し、其弟の五つになる男子、二つになる



女子をば、母抱へて失せにければ力なしとあつて、是は大島での出来事であつたのに、八丈の方では爲頼の子次郎爲宗、後に僧となつて父の遺骸を改葬し、其地に寺を建て、子孫相續すといふのを、即ちその遁げ去つたといふ五歳の弟だらうと解して居たのは、地理を無視した亂暴な結論であつた。是とよく似た推論は琉球の方にもある。簡単にいふと、さういふ風に解釋したい人が先づあつて、啓示の重點は寧ろ次第に其方へ引寄せられたのである。巫女の言葉はいつの場合にも、さうはつきりとした意味は傳へて居ない。單にさうも取れぬことは無いといふ程度の茫漠としたものであつたのを、權能ある説明者が傍に在つて之を敷衍し、聽く人は之を合せ信ずることを得たのである。八丈島の神衆かみしほのかたりものは、この點に於てよい一つの例であつた。後には或はもう少し具體的なことを語つて居たかも知れぬが、記録に傳はつて居るものは實に思ひ切つてぼんやりして居る。試みに其一部を抜書きして見るが、之を讀んで見ても何の事を述べて居るのか、わからぬといふ人がきつと多いであらう。しかし少なくとも島近くで船戦があつたといふこと、靈が曾ては其事件の中心であつたこと、弓を射る人であつたことだけは窺はれる。聽く人々にはもうそれだけでもひし／＼と、聯想の胸に迫るものがあつたのではないかと思はれる。

しげとう眞弓に弦かけて  
 四ここの所物馳せめぐり  
 こがねの花を尋ぬるが  
 つつみが澤に見かけたれ  
 大かりまたを引きかけて  
 一寸ほれば掘り出さず  
 二すんほれども掘り出さず  
 三すんほれども掘り出さず  
 四寸五ぶんで見かけたれ  
 五分半寸でほりかけて  
 五りやうの堀河おもしろな  
 十や三ひろ掛けわたし  
 大樋こよう樋かけはし(わたし?)  
 樋口そろ／＼いでる水  
 君がたのめとあるものを



これもにやうのたらし水云々。

後段はその泉の水を田に引いて、米を作つたことを述べて居るのが、石清水の信仰などを思ひ合される。島は特に水の貴とい、泉を大切にした土地である故に、是が感銘の深い昔からの語りごとだつたかとも想像せられる。とにかく此部分まではまだ平和であるが、それからいよいよ船戦のことに及び、しかもその移行が尋常を絶して居る。

四郷の百姓申すとて

上藤五ぜんたて(で?)申出す

十や三人と申しては

おんのみたけと(申?)しては

京の殿まで申し出す

二ほ(日本)の殿えかもういけや(?)

二ほのかたきの寄せ來れや

千ぞう小舟を押し浮けて

夜のま忍びてやさしやな

山ほうしのびてやさしやな

共にしくれてやさしやな

水無き島え馳せつけて

人見の石に腰かけて

水にかられてこいかれて

はたきりおれてはたきか(?)

中のこしまの水とりて

君がぞうふとあけちもの云々

と再び又水の事を語るやうであるが、最後にはなほ一度くりかへして、

二ほんのかたきの寄せ來れや

からすべつとう寄せたるか

君がへんじはかはらぬか

君にへんじはかはらぬと

二ほんのかたきの寄せくれや

君がなびきにわれ参る

さらばべつとうやさしやな



さらばかいれよしやうこくえ  
 ほうしがみ舟は一そうで  
 二ほんのかたきは十二そう  
 かたきの箭だね取りつくし  
 君がいたけにか積みちもの  
 おしろまいにか積みちもの  
 山崎くれないさしひらき  
 十二やそうはおもしろな  
 十おふみそなえ召されたれ云々  
 と述べて、とにかくに寄手の兵船と、箭いくさをしたらしいことだけは我々にも感じられる。斯ういふ取留めない文句を援用するのも如何なものだが、是は過渡期のみこ言葉の珍しい型であつて、以前の突發的な靈託と異なる點は、人が記憶して居て何度でも同じ詞章を語り、後は次第に世の常の語りものとなつて行つたことで、しかも是にはまだ最初の示現の方式を、些しも刪定せずに保存して居るのである。前に抄録した文段の中途に、

さらば還れよしやうこくえ  
 とあるのも其一つだが、神靈は斯うして常に今や靈媒の身を去つて行かうとすることを告知する。恐らくは最後の教へだから注意して聴くやうにといふ意味だつたらうが、殆ど形式化して今でもまだ梓巫あきみの言ひ立ての中に残つて居る。愈々かたりごとが終りになると、それを一段と明かにくり返すことは勿論で、八丈の例は必ずしも特異では無い。

一夜のさくれかしやうの人たち  
 七大(代)までも拍子ひょうしせよ

遊び還るぞはが(我)ところへ

人見の石にはが所へ

象が鼻へはがところへ

大澤つほ澤はがところへ

すきかとのみは(?)にやが所へ

もやのやしるやはが所へ

ひろのちやうはいはが所へ

斯う謂つて靈の言葉は終るので、「我所」は即ち人の畏れて行かぬ靈地であつたかと思ふ。それから又一方には語りごとの始めに、



はや乗りかはりや／＼／＼  
 數の明神あかすゑて

神しやうろうぞそれしだい  
 次第々々に入れそうな云々

といふ句があり、中間の變り目には

ほうほう／＼七ほうてう

木の根ほうてうかなほうてう

いそ根ほうてうかなほうてう

といふ様な意味の取りにくい言葉がある。「乗り替り」とは多分一つの靈が去つて、第二の靈が來り依る時の合圖であつたらうが、後には單なる開始の語となつたことは、義太夫節などの最も不審な語り出しの文句、「入りにけり」や「押しあけ入りにけり」と同一系統のものであらう。たしかに作者のあつた近世の語りものにすら、なほ時折はこの無意識な殘留がある。まして或時代の奇異の靈告に驚嘆したものが、できるだけ其言葉を保存しようとしたのは當り前のことと思ふが、さて實際に残つて居るものが、案外にまだ見つかつて居ない。一つには搜し方もたしかに足りなかつたらう。しかしこの業務に携はつた男女の、

境涯と素養にも激變があつて、古い様式は棄てられた場合が多かつたのである。だから  
 みこ言葉の變遷を大よそ見究めた上で無いと、信仰と傳説との關係は考へて見ることがや  
 やむつかしいのである。



八丈島の八郎傳説が、始めて江戸の學者に認められたのは、今から百三十五年前の文化十三年、即ちこの悲壯な船戦があつたといふ日から、六百五十年ほど後の事であつた。自ら源爲朝の後裔なりといふ宗福寺の主僧が、病氣療養の爲に出府して、深川六間堀に住む弟の家に滞在して居た際に、之を診察して居た杉田公勤といふ御醫者が、其話を聞いたのが弘まつたといふことは、大田南畝の南畝莠言にも見え、又杉田氏同藩の伴信友が、中外經緯傳にも同じ事を詳しく述べて居る。寺には勿論その以前から、爲朝を始祖とした系圖が出来て居た。二十年ほど前には境内から石槨が顯はれて、爲朝之臣鐵丸作といふ文字を彫つた硯が、紐鏡や磁器と共に出たといふ話も知られて居た。しかし文字が此島に利用せられ出したのは、實はさう古いことで無く、年代記にはたゞ天文頃からの事件が、ほんの少しばかり傳はつて居るだけである。其以前は單に口から耳への承繼で、それ故に又神靈に依られた女性の語りごとが、格段に耳を傾けしめたのであつた。聽けば忘れることの出来ない數々の印象が、此中には含まれて居て、必ずしも文句を暗誦しようとする風習は無くとも、自然に同じ語りが何度とも無くくり返されたことは、殊に新たな經驗の少な

い島地では、他と比べて一層著しかつたことと思ふ。もとより異常心理に發した言葉であるが故に、次々と變化して來た部分はあるにしても、中には或は八郎爲朝の時代よりも前から、取傳へて居た文句も交つて居るかも知れぬのである。問題は寧ろさうした古來の語りごとの間から、どういふ風にして爲朝の傳説といふものを、導き出すことを得たかといふ點に在る。外部の人々の是までに注意して居たことは、島では八男を意味する八郎といふ語を、ハツチョウウに近く發音する。従うて今日八丈の文字を宛てゝ居る島の名も、もとは八郎が島と解せられて居たかも知れぬのである。次には御曹司といふ言葉、是が中世の二つの物語によつてひどく著名になり、後には爲朝義經兩名の專有物の如くにもなつたが、果して源氏の世盛りの頃から、之を若大將の意味に用ゐて居たかどうかは疑問である。以前の用法では曹司はつぼね、もしくは門長屋のやうな別房である。婚期に達した息子をそこに住まはせる故に、さういふ名の出來たことは後世の部屋住みといふ語も同じだが、それは何もこの二人に限つたことでは無い。非凡の英傑の弱冠の頃を、主題とした説話は我邦にもよく發達して居る。中でも桃太郎と最も近い「御曹司の島渡り」などは、いつの頃からか之を九郎判官の逸話の如く心得て、その餘りにも史傳と兩立し難いのを、歎息して居た人もあるが、それこそは餘計な心遣ひであつた。人が悉く物語を信じて居た時代から、



それが文藝として鑑賞せられた最近世に至るまで、神に縁由をもち又は特別の恩寵を蒙つて、興り榮えたといふ家々の始祖は、多くは年少の日に於て奇瑞を現じ、もしくは偉業を爲し遂げたことになつて居る。日本はそれ程にも若いといふことを重んじた國であつた。たゞ土地により又は場合によつて、その主人公を呼ぶとなへが區々であり、御伽草子の盛んに行はれた時代には、之を御曹司の名を以て語ることが、人望があつたといふに過ぎないのである。海路を遙かに隔てゝは居るが、是は人間の口言葉であるが故に、人が渡つて行くからには附いて行くことは不思議でない。乃ち八丈島の御曹司の言ひ傳へが、偶然に後の爲朝傳説の素地を、用意して居たといふことが想像せられるのである。

そこで第二段に問題となるのは、島では現實にいつの頃から、源爲朝といふ勇將のあつたことを知つたらうか。もしくはこの語りごとを口にした巫女たちが、既にさういふ名を覚えて居たらうかどうかである。今でこそ日本外史などがあり又色々の繪本が出て居て、七八つの兒童でも爲朝を記憶して居る者が多いが、もとは普通の本としては保元物語に書いてあるだけであつた。それが八丈の島に持渡られたのが、さう早い世の事だとは思はれないのである。前に引用してある船戰の箇條、「にほんのかたきの寄せ來れや」といふ文句が、何か偶然の一致では無いやうに、ふと考へ付く人は多いかも知れぬが、是を狩野介

が武藏相模の軍勢を催して、大島の館へ押寄せたことに、解するといふことが實はやゝ無理である。八丈の人たちは昔から、島を日本の内と考へて居る。對岸の國地から渡つて來る者を、日本の敵と呼ぼうとは思はれない。是は寧ろ日本の國に仇なすもの、即ち惡鬼魔障の類を、邊土であるだけに殊に警戒して、神に依つて禦ぎ守らうとしたものとも見られる。源平時代の確かな記録にも、裸で腰蓑を著けた黒い鬼が、伊豆の半島に上陸して人を殺した報告が載せられて居る。さういふ實驗を記憶して居たのでは無いまでも、早魃その他の島の災害を國土の敵として、怖れもし又戦ひもしたことは有り得る。それだからすぐに此句に續けて、「君がなびきに皆參る」と謂ひ、或は「君に返事はかはらぬ」とも、にほんの殿に申し出でたと謂つて居るので、意味ははつきりとしなが泉を掘つて田に注いだといふのも、もとは早魃を邪靈のわざと見た、同じ一續きの對抗策のうちであつたかも知れない。とにかく既に保元物語の内容を熟知して居た者ならば、たとへ夢幻の間にでも、よもや斯ういふ風には爲朝の語を傳へなかつたらう。要するに解説が先づ大いに進んだのである。さうして代々の神衆かみしんの言葉が、それに引かれて少しづつ動いて來たのである。他の府縣の多くの傳説にも、同じ傾向は一樣に現はれて居る。歴史がぐんぐんと發達する學問であつた爲に、あまり早目に是に擁護せられた傳説は、妙な抜き差しのならぬ姿に固定



してしまふだけで無く、時々はその注釋の不信用に捲添へを食つて、本來の價値をさへ疑はれることは、必ずしも八丈ばかりの不連なる例ではなかつた。

しかも比較と客觀の困難な事情は、島地であるだけに幾分か多かつたとは言へるであらう。島の人たちの中世に關する知識が、ほんのもう少し精確の方へ近よつて居たら、寧ろ爲朝の傳説などは信ぜずにすんだかも知れぬのである。是を流人の輸入文化だと言ひ切ることは出来ないが、とにかくに直接保元物語を讀んで考へて見た人は幾らも無くて、たゞさういふ話が有るといふことを、聽き傳へて居た者だけは相應にあつたらしく、それが又巫女の語りごとの中にも痕を留めて居る。たとへば「八郎そうし」といふ名は、たゞ數多くの人の名の列記の中間に見えるのみで、果して爲朝のことをいふか否かも疑はれるが、その總員の數を「五十四きも皆參る」といひ、又は其あとに

五十四きは御三ぶらい

一のふなめにかみそうせ

五へいかきたれそうせちか云々

ともあり、又他の一篇にも

五十四きがその中に

まつさきかけるは忠次郎

忠次郎一人もつならば

六十六くにおししない

七つ島ばらおしゝない云々

ともある。流布本には「附従ふつはもの二十八騎ぞ具したりける」とあるが、鎌倉本と呼ばれる一異本には、其勢都合五十四騎とあるさうで、此點はよく一致し、たゞ何と無く言ひ出したのではないやうである。爲朝といふ名を明かに示したところも、「御きみなのり」の歌詞の中に一箇所だけはある。しかも其敘述は精確を缺き、到底保元物語の文段を耳にしたことのある者の、思ひ浮べさうな空想では無いのである。煩はしいけれども神がよりの光景を髣髴せしめる爲に、今少しばかり引用して見るならば、

御きみなのり

うき世くは有りもしつ

君が御さかりてこそ(?)

うき世くは皆參る

おちなふ(の)さうを名のろうか



おぢなのそうは九ていどの  
 ちゝの五御(そうは十てうどの  
 ためとも八郎どのは我らがことにて  
 さうぞうろうそな、ふりうたち  
 おほのそたちはせいかわかとの  
 はゝのみ大(だ)を名のろうか云々

こゝでちよつと註を加へると、「ふりうたち」は風流たち即ち神踊の人数のことで、其中心に立つ巫女が斯ういふことを群の爲に説いたものらしく、「うき世く」は爰では意味が無いが、是が尋常でない事を語り出す前提の言葉だつたと思はれる。それから又別な段に入るに當つては、早乗りかはりやといふ句があつた。「のりかはり」は即ち同じ人の口を假りて、新たなる靈がものいふことである。

はや乗りかわりやく  
 數のみやう神あかすへて  
 かみしやうろうそれし大  
 しだいくに入れそうな

やはれ五りやうの生れおば  
 六でうほりかわうまれなり  
 つくし博多でそだつなり  
 十五と申すにえほし着て  
 左の折りのえぼしきて  
 宇佐へ参りはつそうし  
 つくし博多御むらい(侍?)  
 つくし博多と申しちに  
 火取るたまも持たれちか  
 水とる玉ももたれちか  
 二ほ(日本)のとおがしないちか  
 京のとおがしないちか  
 ゆくさのじやうまでかけ入れて云々

「五りやう」といふのは曾我物語にもあつて、其若大将の事だと解せられ、文中になほ數多く用ゐられて居る。もとより靈に依られた者の言葉だから、文學として説明し得ないのは



當然だが、如何にしてこの様な沖の島に住む女性が、是だけの詞を唱へ得たかは問題になり得る。文字の技能はまだ恵まれて居なくとも、なほ是だけの地理と歴史の知識は、いつとも知れず海を渡つて居たのである。それが無かつたならばこの傳説は成長しなかつたらう。信ずると否とは又別の力である。

## 一九

八丈島の神衆は、夙く國地の語りものゝ影響を受けて、しかもまだ十分に讀書家の解釋に追隨し得なかつたに反して、沖繩本島の爲朝傳説は、その成立の事情が大分又是とちがつて居る。第一に世間がこの言ひ傳への存在を知つたのは、八丈などよりはすつと古く、島津氏の討入よりも前、慶長三年に成つたといふ中山世鑑に、可なり詳しく記録してあるのが始めである。さうして此書の筆者は明かに保元物語をもう讀んで居る。伴信友以下の日本の學者がびつくりしたのは、爲朝が琉球に上陸したといふ宋の乾道元年が、ちやうど我邦の永萬元年、即ち白鷺の沖の方へ飛んで行くのを見て、海の彼方に島あることを察し、船を舩して大島を漕ぎ出でたといふ年に當ることだが、この一致こそ寧ろ保元物語に據つて居る證據で、少しも驚く必要などは無かつたのである。それよりもすつとをかしいのは、大島を今朝立つて次の日の午の刻に、着岸したといふ鬼が島改め葦島を、沖繩のことだと言はれて承知した人たちの心持で、飛行機でも無ければそんなことは到底出來ず、又之を八丈に屬せしめたといふ本文の記事とも合はぬのであつた。是は中山世鑑の著者の政治的



意圖で、日本で最も有力な武將の家々と、島の上代とを繋ぎ合せようとするれば、爲朝より他に可能性の多い人物は求められぬといふことを、知り抜くほどの學問があつたことを意味し、何か隠れた愛國の動機から、新たにさういふことを考へ出したものと、一應は認定せられても致し方が無いのである。しかしさういふことが果して出来るものかどうか、少なくとも或一人のすぐれた人の言つたことが、忽ち島の民の傳説となり得るものかどうかといふことが、我々の問題とならずには居らぬ。袋中大徳の琉球神道記は、慶長十年の序文を添へて刊行せられて居るが、此書の成つたのは或は世鑑よりも古くはないかと言はれて居て、その中にも鎮西八郎爲伴此國に來り、逆賊を感して今鬼神なまじんより飛礫をなす。其石長さ人の形ばかりで、今も波上權現の地に留まると出て居る。文之和尙の南浦文集、日下部景衡の定西法師傳などは、何れもこの時代を去ること遠からぬ頃の著述であつて、共にこの勇將の渡來を認めて居る。それ等を悉く世鑑の記事に學んだものゝ如く、斷定することは少しく無理で、つまりは民間にも之を信じ説く者が既に多く、たま／＼保元物語に據つてほゞ之を精確にしたのが、この島最初の史書であつたと見るのが、穩當なる解釋であらうも知れぬ。是とよく似た傳説の合理化ならば、今に至るまで國內ではくり返されて居る。書物に親しまない土地の住人は、もとは固有名詞は知らなかつた。知つて居ても忌名

として口にはしなかつたらうが、實際に致へられても居なかつたやうである。何でも力の強い貴とい御方がとか、特に弓箭の道にすぐれた若い大將が、あまたの臣下を引連れてとかいふやうに覺えて居り、島々では又それが對岸の大きな島から、突如として船を寄せたと説いたのも自然である。ぐつと年代を引下げ弘く史籍をあさるならば、陸続きの土地にはまだ數多くの偉人も物色し得られるが、島となると爲朝以外に心當りは無い。傳説を必ず歴史の片割れと見た以上は、そこへ持つて行くのは牽強附會とも言はれぬ。或は之を一つの發見とも思ひ、一方には又始めて名を教へてもらつて有難いと喜ぶ者も多く、それが新たなる普及となつたことは想像し得られるが、もと／＼何の種も臺木も無くて、是だけの構想に成功する筈はないと同時に、之を日本の源爲朝だと知りながら、黙つて其時から四百何十年、誰かゞ記憶して居たとするの自信の無さうな話だ。つまりは強ひて鎮西八郎だと解すれば解せられぬこともない言ひ傳へが、いつの頃よりか島には生れて居て、それを確定したり年代を合せたりするだけが、學問ある人の功業であつたらしいのである。今日の眼から見れば功業とも言ひにくいだが、とにかくに其時代の人は之を必要とし、又感謝して居たとまでは推察することが出来る。

おもしろ雙紙の第十四卷に、採録せられて居る次のやうな「おもしろ」が、至つて幽かながら



もこの間の消息を洩らして居る。どういふ折にであつたかはもうわからぬが、沖繩の祝女はこの神歌を誦して、神の祭に御仕へ申して居た。

ぜりかくののろの (勢理客の祝女)

あけしののろの 右對句

あまぐれおろちへ (急雨を降らしめて)

よるいぬらちへ (鎧を濡らして)

うむてんつけて (運天に船を寄せ)

こみなとつけて (小湊に船を寄せ)

かつおうだけさがる (嘉津宇嶽を下りに)

あまぐれおろちへ (急雨を降らしめて)

よるいぬらちへ (鎧を濡らして)

やまとのいくさ (大和の軍勢)

やしろのいくさ (右對句)

各句の續き方は明確でないが、「おもろ」は皆斯ういふ形で、聽く人の既に持つ記憶を喚び起さうとして居る。是が日本から攻寄せた軍船が、ちやうど此島の北岸に上陸しようとし

た時に、雨が降つて甲冑が皆濡れた。それは近くの村の祝女たちが、禱り招いた驟雨であつた、といふ意味であるらしいことは、大よそは我々にも想像が出来る。たゞ是を以て爲朝の運天港上陸を呪つた「おもろ」だと、伊波普猷君の釋かれたのは、やはり亦中山世鑑流と評するの他は無い。先づ一方の歴史化を承認した上でなければ、思ひ當るやうなふしは此中には見出せないからである。嘉津宇嶽の雲が雨になつて、船から上らうとする武人の鎧が濡れて行く光景は、美しくも又珍らしい繪様にはちがひないが、それだけに遙か後の世になつてからの、幻想であつたことが考へられるので、時を精密に算へることを知らなかつた昔の人たちの、折角稀々に持傳へた史實の記憶をさへ、傳説にしてしまふ原因は是に發して居る。悠久なる過去の間には、驚くべき色々の大事件が起り得た。もしくは時を隔て、確かに是々の事件が會て起つたと、萬人が共々に信じるといふことも有り得た。この二つは何れも大切な我々の歴史なのだが、それを末代に保存する方法が、どれも是も完全でなかつたのである。文筆の記録法の遅く始まり、國の隅々までは行渡らず、しかも散佚紛亂の危険の多かつたことは、今ではもう誰でも知つて居るが、一方の所謂口頭傳承に於ても、世の變り目毎にさまざまの難關を通らなければならなかつた。最初は恐らくあまりにも有名で、詳しく説くにも及ばぬといふ以上に、寧ろくだくだしい敘述を嫌つたの



であらうが、後には更に忘却を防ぐ爲に、その中の特に印象の深い部分のみを律語の形にして暗記するやうになつたかと思はれる(註)。是さへ聽けば忽ち事實の全部を、人は一樣に胸の中にゑかき出すことの出来るやうな、共同生活も久しく續いて居たのであらうが、一朝何等かの災厄が起つて、村が壊れ老幼は離散するやうなことがあれば、もうこの記憶の櫃と鍵とが別々の存在となつてしまつて、片方は早く消え薄れ、又は飛び散つてよその物に付き、他の片方は孤立して、何か又はにふさはしい解説を、見付けずには居られぬのである。のろの禱りによつて雨が降つた、海を渡つて來たつはものゝ鎧が濡れたといふだけの、古い譚ひものは記録でも無く、證據では尙更無いのだが、その根源に於て人の作爲に成つたものでないことを知る故に、破片になつて後まで、なほ牢乎として之を信ずることが出來たのである。今から振回つて見ればこそ、寧ろ最眞の引倒しで、不幸な補修であつたと評し得るものはあらうが、是が時代の學問の全力であり、又多くは共に信ぜんとする者の誠意ある所業であつた。稀には二つ以上の推定が許されるのに、特に其中の聽くに快い方に就いたといふ場合もあらう。しかし島々の生活では解釋が限られて居る故に、其選擇さへも望めなかつたのである。

島の古い歴史は埋もれて居る。曾て大海を横ぎつて許多の文物を運び入れた船と人とが、確かにあつたといふだけは争はれない痕跡を存して、住民も亦幽かに悠遠の昔を覚えて居る。必ずや一たび史書に名を勒した名士でなければならぬとなつて、もはや源氏の御曹司平家の公達より前には溯ることが出來ず、こゝを境にして向ふは鬼が島の世となつてしまふのみならず、僅かな不條理の發見によつて、折角久しく傳はつた貴重な口碑までが、捲添へを食つて亡びて行くのである。傳説は決して其様なものでないといふことを、先づ知らなければならぬのは島の人だと思ふ。もとは三十六島のうちであつた北隣の奄美大島にも、爲朝の渡つて來たといふ故跡がある。實久三次郎といふ加計呂麻隨一の英雄が、島の娘に生れた彼の遺子であるといひ、母と子の墓石が實久村に建つて居り、社の森を曹子山といふ。是から更に沖繩へ向ふ途中、喜界島にも沖永良部島にも、それ〴〵落胤の家といふものがあると傳へられるが、どの程度にまで主張せられて居るかを知らぬ。とにかく保元物語以外には文獻の證據は無く、物語では伊豆の島に還つて來て、五年の後には討死をすることになつて居るのだから、さう永らくの滞在は出來ない。それで或は十四から十八歳まで、九州に活躍して居た頃の出來事かといふ者もあるが、さうなると記録の根據は全く無いのである。たゞ伊豆大島からですら渡つて來た位だから、九州の方からならばもつと容易であつたやうに思はれるだけで、結局は却つて一方の不可能を、認めたことに歸



するのである。平家の貴公子が壇の浦の敗後、波路を漂泊して諸處の島に上陸したといふ想像は、人の數も多く期間も限りが無い故に、各地の口碑と妥協する餘裕は遙かに多いわけ、實際又十島の黒島硫黄島以南、遠くは與那國の島にまで八島墓は分布して居るが、それとてもやゝ漠然と、名は傳はらぬが誰か公達の一人がと、謂つて居る間だけは互ひに相呼應して、爰ばかりでさう傳へて居るのでは無いといふことが出來た。一朝「八島の記」とか「平家之落人喜界島到着の由來」とかいふ類の、具體的なる記録が成立してしまふと、三方四方牴觸をせずには居ない。一つを認めることは忽ち他のすべての島々の、命に懸けて守つて居るものを否認することになり、今はひたすらに對決を回避して、各自の誇りを擁護しなければならぬやうな、氣の毒な結果を見るのである。さういふ人たちを餘りに多く我々は知つて居る。だからたゞ總括的に、もう一度考へて見てもよい點だけを擧げて置くのだが、南島沿革史論などに出て居る例を見渡しても、島に上陸したといふ平家の大將は、資盛・有盛・行盛の三人にほゞきまつて居り、或は又之を盛の三神と呼んで居る處もある。喜界島の祝女たちの、二月八月の七日の祭を、平行盛卿の祭典だと思つて居たのは、次のやうな歌を唱へて居た爲であるらしい。

行の盛、ゆきのたけ

あを仁屋、上さすかき

めよこの明川

島が上、國が大城

盛よい三神よい

男瀬名の新造王殿

やわれしのくら

二俣大膳、友野光成

人主くぬき丸

あまの君、大美田

こは盛の三神

あらよすか王殿……

はつきりとした意味はもう唱へる人自身にもわかるまいが、是と似よつた歌は記憶なり記録なりに、まだ方々に残つて居る筈である。それを比べ合せたら元の意味は採れると思ふ。モリは南島の語でタケと同じく、神の靈地を意味し又神の御名でもあつた。一方には又身分ある人の實名を、呼び棄てにするといふことは有り得べからざることであり、靈として



祀らるゝ場合はなほ更である。人の名の中間に「の」を入れるといふことも亦想像し得られない。しかも近代の平家物語普及につれて、是がさうした歴史上の人物を聯想させたことは發見であり、又絶大の感動でもあつたらうが、實は源平の合戦などよりもすつと前から、島ではさういふ名の杜を拜んで居た信仰の、忠實なる繼續であつたかも知れぬのである。意味が判らぬからとて替へも忘れもしなかつただけは、文字の無い「のろくめ」たちの大きな手柄であつた。

(註) 土地に古くからあつた傳説はもと／＼成長した住民の全部が知つて居り、若い者のすぐに學び得るものであつた故に、その語り方はすべて簡明で、たゞ其要點の二三句を感動の深い言葉で述べただけで、復習の目的は達し得たに對して、新たに外から入つて來たかたりものは、始め終りを詳しく敘述するのが普通であつたらう。この新舊の著しき差があつた爲に、古いものは愈々忘れられやすく、新しいものは愈々文藝化しやすかつたものと私などは考へて居る。

島の歌謡が外部の影響を受けることが尠なく、新たに附け添へられる材料が限られて居た爲に、自然に古い姿を保存し得たかと思はれる點が、自分の特に考察を此方面に片よらせた動機であつた。目に見えぬ交通は絶無でなかつたらうが、少なくとも其中の一つ、海によつて隔離せられて居たものは女の旅行であつて、是が又歌やかたりものゝ成育と、濃い因縁を結んで居たのである。家々の母や妻娘が土に繋がれて、異郷を知る者はたゞ僅かの例外であつたことは、本州もその隣の島も一樣なのだ、茲には我々の歴史が示して居る如く、昔を語り信仰を勧めつゝ、旅をして歩く若干の女性が居て、それが數々の新らしいものを運んでくれた。之に反して荒海の向ふに起伏する小さな島々だけでは、彼等の往來は殆ど望み難かつたと見えて、此方面には共通のものが至つて少ない。従つて又斯んな別れ／＼の状態の下に、もしも何等かの兩方の一致が見出されるとすれば、それは大きな文化史上の事實だといふことにもなるのである。

さういふ中でも八丈島の方は、沖繩に比べるとまだ幾分か近より易かつた。島の女が



地に渡つて来て、再び島に戻つたといふ様な話は少なかつたが、江戸期の初頭には京都の上臈が、罪あつてこゝに配謫せられて居た例もあり、其後も引續いて遊女の島に流された者が、數多く流人帳の中には見えて居る。どうして遊女を斯んな島まで流すことにしたかの理由は知り難いが、是も或は船の旅を、何とも思はぬ彼等であつた故に、思ひ切つて遠くへ放したのかも知れぬ。少なくとも前にもさういふ例があつた爲かと察せられる。島の女たちの歌の曲の中に、僅かばかりの外部文藝の浸潤があつたとしても不思議は無く、それが琉球の群島の方では、全然と言つてもよい程に想像し得られぬことであつた。素より程度の差ではあるが、其結果は二つの島の、爲朝傳説の上にも現はれて居るやうに私には感じられる。再び保元物語を説明の具に供するが、此種の文藝の起りを考へた人ならば、誰でも認めずには居られぬやうに、是には空で覚え口で語り又は舞ふ者と、文字に書いたものを目で讀む者と、二通りの利用者が最初から有つて、多分は前者の方が數多く、又は主たる者であつたのである。平家物語は盲人の爲に書いて與へたと言はれて居て、是がよくわかるが、遊行の女婦とても實際は文盲であつたらう。職人盡しの類には繪があるが、見臺を前にする居る者などは無い。女義太夫なども體裁に本は置くだけで、讀まねば語れぬといふ程に未熟な者は商賣はして居ない。このそらよみ(暗誦)といふ第一種の利用法

が、沖繩の島には未だ渡らず、八丈の島には片端は渡つて居たらしい形跡がある。同じ一つの爲朝傳説の歴史化が、一方は民間平俗の雜説に起り、他の一方のみは堂々たる一流政治家の筆を煩はして、漸く固定した理由も茲に在るかと思はれる。

この語りものゝ運搬といふことは、近世は一般に男子の職業となり、且つ其様式もずつと複雑になつて、傳説との縁は絶えかゝつて居る。二つの島群のやゝ古風な例を比べて見ないと、心づかずに過ぎる虞も無しとせぬが、實は是には可なり有力な暗示が含まれて居るのである。我々の今まで解き悩んだ難問題は、傳説はもとこれ／＼の事件が、昔この土地に起つたことがあるといふ確信であつて、其點からいへば一種の歴史であり、それが歴史化しようとするのは少なくともその自然の性質である。然るに其結果は個々の土地の人の期待に背いて、比較を進めると兩立は愈々困難となり、歴史の知識の正確になると共に、追々に影が薄くなつて行くものばかり多いのは何故であらうか。もつと具體的に言へば、たゞ一回しか有り得べからざる過去の事實が、そこでも爰でも出現したやうに傳へられ、末は互ひに贖物呼はりをしなければならぬ状態に、陥つてしまつたのはどうしたわけだらうか。是は差迫つた史學の一課題であつて、しかも誰かゞ作り事をしたとか、そつと他處から持つて來たとかいふ類の、面と向つては言へない様な答を、持つて居る人ばかりが多



いのである。もつと明瞭な説明が私には出来るやうに思ふ。是は今日の所謂歴史化が試みられるよりも前に、既に傳説の文藝化とも名づくべきものが始まつて居たのである。さうして本來は神の啓示を仲介する役であつた人たちの旅行が、急激にこの變化を促したのである。同じ傾向はよその國にもあつたかも知れぬが、日本では是が大きな特色であつた。だから傳説ばかりは外國の學者の言ふことを、受賣してはだめなのである。

是も離れ島の實例を以て説明して見たい。伊豆の三宅島には三宅記といふ名で、土地の神々の御來歴を述べた古い記録が傳はつて居て、是は此方面の學者に非常に重んぜられて居るが、別にその以外に今一つ、此島の大明神の縁起といふものを見たことがある。現在も島の人々が記憶して居るかどうかを確かめて見たいと思つて居るが、この方は明かに流布の物語であつた。伊豫國の長者橋の清正、最愛の一人子を鷲にさらはれて、物狂ひのやうになつて諸國を尋ねまはり、終にこの島に来て親子の再會をする。後に神と現じて爰に祀られるといふ筋の、荒唐無稽を極めたものであつたが、物語が旅をしてあるく證據として、自分には大きな興味がある。人も知る如く此話は靈異記にも今昔物語にも見え、又水鏡にも古い代の史實として傳へたのみならず、奈良の東大寺の良辨僧正の生ひ立ちの記として、物に誌されたのも近頃が始めては無い。つまりは最も人望の多い民間文藝の趣向の

一つだつたのである。三宅島にあつた形と特に近いものは、「みしま」といふ題で奈良繪平に板行せられて居る。記述が至つて詳しいだけで人の名までが相同じく、たゞ結末が伊豫の大三島の御本地となり、翁嫗二人の親が立身した我子に廻り逢ふ以前に、辛苦艱難をした思ひ出として、拜殿には柱を立てず、神供の米には摺臼を用ゐない。又鷲が兒を引掛けに行つた樹である故に、枇杷の木を大事にせよといふ類の、注意すべき二三の由緒談を語り添へた點だけがちがつて居る。伊豆と伊豫との文化關係を説かうとする人には、是は一つの好い資料と思ふが、それはとにかくに此話が、一旦伊豫の三島を通つて、伊豆の島に來たことのみは争はれない(註)。しかも斯うした御伽ものゝ形を取る以前、話はもう散々諸國をあるきまはつて居たのである。良辨僧正の言ひ傳へは、奈良の本元の杉の老樹をはじめに、山城の南の方にも相州の大山々麓の村にも、鷲に攫まれた現場といふ處があり、地誌には之を載せ住民は信じて居る他に、加賀の江沼郡にも其話がある。單に或一人の名僧がといふだけならば、西は九州の島原半島に一つ、中部では駿河の話として甲州の側に一つ、北は岩手縣にも亦一つあつて、共にそれ〴〵の昔話集に採録せられて居る。搜したらまだ〴〵出て來ることだらうが、何れにしてもそれは各一回の應用に過ぎず、元の形は又別のものであつたことは、二つの中世の記録からでも察せられる上に、現に千葉縣の東



海岸などには、母が悲しみの餘りに郭公といふ鳥になつた昔話ともなつて居るのである。話の要點は奇抜なる災厄、之に直面した者の極度の感動、もしくは九死に一生を得た奇蹟といふやうな點に在つて、赤子の榮達などは第二次の空想であつたことが想像し得られる。最初或一人の實際の遭遇に基づくか、はた又夢幻の所得であつたかは究め難いとしても、どうしてこのたつた一度有つても不思議といふ事件が、斯くまで弘く久しく傳はり且つ移つたかといふことは問題にしなければならぬ。是を旅する女性の運搬だといふことは、勿論斷定のしにくいことだが、さう思つてもよい幾つかの手掛りのやうなものは有るのである。奥州の遠野地方では、鶯に兒を取られた母の名といふのが、長須田の「まんこ」として知られて居る。聽耳草紙の採録する所によれば、この土地には今でもまんこ屋敷といふ家の跡が山中に在つて、川戸の石積みも坪庭の區劃も残つて居り、又その尾根續きを地獄山と謂つて、塚と古木の松とがある。まんこは鶯に子をさらはれた丁度十三年目の其日に、爰に来て我子に再會したと語り傳へられるが、しかもその地獄山といふ地は爰だけで無く、此邊一帶にはそちこちにあつて、中部地方でよくいふ「さへの川原」に該當する。愛兒を失つた悲みの母が詣る處であり、又松の木に耳を當てると地獄で子供の泣く聲が聽えるとも謂つて居た。さういふ事から考へると、「まんこ」はもと或は童子の靈の口を寄せた巫女の名であつたのかも知れぬ。姥が井・姥が池の傳説といふのは、主人の子を誤つて水に墮し、自分も悲しんで身を投げたといふ話になつて居るのだが、其女の名にもおまんといふ名が多い。信州の南山で疫病神を送るのに、藁で男女の人形を作り、こゝでは是を關のおまんと呼んで居た。昔關城が落ちた時に、城主の奥方が若君を連れて、遁げて行かうとして途で殺された。その怨靈を慰める爲と説明せられて居る。即ち何れも皆小兒を中心とした哀話の、ワキの役をする女性の名が「まん」なので、偶然の一致ではあるまいと思ふ。以前尋常の女が名を呼ばれる場合は少なく、其名の限られて居て且つそれ〴〵に意味があつたことも考へて見なければならぬ。會我の十郎五郎の母の名がまんこうであつたことも、江戸人はよく知つて居たが、それはまだ會我物語の中にも出て居ないことなのである。そのまんこうが四國の果までも旅をして傳説を残して居るので、多分はその古曲を語る女の名であつたと私などは想像して居るのである。諸國の靈山の開基といふ異人に、滿行まんこうといふ名が傳へられて居る例の多いのも、事によると同じ原因かも知れぬ。ウバとかアツパとかウマアイとかの如く、最初はたゞ目上の婦人を呼ぶ敬稱であつたのが、次第に語音を固定してこの階級の婦人だけを、包括する通稱となつたものとも見られる。是は將來集まつて來る資料が、自然に裁決してくれると思ふから必ずしも強く主張はせぬが、たゞ少なくとも



七八百年の間、鷲に子をさらはれたといふ昔語りが、たゞ僅かづゝ形をかへたゞだけで、弘く國內を週遊して居たことゝ、それが時あつて海を渡り、伊豆の三宅くらゐな島までは分布して居たのは、たとへ今日ではまだ理由を説明し得る者が無くとも、何か隠れたる力の系統立つたものが、あつたからだといふことは認めずばなるまい。私の考へて見ようとして居るのは此點である。

(註) 「みしま」は室町時代物語集第一の巻に出て居る。是も獨立した新作品では無く、安居院の神道集にも既に三島大明神の本地として、内容のほゞ同じいものが出て居る。この二つの文獻の注意すべき差異は、古くて且つ詳しい神道集の方の記事に、却つて此神が伊豆國へ御移りなされたことを説き、鷲も武藏の大田庄に神として祀られて居るといふことを述べて居る。即ち此傳説は少なくとも旅行をして居るのである。

## 一一一

國の端々に今でも残つて居る生活の中から、以前の世の姿を探るといふことは、一年増しにむつかしくなつて來るが、それも我々の注意次第、又方法も色々あつて、必ずしも絶對に不可能なことではない。たとへば「あるきみこ」といふ言葉は近頃まであつて、巫女がよく旅行する者であることは誰でも知つて居た。或は又「雇はれみこ」といふ者が、毎年定まつて祭禮の日に、よそから遣つて來る地方もそこちにある。名だゝる御社には何代と無く、世襲して居る男女の神職の家があつて、それが既に衰へたり轉業したりして居るのに、一方にはすつと昔から、村人ばかりで神様に御仕へ申し、たゞ大祭の日だけに専門の業者を聘するといふ慣例を續け、又はそれをさへ丸々頼まぬ御社もあつて、この方が數に於ては遙かに多いのである。斯ういふ幾つもの段階が、最初から並び存して居たらうと見る者は無いのみならず、どれが早くどれが後に改まつたかの順序に至つても、比べて見れば迷ふほどの問題ではない。たゞ今まではさうは思つて居ない家があつたのと、一般には無關心な人が多かつた爲に、書かれぬ歴史が埋もれて居ただけである。歩行巫あひりみこの方も警察



の取締が厳しくなり、又質の悪いのばかり残つて、此頃は零落の底に沈んで居るが、是は老人の記憶がまだ鮮明である。大體に移動の區域の廣さによつて、可なり際だつて二種に分れて居た。單に一社に專屬して居ないといふのみで、何村の某女といふことが判つて居て呼びに行く者と、物腰言葉に訛りがあつて、遠くから來たことがよく察せられ、しかも國處を名のらぬ者とがあり、それも少しづつは大都の附近などに定住しようとして居る。彼等の郷里といふものが元は全國に互つて數多く、記録以外にも其痕跡は指ざし得られるが、あまり長くなるから其話は別にする。其中で一つだけ、最も弘く知られて居るものは信濃巫しなのみこ、この名を最近まで使つて居たのは、却つて信州から遠い京阪地方である。縣巫あがたみこもしくは「あがたさん」と謂ふのも、名の起りは同處と私などは心得て居る。諏訪の御社では、其信徒の住む區域をもとの神領と稱して、近世まで是を縣あがたと呼び、その縣の一つは郡の名になつても居る。さうして信濃巫の故郷はその小縣郡ちひさかたの禰津ねづといふ村のうちだつたのである。そこには旅をして居た女たちの家はまだあつて、其職だけはもう残らず罷めて居る。是では生計が立たぬといふのが一つの理由、第二には他にも似合ひの仕事が幾らも出來たからで、是は恐らく他の地方も、又昔の世にも共通な理由だつたらうと思ふ。但し以前の轉業の道は、よほど又今とは變つて居た。概括していふと同業の數が多くな

つて、少しづつ、新しき手を出さぬと競争に堪へぬので、段々と似寄りの仕事の範圍を擴げて行つたやうである。その一例として偶然に文獻のやゝ傳はつて居るのは歌比丘尼うたびくに、是などは先づ名をかへたので別のものゝやうになつて居るが、最初は熊野から出て神々の本縁を説いて居たものが、次第に後生の道を繪解きして姥後家女房を泣かせ、いつと無く佛法を利用するやうになつたといふが、それでも村に還れば家庭もあり、夫は山伏だつたといふ説もあつて、ともかくも比丘尼ではなかつた。それが街道の辻に立つて歌をうたひ、後は大都の中にまぎれ込んで、はかない商賣をした末輩もあつたといふことは、隨筆文學が面白づくに喋々して居る。起原は決してそんな事を、目途にして居なかつただけは證明し得られる。一つには勿論供給過多の爲だらうが、旅が餘りに長くて本社との縁が薄れると、先づ信仰の共同といふことがこはれて、個人々々の感情を相手にする結果を見るのは已むを得ない。諏訪の縣の縣巫なども、曾ては主神の根原と奇瑞とを、宣傳するのが役であつたことは、諸國の靈山から出た女たちも同じだつたやうで、その語り物もまだそつくりと残つて居るのだが、近世はもう之を語つて旅をする者も無くなつた。主たる收入の種は死靈の口寄せで、新たに近親を喪うた者が、哀慕の餘りに今一度逢つて話をして見たいといふ願ひから、依頼するやうな場合ばかりが多くなつて居る。市子又は市女いちぢよといふ言葉も、以



前は神社の祭に仕へる婦人の名であつたものが、後にはこの口寄せを専業とする旅の女に限るやうになつた。梓巫あづまひとか「大弓もり子」とかいふ一種の者は、弓の形をした物を手に持つのが特徴で、是だけは最初から祭と縁が無かつた様にも想像せられて居るが、なほ其詞を聴くと先づさまざまの神の名を唱へ、且つ生口いやくちか死口か、もしくは如何なる神靈を降さうとするかを尋ねる。時としては聴く人の方にも心當りは無く、單に一身の憂ひがあり不安がある故に、何が彼女に託して物を言ふかを、たゞ漠然と試みようとした者も多いのである。一處に定住し又は一つの堂宮の靈驗を宣傳する者とはちがつて、態度も自由であり従つて又長處も或部分に偏し易かつたが、なほ其方式だけには幾つもの共通があつて、たとへば口寄せがまだ半醒半睡の間に、自己と聽衆とに暗示を與へる爲に唱へる詞などは、形もほゞ定まつて居り、又技藝としての傳習があつた。この序曲ともいふべき文句の、特によく發達したものが日本では語りものとなり、重きを後段の靈の言葉傳へる點に置いて、前者の單調に陥るのを省みなかつたものが、所謂「いちこ」の口寄せとなつたものか自分たちは想像して居る。都市とその周邊の地に於ては、近世はこの二つが全く分立して居る故に、或は餘りに大膽なる臆測と評せられるかも知れぬが、東北のイタコなどではまだ兩者接近の例が見られるのみならず、我邦には幸ひに本地ほんちものと稱する珍らしい形の

文藝が多く傳はつて居て、この分裂の順序を跡づけさせてくれる。前に引用した伊豫の「みしま」、又は信州の甲賀三郎などにも是が見られるが、神はその御由來を説くことを悦びたまひ、それを聴いて感動する者の祈願を納受せられるといふ考へが、自他の間に普及して居たのである。それが佛法の經文の影響であつたか、はた又獨立偶合のものかはまだきめられないが、とにかく以前の示現が突發であり、託宣が臨時であり、託女が豫め定まつて居なかつた時代には、斯ういふ章句は固定する機會がなかつた筈である。たとへ過去の奇蹟によつて萬人が印象づけられ、祭のたび毎に其記憶を新たにしたとて、之を詞章に綴つて聲高々と唱へるだけの、用意は何人にも無かつたらうと思ふ。如何なる無事平和の年にも必ず神語を宣べ、しかもそれに參與すべき職掌が備はるに及んで、自然に禮讚の辭は具體化して、かたりごととなり且つ舞とならざるを得なかつたのである。猿女さるめ君氏の累代の女性が、移つて次々の都の御式に御仕へ申して居た由緒も是かと思はれる。諸國の微々たる門黨の内の神にまで、是が行渡るには年處を要したのである。他郷で練修をした女の宗教家が、田舎の隅々を経廻るやうになつた頃には、もう色々の外部の影響が、之をやゝ別様に彩色せずには居なかつたのである。

一言を以て説くならば、傳説の異常なる統一といふことが、この結果として現れたので



ある。萬を數へる全國大小の靈場に、隈なく分布して居る傳説ではあるが、よく見ると其種類は意外に限られて居る。獨り方向の一致だけならば、是は固有信仰の争はれぬ姿とも言ひ得るが、問題にしてよいのは文藝なら趣向に該當するもの、即ち或珍らしい出來事の組合せ、それも原因と結果だけで無く、細かな變化と其順序までに、それは私の方の代言はなければならぬものが、海山を隔て、何箇處にも並び存するのである。どこかに元起つた場所があるにしても、他のすべては運ばれたに相違ないのである。單に旅から持つて來たといふだけなら、昔話にはなつても傳説として信ぜられて居るわけが無い。乃ちその旅人が人を信ぜしめる力ある者であつた證據かと思ふ。「和泉式部の足袋」といふ話が、北九州にもあれば三河にもあり、藥師如來と歌問答をして、瘡の病を治したといふ奇瑞が東西の十數箇處にある。是は鳳來寺の峯の藥師の山下に、一群の歌比丘尼が據つて居た名殘であらうといふことは『桃太郎の誕生』といふ本で既に述べた。それよりもつと早くから著名であつたのは、阿曾沼の鴛鴦が夢に來て歌を詠んだ話である。是は勇猛の武夫を菩提の道に誘うたといふので、もう神社の本據とは離れて居るが、たゞの話としても相應に美しく、妹背の戀の悲みは何人にも理解せられるものであつた故に、如何なる山里へ持つて來ても所謂受けたのである。さうして是をたゞ假設の物語とはせず、此沼此御堂の昔に

會て有つたこと、信じて傳へさせたのは語り方の技術であつた。歌が必ず之に伴ひ、それが又必ず

日暮るればさそひしものを○沼の

まこも隠れの一人寝ぞうき

であつたのも、根源の一つであつたことを思はしめるのみならず、同時に此物語の結構せられた時代をさへ推量せしめる。水利土木の難事業を完成する爲に、水の神に犠牲を奉るといふことになつて、偶然に最初その案を提言した者が、選ばれて人柱として水底に沈められたといふなども一奇譚である。單にむかし津の國の長柄ながらの橋に於てとか、もしくは入道淨海が兵庫の築島つしまを作つた時とか、いふ風に語つても聽く人は感動したであらうに、今日傳はつて居るものは大半はその各々の土地での出來事であつた。袴に横糞よこふぎのあるものとか、襟に黄金の縫ひこめてあるのを氣付かずに、水に投げ入れたので我衣だけが沈み、それで人柱に立つことにきまつたとか、小さな趣向は區々になつて居るが、それとでもたつた一つしか例の無いといふものは無い。其中でも數の多いのは母と子と二人の旅人が、其場へ來合せて人柱を勧め、そんなら誰彼と詮議をしても決し難い。いつそお前さんたちを頼まうといふことになつて、即座に二人を水に沈めたと傳ふる女堤おんなつみといふ類の傳説で



も、東日本には其時背の子が食べかけて居たからと謂つて、今に片割れしどめだの片側の梅だの、實のると評判せられる植物があり、九州には又豊後の山國川のやうにお鶴と小市との母と子の靈を、水のほとりに祀つた祠さへあつて、是が上代の水の神の信仰と、幽かな縁を引いて居ることが窺はれる。單に或一人の自在なる空想から、發明せられた文藝では無くて、しかも之を潤色し敷衍して、新らしい印象を與へようとして居たことは、是も數あまたの後代の小説に、借り用ゐられて居る雉子の歌、雉子も鳴かずば打たれざらましといふ下手な文句を、その人柱に立つた人の娘が、歌に詠じたといふなどがよい例である。一種才慧しくして書物は多く讀まぬ女性が、この改作には參加して居たことゝ、それがちやうど又或時代の地方の聽衆に、偉大な効果を與へて居たことだけは、認めないわけには行くまいと思ふ。

(註) イタクは東北の數縣のみに居る盲目の口寄せ巫で、兼て占ひや神祭をする。オシラナマといふ木の人形を舞はしてかたる物語があることは、遠からず別に述べて見ようと思つて居る。中世イタカと稱して居た一種の漂泊民と關係があるかとも思はれるが、アイヌ語にも「かたる」を意味するイタクといふ動詞がある。人類學雜誌第二九卷六號以下參照。

## 一一一

更に適切なる一つの例としては、白米城の傳説といふのがある。是も今一度精しく述べて見たい計畫をもつて居るので、こゝにはたゞ荒筋だけを述べると、或山の上の城砦が水攻めにあふ。城中では水の乏しいことを隠す爲に、馬を崖の端に牽き出して白米を以て脚を洗ふ眞似をして見せた。遠くから之を望んだ寄せ手は欺かれて、水攻めは無益と一旦引揚げて還らうとしたが、たま／＼鳥類犬などの舉動によつて謀計が暴露し、又は老女が告げ口をした爲に實際が判つて、終に落城して滅びたといふ類の話である。伊勢の松阪に近い阿阪といふ城跡が、參宮街道から見える爲に夙く有名になり、二三他の地に在るものは移植であらうと言はれて居た。そんな筈が無いと思つて氣を付けて居るうちに、自分が集積した資料は全國の二十數府縣に互り、其數も今や七十に近くなつた。土地では悉く之を歴史上の事實と信じて居るので、交通の十分で無かつた時代に、城の大將のみがどうかして此策略を知り、しかも之を試みて皆失敗したものと見る人もあるのである。それには地形が第一にこの推測を支持した。確かに一度は城であつて、水には成程困つたらうと思ふ



場所である上に、稀には山の中から焼米が出て來たり、又は米の化石とも見られる様な白砂の敷き滿ちて居る處もある。それよりも大きな力は先祖以來、少數にもせよさう信じて傳へて居るのに、それを作り事だといふことは氣の弱い者には出來ない。是をどう説明すれば歴史になるのかといふことは、傳説を研究する者のよい課題であつた。私の意見は無論假定である。もつと適切な答の出るのを待つだけであるが、以前亂後の荒涼たる田舎に於て、人が寂莫と不安とに堪へず、しばしば奇恠と現實の苦難とに襲はれて、其理由を知るに惱んで居た場合、隠れた物を視る力があるといふ旅人が、訪れて來たとしたらどうであらう。さうして此人が既に多年の修行を積んで、之に應ずる様な若干の語りの様式を貯へ持つて居たとしたら、或は斯ういふ結果にはなりはしなかつたか。傳説の文藝化は勿論雙方平等には起らないのみならず、同じ一人の昔を語る旅の女にも、眞實と作爲との區別は、必ずしもさう明瞭では無かつたのである。第一には語りごとは多くは覺えたもので、各自の考案が通例は加はつて居ない。第二には是は自分にも有り得べしと思ふ説明であつて、人が語つたならば信じたかも知れぬものであり、更に第三には自己も亦恍惚の境に居て説くのである。最初一つの虚誕を作り設けて、それを到る處に播いて歩くのとは、よほど又事情がちがつて居る。勿論時代と共に技巧は進み、猾智は加はつて來たといふことは

出来る。死人の口寄せをする「みこさん」などの言葉を聽いて居ても、師匠の傳授といふものゝ有力であつたことがわかる。最初にはたゞ生口か死口かを尋ね、次にはたゞ死んだ日などを知るだけで、男か女かをさへ問はぬのを通例とする。それで序品には漠然と、死出の山三途の川の一人旅の心細さやあぢきなさを説いて居るうちに、次第にすゝり泣きや一人言が始まつて來るのである。それに注意して居れば喚ばれる死靈は親か子か、又はどの人の連合ひであつたか判つて來る。是までは醒めた時の仕事だが、愈々若い娘だ老いたる祖父だときまると、それから言ふことは段々と效果を生じ、膝を乗出してかきくどく者さへ現れるので、後には自分も亦暗示を受けて、終に夢中になつて死者の爲に語ることが出來れば、よく當つたなど言つて聽く人も感激するのである。それを信じない者は一人も有り得ない。さうして近世は専ら肉親の靈を問ふことになつたが、以前は誰とも知らぬ人も、招いて語らしめることがあつたので、白米城の場合には多分城主の靈が之を告げたのであらう。其言を信ずると否とは、靈の存在を認めるか否かに歸着する。たま／＼其説話に類型があるといふことは、之を傳へる職業に系統のあつたことを意味するだけで、騙しに來たのでないことは昔も今も同じだと思ふ。

傳説が個々の社會の閱歷に伴なうて、それ／＼特異の成長ぶりを示すといふことは、我



我に取つて興味の深い教訓である。個々の邑里の神祭りの方式が、もしも全然大昔のままを守つて居たか、さうで無いまでも是に奉仕した男女の智能と心理が、もしも總國一樣に進展して居たならば、我々の傳説は夙に散漫のものとなり、たゞ保存せられてある場合にも表現の力が弱く、多くは識者の省みる所とならなかつたらう。無理な歴史化は可なり後世の迷惑ではあるが、幸ひにしてまだ復原の不可能な程度にまでは變化して居らぬのみか、それを或段階に喰ひ止めて、崩壊を防いでくれた手柄さへあるのである。しかも他の一方の文藝の技術も、ちやうど斯ういふ一種の保存工作の許される位に、始めはごく徐徐として進んで居たらしいのである。是がもし語り物の花やかさを愛づる餘りに、近松門左衛門はさて置き、假に金平本時代の脚色ほどにも飛躍して居たならば、如何な愛郷史家でも是を地方の埋もれたる史實として、取上げる氣にはならなかつた筈で、言はゞうそでも好いから樂しませてくれといふ、讀者層の出現は遅かつたのである。思ふに年々の神を祭る日に、今まで衆人が心の裡に想ひ起して居たことを、巧みに清々しく美しい言葉で、敘べ立てる風習が先づ行はれ、それが神人を共に悅樂せしめるものと認められて、技術として練習せられた期間が久しく續いたのである。技術である以上は優劣はたやすく聞き分けられる。殊にその一部の争はれぬ長處を具へた人々が、之によつて繁榮を得、次には數

が剩つて追々に外に出たので、必ずしも流民の糊口のみならずを之に求めたのでは無く、寧ろ招かれて輔導の任に就いた者の多いことは、是も國々の社家神職の、大よそ一致した言ひ傳へが推測せしめる。たゞ斯ういふ人たちの土着には、幾百年に亙つた年代の差があるのみならず、現に近い頃まで一社には專屬せず、旅行を生涯とした者も一方には澤山あつて、それだけが少しづつ墮落を始めて居たのである。根源は一つであつたといふことは、さう證明のむつかしいことでは無い。村のまじめな故老だけは語り繼いで、旅の語部どもが全く知らなかつたといふ話などは少ない。但し藝を主にした方の語りごとは誇張せられ又大に修飾せられ、且つ必ずしも信じられることを期して居ない。即ち今日はもう文藝化してしまつて居るのである。

たとへば長者の満ちかゞやいた榮華の生活を、あらゆる彩色を盡して描き出したものが、十二段の草子の笛の段であり、もしくは美濃の青墓の遊女が源氏の御曹司に、語つて聽かせたといふ山路童の物語である。是が矢矧と豊後内山との故郷に於て、遺跡を指し示して信用を強ひられる傳説となつて居るのは、或は文藝の威力とも見る人があらうかも知れぬが、それとは又別の長者の屋敷跡、昔巨萬の富を積んで、一門繁榮したといふだけの傳説ならば、府縣毎に百を以て算へるほども有る。蘆と芒の原だつたといふ新たなる大都府に



も、古くは竹芝の長者があり、後には白銀の長者だの柏木の長者などが輩出して、どこでも聴くやうな長者が池、朝日夕日といふ類の逸話を留めて、やがて又過ぎ去つて居る。實際あつたのだと思ふ方が、私たちにも楽しみなのであるが、何分にも話は皆有りふれて居る。一ばん多く聴くのは糠塚すくも塚、毎日食用の糲を精げた殻が、積つて小山となつたと稱して其名の岡があることで、是などは既に和銅の風土記の中にも見えて居る。或は二人の長者が財寶を競べる話、まさされる寶子にしかめやもと、一子の無いことを歎いて居るうちに、神佛の恩寵によつて玉の如き男子、花にも見まがふまな娘を儲け、それが又やがて次の葛藤を導くといふ類の、大よそ七つか八つの事件だけが、この莫大な数の長者に就いて記憶せられて居る。さういふ萬福長者も今は皆夢で、目前の證據としては何の値も無いのだが、それが果報盡きて滅び失せたのも、やはり命數であり前世の約束であり、又は目に見えぬ御力又はおぼし召しだつたといふ風に今でも皆解して居る。是から推して考へると、何でも無い只の人が一朝に長者となつたのも、すべて一樣にこの貴といふ法則に、準據してさうなつたものと見て居たのであらう。最初はそれがたゞ村々の舊家の、初代夫婦の者の事蹟であつたことも想像せられるのだが、次から次へと修飾せられ誇張せられて、終には日本にたつた一人有つても不思議と思ふほどの、大袈裟な話と化したのは發達であ

る。即ちこの語りごとに参加した者の、少しづつ積み重ね養ひ育て、來た、技藝と見るの他は無いのである。私たちは是を物語の自由區域と名づけて居る。素より本筋の眞實をそこなはうといふ意圖は無く、出来る限り當面の聽衆の耳を怡ばしめ、夢を楽しく花やかなるものにして、祭の日の印象を鮮麗にした者が、歓迎せられたことを意味するに過ぎなかつたのである。しかも世を経るまゝに其楽しみのみが後に残り、終に信仰とは引離され、時も處も構はぬ有力者の慰みとなつて、自在に天下を浮遊する文藝といふものゝ素地を爲したことも亦争はれない。長者の傳説といふものが此通り數多く、且つ是ほどの統一と成長の各段階とを、目前の例を以て示して居る國でない、文學の起原に關する一つの説、即ち文學はもと宗教の養ひ子ではなかつたかといふ説の、當否を吟味することも實はむづかしい。その條件の具はつた日本に於て、今まで傳説の研究を怠つて居たといふことは、惜しいといふ以上に義理の悪い話であつた。いよくそれが實地の問題となつて、もう何か解決をしなければならぬ時世が來たことは、御他力ながらも寧ろ有難い機縁といふべきである。



例は何程も有るのだが、それを並べて居ると長くなる。其中でもう二つだけ、新たに加はつたものごとく古くからあつたかと思はれるものとを對照させて、傳説の成長せずには止まなかつた、中世の社會事情を考へる足掛りとして置きたいと思ふ。陸前七北田なきたの洞雲寺の縁起として傳へられるのは、昔開基の名僧がやつて来て、此山に年久しく住む男女の異人から、伽藍の地を乞受ける際に、錫杖を地に立て、其影の及ぶだけと約束し、一旦之を諾すると其杖の影忽ち全山の端々に達したので、異人は居る所が無くなつて已むを得ず明け渡して立退いたといふことになつて居る。是が我邦ばかりに限られた奇蹟で無かつたことは、後に博識の人たちの考證によつて明かになつたのである(續南方隨筆二二二頁)。其中でも印度の話として阿育王傳に載つて居るのは、尊者が大龍と約して一身を坐するだけの地を乞ひ、やがて其身を大にして國中に満ちて趺坐したと謂ひ、慈覺大師の入唐記に五臺山の古傳として録したのは、文殊菩薩が僧形を現じて一座具の地を皇帝から請ひ受け、その敷物の大さが見る／＼五百里を覆うたといふので、共に佛法興隆の瑞相に他ならぬに

反して、一方歐羅巴人の東洋進出の手段に供せられたといふものは、話は同系であつてしかも純然たる謠詐であつた。たとへば和蘭が臺灣の土人を欺き、又は佛郎機が呂宋の國王をすかして地を乞うたのは、何れも牛の皮一枚で圍へるだけの地面をと約束して、其皮を細く裂いて紐にして繩張りをしたといふことが、それ／＼に臺灣府志と明史とに出て居るさうだが、是は夙く西洋に於ても、昔カルタゴ國を創立した王女ヂドの謀計として知られて居た(以上)。どれを最初といふことまでは極められぬが、兎に角に世界を周歴して、日本に遅く入つたことまでは考へてよろしい。斯ういふ大きな旅行をして來た傳説もあるので、種が古び感銘が薄れたものは取棄てられ、代りにこの様な意外なものを、輸入することも後には試みられたのである。さうすると何處かに選擇の中心が、あつたといふことが想像せられると共に、更に他の一方には地主神の思想、即ち今まで占據して居た者の約諾を得なければ、如何なる好事業も創始し難いといふ考へ方が、元から我邦にもあつた爲に、此繼合せが可能であり、又は必要でさへあつたことがわかるので、是は佛教には高野の丹生にぶ明神を始め、數多くの類例を存するのみならず、別に常陸風土記の夜刀神のやうな、もう一つ古い形も残つて居る。是がもし異なる信仰の併存状態、新舊移住民の接觸面に於て、曾て體驗せられた心理現象の痕跡であつたとすれば、この根本の共通こそは寧ろ傳説以上



の興味である。

世の多くの文化傳播論者なる者は、二つの種族が交通すれば、すぐにも甲の長處が乙に入つて行くやうに、單純にきめてしまつて居るが、少なくとも信仰の部面に於ては、さういふ獨斷はまだ決して成立つて居ない。數限りも無い外國の知識、もしくは御手本ともいふべきものに圍繞せられ、殆ど自ら省みる隙間も無かつたと思はれる時代が、是ほど久しく續いて居た國であつたけれども、我々の言ひ傳へはなほ常に独自の成長の途を歩んで居た。愈々本來の心持が其まゝには受入れにくく、一方人間の智慮が書物によつて磨かれるやうになつて、茲に始めて可なり意外な又複雑な説明を、借りて繼ぎ合せても通用する時代が來たので、京や鎌倉以外の土地では、それが大抵は近世に入つてからの事であつた。諸國の宮寺の縁起は江戸の初期、元祿前後までのものが最も多く、新しい型といふのは是を介して世に知られて居るのだが、今でも附近の住民の説くものと、二流れになつて流布する場合が稀でない。つまりは縁起を編述した階級の教育が先づ進み、以前の傳説はなほ暫くの間、文字の學問と縁の薄い人たちで支持して居たのである。兩者のまん中には大きな問題が横たはつて居る。私たちは斯ういふ民間の多數が、支持し參與したものを信仰だと思ふのだが、一方世間では書いたものゝ指導に附いて來ず、又はその一つ前の考へ方

に止まつて居らうとする者を、迷信と呼ぼうとする人も中々多く、しかもその教理と學説は刻々に改まつて居たのである。古い信仰の埋没は誠に免れ難い結果であつた。わざと判らなくしてしまつてから、尋ねて見ようとして待つて居るやうな嫌ひさへあつた。獨り傳説だけが許されて昔を残して居たものである。是を粗末にすると恐らくは信仰の歴史は完備しないであらう。

前にもやゝ詳しく述べて置いた所謂三輪式神話は、夙く神話の條件を振棄てゝしまつて、傳説となつて今日までも生きて居る。是などは最も適切なる連綿の例であらうと思ふ。上代の史書に認められた事實と、中古の花の本の物語とを比べて見ても、少なくとも二つの緊要なる變化はあつて、しかも聽く者の牢く信じて居たことは古今同じである。第一に神は妻の君の願ひを辭みかねて、假に錦色の小蛇の姿になつて、櫛笥の中に伏していますと傳ふるに對して、他方では大蛇が優美なる青年の姿に化して、夜な／＼姫が閨を訪れたことになつて居る。大蛇と説くが故に水の徳を専らとし、豊かなる田の水を供して妻の家を富裕にしたといふ點は、美濃の安八長者の話以下、無數の新らしい例に一貫して居り、それが又米作を大事にした日本の社會に、永く忘れられない幸福なる印象でもあつた。第二の著しい變化は、名を知らぬ貴といひ禰君の衣の端に、苧環せたまの絲を取附けて其行くへを確めよ



うとしたことは、三輪の地名をさへ説明する古い言ひ傳へであるが、中世に入つてからは、必ずその絲のさきに針が附いて居た。水の靈は乃ち鐵氣の毒に中つて、戀の爲に命を終つたことになつて居るのである。それがどうして人間の知る所となつたかといふと、爰に立聽といふ一つの挿話が必要になつて來るのである。立聽によつて靈界の祕密を知るといふのは、説話の古い趣向の一つであつた。機屋産屋はたやうぶやを覗くなどいふ戒めなど、元は脈絡のある語りごとかも知れぬが、是には人智の優越といふことがあつて、既に一部の征服を含んで居る。しかも固有の傳承の變化であつて、別に新たに空想し得たものでないことは、芋環の絲が確かなる道しるべである。つまりはたゞ一筋の語りごとが、家により又恐らくは時代によつて、何段とも無く次々に變つて來て居るのである。父无くして身ごもつた娘の子の、畏き神の御子たることを立聽によつて知り、果して不世出の英傑を育て上げたといふことを、遠祖の誇りとして傳へて居る一族も、今なほ各處に散在して居るが、それよりも數多いのは同じ偶然によつて、測らずも水の靈の計畫を覆へし、完全に靈界との交通を絶つたといふことを、昔の出來事として傳へて居るものである。是は單なる厄難の回避に止まり、家の由緒にも土地の自慢にもならぬやうに思はれるが、それが時あつてなほ信ぜられて居たのは、内の信仰の目に見えぬ推移に伴なうて、ほんの片端から少しづつ、

永い間に變つて來た爲であらう。元亨釋書の蟹滿寺緣起など、比較して、彼には動物の報恩とか讀經の功德とか、新たな説話分子の採用せられて居るに反して、是はたゞ岩屋の奥の大蛇のひそく話と、その立聽とがもう少し長く續くだけである。そんなことを謂つても人間といふものは中々賢い。もしも三月三日の桃の酒を飲み、又五月五日の蓬蒿蒲の湯を浴びさせたらどうする。折角の子種も流れてしまふぢやないかなどいふ聲がする。是はうまい事を聞いたと歸つて來て、早速その通りにすると娘はもとの丈夫な軀になつた。めでたし／＼などいふ様な話は、ちやうど昔話と傳説の中間の地位を占めて居る。或人は是を以て節供の儀式、桃菊菖蒲等を缺くべからざるものとする理由として之を説き、又或者はさういふ事件のあるやうな大昔から、既に我家我村の榮えて居たことを證明する爲だけに援用して居るが、起原は是も亦今一段と嚴肅なものであつて、又いつの世からとも無く傳はつて居た故に、是を單なる民間の文藝として、見放してしまふことが容易でなかつたのである。

神が人間の清き處女を娶つて、聖なる若御子を此世に降したまふといふことは、深い仔細はまだ知らぬが、とにかくに上世の諸民族に共通した信仰であつた。國の事情によつて後々の展開は區々になつて居る。日本には婚舎を女の父の家に設くる慣習が普通であつた



爲か、特に外戚の親を重んずる考へ方が、この方面に於ても顯著であつた。萬人のうちに只一人、選み出されたる者の光榮は大きかつたが、其光榮は悉く兄から甥の筋へ、永世に相續せられたのである。獨り聲望の四隣を壓したのみでなく、祭祀をこの記念に集中して門黨の結合を鞏固にし、愉悅繁榮の生活を導き得たことは、記録の内外に算へ切れぬほどの例がある。だから稀にも其様な古い記憶を傳へ、もしくは新たなる示現によつて之を知つたとすれば、あらゆる方法を盡して其忘失を防いだであらうことは、想像に餘りありと言ひ得る。しかも實際には類型がやゝ多きに過ぎて、寧ろそれ故にこの傳説の尊とさを制限して居る姿がある。もしも土地毎に一族毎に、自ら信じて各々孤立の傳承を守つて居たならば、此様な細部の一致までは無かつたらうと思ふ。乃ち技藝の練習と普及とは、却つてこの單調化によつて、幾分か信仰の根を揺がせて居るのである。旅から入つて來た語部の女たちは、早く定まつた一つの型を以て、その與へられたる空想の自由區域を統一しようとして居たらしく、それが交通の開け進むにつれて、又かといふ者が段々と多くなつて來たのである。個々の傳承者は無論最後まで防衛者であつたらうが、それでも間接の影響を受けて、いつと無く其解説を改め、又は力を入れて説く中心を移して居る。其上に水の恵みを施したまふ神徳を力調して、その御姿を水の底の、畏るべき大きな形のものに想

像する風が始まつたのである。是も外國宗教からの感染と認められるが、もと／＼幻しであつた故に、凡人も之を胸に描くことが出來た。さうして先づ兒女子の感情が之に反撥したのである。大蛇なんかの御嫁になるといふことを、幸福とは考へ得ない人が次第に多くなつて、やつと遁れた追返したといふ類の話のみが、耳を傾けて聽かれて居るうちに、終には猿掣入とか河童掣入とかいふ、子供も笑ふやうな童話とまで零落したことは、別に書いても居るし、又澤山の實例で説明して見ようとも思つて居る。爰で言つて見たいのは是と傳説との境の線に於て、もう幾つかの改造が試みられて居ること、それには蟹寺の蟹の恩返し、爺に命乞ひをして貰つた蛙の御禮などの外に、武藏下總備前等の鴻こぶの宮の傳説といふのがある(郷土研究一卷十號)。大蛇の掣殿は女房の「つはり好み」、即ち妊娠中の異常食慾を充す爲に、大木に匍ひ登つて鶴鳥こぶの卵を取りに行き、却つて鳥の嘴に突かれて墮ちて死ぬ。さういふ話が一方にはあつて、他の一方には又社の神の大蛇が殺されて、其以後は之を殺した鶴鳥の方を、神として崇めるやうになつたといふ土地も多いのである。内の信仰が漸く移らなかつたから、如何に感銘の深い挿話が運び込まれようとも、それを受入れて我物とするまでには至らなかつたらう。この兩者の交渉に働いて居た法則はまだ明かになつて居ないが、少なくとも我々の傳説には、中古の改良といふものが幾段もあつたこ



とだけは、三輪式説話なるものゝ比較がよく證明する。是を省みること無くして、此中に日本最初の信仰を見つけ出さうとする者がもしあつたら、その結論の如きは承らぬうちからもう誤りだといふことが出来る。

## 二四

さて愈々この長たらしい講釋を終らねばならぬが、自分には假定があつて結論といふほどのものは無い。將來蒐集せらるべき許多の資料によつて、もし確認せられるならば大きな幸ひ、或は誤謬の訂正せられるものがあつたとしても、それも亦喜ぶべきことだと思つて居る。是をこのまゝに鵜呑にせられることは、誰よりも筆者が之を望んで居ない。たゞ傳説の今後なほ微細に研究すべきものであつて、現在の如き敬遠主義は、國を愛する者の忍ぶべからざる状態であることを、重ねて明言する必要があるのみである。日本民俗學に於て、傳説によつて知りたいと念じ、又知り得ると信じて居ることは二つある。一つは勿論上代の信仰、曾て國民の間に傳説が盛んに花咲いて居た頃に、如何に我々の祖先が觀照し又諦念して居たかといふことであるが、それを詳かにする爲にも先づ以て、第二の目途、即ち百千年の久しきに互つて、直接間接に是に影響し、是が變化を見ずば止まじとしたもろくの社會事情を、少なくとも主要なるものだけは尋ね究めて見ることであつて、さうして發見の怡びは實は此方に多いのである。書物はこの中でも最も有力な干渉であつ



たが、其痕跡は明かに残り、又その及ぶ區域が元はよほど限られて居た。今でも教育の效果に就て、我々が不安を抱かすには居られぬやうに、教へる材料と機關との存在は、未だ必ずしもどう教へられ、どう覚えて居るかを知らぬのである。どれだけ働いたかは結果によつて確かめるの他は無い。アピラウンケンソハカを油桶そわかと、覚えて居た老婆の話もあるのである。傳説の變遷はたゞ傳説が之を説明してくれる。それも總國が一遍に、掌をかへすやうに改まるものならば、是を前から此通りと、強辯する者が現はれぬとも限らぬが、幸ひにして日本は地形の然らしむる所、殆とあらゆる段階のものが、竝んで今の世までも保存せられて居るのである。所謂歴史化は遠く平家物語一流の語り物の普及に始まり、最初は九郎判官八幡太郎、空海慈覺といふやうな少數の名士に、全部を引受けさせるやうな勢ひであつたものが、後漸く日本政記國史略の全盛期に入つて、その解説の範圍は著しく擴張し、千年も経つてから始めて偉人の墓地を知つたといふ様な例ばかり多くなつた。それが再び又覺束なくなるといふことは、知識の増加であり比較のためのものであり、もつと大まかに言へば史學の進歩である。以前は人の心が學問に對してはすなほであつて、今まで弘法大師と思つて居たのが、最明寺時頼だときまると又さうかとも思つた。今日はそれが稍頑固になつて居る。學問の行止まりの兆候でなければよいと念ず

る者は私のみではあるまい。我々の傳説の中には、此等の歴史上の人物の、呱呱の聲を揚げるよりもずつと前から、たしかにあつたと認められるものが幾らもある。どうか一旦の思ひちがへによつて、何の根據も無かつた辨慶や小野小町と共に、古來の大切な言ひ傳へまでを心中させたく無いものである。

人が地方の傳説に注意し始めたのは、和銅の風土記が既にさうだから、隨分と古いことである。もしも昔の學者が之を読み比べて居たなら、あれだけでも傳説はどういふものであるかと判つて、後々のいさかひの大半は防止し得たであらうのに、それから嗣いで起つた人々は多くは地方の住人で、その見る所は割據の域を出でなかつた。悪く言へば遼東頭白の家猪であつた。よそを知らないちび／＼とした研究だから話が紛糾する。新たなる研究の、再び採集を以て條件としなければならぬ所以である。傳説の分類といふことは自然に唱へられざるを得ない。私にもまだ好い案は無いが、大體に語りの中心として信ぜられて居る事實を目標にし、人の名はたゞ其中の小分けとした方がよいやうに思ふ。甲州では日蓮上人が杖を立て、成長した竹があり、越後の七不思議には親鸞の逆さ竹がある。それはたゞ竹のある御寺の宗旨の差に過ぎない。是を杖立ての傳説として置けば話はすむのである。高木敏雄氏のいふ英雄傳説といふ名目は、用心をして私などは用ゐぬことにして居



る。之によつて八幡太郎義家の、通つた路筋を調べる者があつても困るからである。傳説の最も多く附いて居るのは岩石竹木、それから日本には泉と井戸、池沼淵川に伴なふものが特に多い。今ある各地の地誌類の中から、斯ういふものを抜くのは機械的の勞務で、僅かな費用をかけると明年にも出来る。さうして是だけを別に見ると、残りはもう四分の一ほどの、珍らしいものになつてしまふのである。是ばかりの手數をもして見たことの無い御方が、やたらに傳説を論ずるのだから話は面倒になる。がしかし今暫くの辛抱だと我々の仲間では樂觀して居る。

傳説の數といふものは日本では莫大であるが、それは決して種類の多いといふ意味でないことは、排列分類をして見れば忽ちわかる。岩なり清水なりに傳説のあるものは幾らあつても、其事實は五つか七つで、後には名を聞いたゞけでも内容が察せられるやうに、奇妙に同じ名稱が東西の府縣に分布して居る。私たちはもう久しく之を承認して、それに普通の型といふものを見出し、どこがちがつて居るかを先づ知らうとして居るが、大抵は之に關係した固有名詞だけのやうである。歴史化以前の狀態は是からでも察せられる。たゞ此序を以て言つて置きたいのは、現在は既に傳説の分解が始まつて居るといふことである。昔その地にあつた傳説の形は、もつと込入つた一續きの語りごとであつたこと、たとへば

前節に掲げた奥州の菟田の宮、或は信州園原の炭焼長者のやうであつたものが、折々はそのたゞ一部の、言はゞ證據といふやうなものだけが、忘れ残された場合もあるのである。物言はぬ木石を證據といふのはをかしいが、曾て旅から運んで來た話ならば、それを一つの土地に括りつける爲に殊に必要であり、假にいつの世からとも無く根を生やして居たにしても、さういふ朝夕に目に觸れるものを指さして説けば、話が一段と身に沁みて聽かれたのである。勿論それは只の地物で無く、或は神木の注連を張つた樹であり、又は御手洗の泉に臨む形の珍らしい石で、それ自身が既に靈視せられて居たので、愈々人を欺く筈が無いと思つたのである。傳説の單形複形といふことを自分などは考へて居る。多くの單形傳説は、其後にやゝ色あせた複形を控へ、氣を付けるとまだ其輪廓が辿られる。しかし一方には既に破片となつて、其點ばかりを力説するものがあり、もつと衰へたものでは、停車場の揭示板に書いてある名前以上に、土地の人も知つて居らぬのがある。斯ういふのが屢々文人の筆によつて、新たな作り話を添へられることもあるが、それすらも大よそ全國のどこかの隅に、あつてもよささうな複形傳説になつて居る。爰にも一つの統一傾向が、ほゞ民衆の想像の進んで來た途を示して居るのである。

傳説が國の或大切な歴史を語つて居るといふことを、誰よりも先に私は認めるのだが、



それが近代の歴史化するものと、結果に於て相背反することは遺憾ながら致し方が無い。史書を愛讀する風が地方に普及して、古い事なら必ず此中に書いてあるものと思ひ、自分たちの親代々信じ傳へて居る物語を、それに當て嵌めて見ずには居られなくなつたといふ事は、それ自身が我々の認識しなければならぬ重要な史實である。それがまちがひであり結果がどうなつたかは、歴史ともいへないほどの眼前のニュースである。次に全國に分布する傳説には、偶然とは見られない大規模の一致があり、其中には京都その他の中心地から、確かに運んで來たと言ひ得るものが、多いといふことも興味ある歴史である。その携帶者を若い美しい女性であらうといふことは假定で、自分だけは今でも證明し得ると思ふが、行く／＼反證が擧がつて一部分は聖であり座頭であり、或は金屋石屋等の旅の職人であり、しかも男女の間にも材料の交換借用が行はれて、一段と近世の民間文藝を複雑にしたといふことになるのかも知れない。それはどう極まつても傳説の内容が中古著しく統一せられたことだけは、もう争はれない歴史と見てもよい。さうすると次に問はれるのはこの以前、どの程度にまで相似たる傳説が、日本の上代には有つたかといふことで、上代は正史に明記せられたものゝ外、推定によつて決すべき問題ばかり多いのだが、是も安全率は著しく高めることが出来る。第一に上代にも傳説と名づけてよい傳へごとが多く、その

信じられ方も後代の比で無かつたことは、歴然たる文獻の根據がある。それが次々の語りかへを受けて、半分近くもちがつた話になつて居る例を見ても、假にまだ先型を見出し得ない傳説にも、少なくとも接穂の臺木だけはあつて、それがあつた故に新しい傳説は、根をさし成長し得たのだといふことが出来ると思ふ。

それから今一つ、所謂單形傳説の數多くの類似といふことが、偶然ながらも前期の傳説の、普通の姿を彷彿せしめる。是が何れも至つて素朴な、敘述の技巧を要しないもののみで、わざ／＼暗記して遠くの土地から、運んで來るにも及ばぬやうなのが多いからである。即ち我々の故郷の言ひ傳へは、少なくとも斯ういふ部分に於ては早くから一致して居たので、従つて又それを前代論理の證據法として居た物語の間にも、幾つと無き共通點のあつたらうことが推測せられるのである。是をやゝ具體的に證明するならば、杖を立て、樹となつたといへば或尊敬すべき人の來ては又去つたことを想像させるが、さういふ話は現存の傳説の中にも多い。だからこの部分だけは昔からあつたのかも知れない。箸は尋常の生活では野外で用ゐたものは必ず折つて棄てることになつて居る。源賴朝などいふ人がそれを地に刺して、やがて成長して片葉の蘆、又は一村薄となつて残つたといふ傳説が安房上總には多いが、斯うした誓ひ又は占問の方式が元はあつて、それは相饗の祭と共に



れ、しかもすぐれた武將の場合にはそれほど奇端があつたといふのであらう。是に類する言ひ傳へは、書物にも見え又今日もなほ語つて居る。腰掛石といふ形のやゝ平らな石は、關東東北に行くに數多く、たゞ是に腰掛けた名士の名前のみが區々である。太平記には笠置の山の御夢の話として残つて居るが、物古りたる大樹の下に、腰を掛けるにふさはしい岩座いはくらを置いて、そこを祭の庭とする慣習は今でもある。恐らくは昔斯ういふ祭をした際に、何か神祕の示現のあつたといふ傳へが、特にこの部分だけ濃厚に記憶せられて居るのである。その他水邊みづべに兒と老女との最期を説くものゝ多いこと、もしくは母と子の人柱に片割れの梅の哀話の存することなど、一つ／＼を擧げては切りも無いが、要するに是だけはまだ本來の複形傳説を想像し得られぬと、思ふやうなものには滅多には出逢はぬのである。他日更に多くの類例を取重ねて、今は修飾せられ文藝化せられて居る傳説の原の姿といふものが、次々に探り當てられる望みは十分にある。必要はたゞ倦きず其だけの搜索が續け得られるだけの、興味を若い人たちに抱かせることである。

旅から運ばれて來た色々の文藝が、専ら傳説を混濁させる結果しか無かつたやうに、連斷した人があつたらそれも誤りである。彼等遊歴の詞客は戲作者の元祖であり、師匠があつて修業を積み、中心地があつて種を仕入れに戻り、新らしい感銘を期する餘りに、其種

を新渡の學問に求めるやうなことも有つたのは事實だが、少なくとも初めのうちは、國內の最もすぐれた傳説に自身も深い印象を受け、殊に其敘法の精妙なるものを學んで、之をまだ知るまいと思ふ土地に移植したのである。さうでなかつたら國內に昔から、數多く同じ話があつたわけだが、個々の實例を比べて見ると、それは到底考へることが出来ない。たとへば宗祇戻りや西行法師閉口の歌のやうに、行脚の歌人が牛飼童、又はあやしの賤の女と問答して、田舎にも智能の秀でた者があるのに喫驚し、高慢の鼻をへし折られたといふ話などは、今でもその田舎の人が楽しんで聽いて居る。是は謠曲の「白樂天」が小國の文才を試みに來たといふ話も同系で、多くは土地の神祇が假に兒女老翁に姿を現じて、外の侮りを防いで下されたといふので、書物や經文からの焼直しでないことは明かだが、その又歌といふのが、「うるかといへる綿はありけれ」、或はうつせみのもぬけのからに道とへばとか、又「鼓の瀧を來て見れば」とか、どこへ行つても大よそはきまつて居て、どれもこれも中世の趣味、さして教養の高くない人の思ひ付いた秀句なので、斯ういふ方面からも流布の経路はわかる。しかも神童が老いたる僧尼の仲介によつて、土地を教化したといふ類の傳説ならば、日本の一つの特徴と言つてもよい程に、さまざまの美しい展開を見せて、古く弘く傳はつて居るのである。貴人の流寓といふやうな畏れ多い物語が、餘りにも

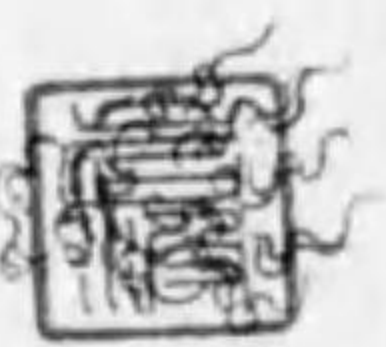


數多く邊土に分布して居るのも、たゞ此方面からのみ説明することが出来る。上世其類の現實の歴史が、まだ一度も起らなかつた以前から、村々の現人神あらひびがみは幻しの都から、遙々と天降りまして民の家に宿し、清き處女を御妻に召されて、土地に由緒の深い若い神を留められたのである。それを限りある記録文獻と結び付けた者は、學者以前に既に歌比丘尼等があつた。我々の祖先は無始の昔から、無上の憧憬を以て此種の傳へごとを聴き、かつは幽かなる一筋の因縁の、種族の貴とい中心と繋がつて居ることを信ぜんとして居た。それをたゞ彼等のみが洞察して居たのである。是がこの大きな影響の後永く残つた所以であらうと思ふ。我々の學問は更に一段の深い同情を以てこの事情を理解し、それに依つて新たに未來の文藝を計畫しなければならぬ。

(桂川製本)

昭和十五年九月一日印刷  
昭和十五年九月五日發行

岩波新書  
72



傳説  
定價五十錢

著者 柳田 泉 男  
發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波 茂雄  
印刷者 東京市神田區美土代町十六番地  
島 連太郎

三秀會印刷

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波書店

電話(33) 〇〇一八七〇 〇〇一八八〇  
九段(33) 〇〇二二九〇 〇〇二二八〇  
振替口座東京二六二四〇番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁等)がありました時は、御手数取り、洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましたら、早速お取替致します。



岩波新書を刊行するに際して

岩波茂雄

天地の義を輔相して人類に平和を與へ王道樂土を建設することは東洋精神の神髓にして、東亞民族の指導者を以て任ずる日本に課せられたる世界的義務である。日支事變の目標も亦茲にあらねばならぬ。世界は白人の覇業に委すべく神によつて造られたるものにあらざると共に、日本の行動も亦飽くまで公明正大、東洋道義の精神に則らざるべからず。東海の君子國は白人に道義の尊きを誇ふべきで、斷じて彼等が世界を蹂躪せし暴虐なる跡を學ぶべきでない。

今や世界混亂、列強競争の中に立つて日本國民は果して此の大任を完らざる用意ありや。吾人は社會の實情を審かにせざるも現下政黨は健全なりや、官僚は獨善の傾きなきか、財界は奉公の精神に缺くところなきか、また頼みとする武人に高邁なる卓見と一絲亂れざる統制ありや。思想に生きて社會の先覺たるべき學徒が眞理を慕ふこと果して鹿の溪水を慕ふが如きものありや。吾人は非常時に於ける舉國一致國民總動員の現狀に少からぬ不安を抱く者である。

明治維新五ヶ條の御誓文は曾に開國の指標たるに止らず、興隆日本の國是として永遠に輝く理念である。之を遵奉してこそ國體の明徹も八紘一字の理想も完きを得るのである。然るに現今の情勢は如何。批判的精神と良心的行動に乏しく、やゝとすれば世に阿り權勢に媚びる風なきか。偏狹なる思想を以て進歩的なる忠誠の士を排し、國策の線に沿はざるとなして言論の統制に民意の暢達を妨ぐる嫌ひなきか。これ實に我國文化の昂揚に微力を盡さんとする吾人の竊に憂ふる所である。吾人は歐米功利の風潮を排して東洋道義の精神を高調する點に於て決して人後に著つる者でないが、驕慢なる態度を以て徒らに歐米の文物を排撃して忠君愛國となす者の如き徒に與することは出来ない。近代文化の歐米に學ぶべきものは寸尺と雖も謙虛なる態度を以て之を學び、皇國の發展に資する心こそ大和魂の本質であり、日本精神の骨髄であると信ずる者である。

吾人は明治に生れ、明治に育ち來れる者である。今、空前の事變に際會し、世の風潮を顧み、新たに明治時代を追慕し、維新の志士の風格を回想するの情切なるものがある。皇軍が今日威武を四海に輝かすことかくの如くなるを見るにつけても、武力日本と相較んで文化日本を世界に躍進せしむべく努力せねばならぬことを痛感する。これ文化に關與する者の統後の責務であり、戦線に身を曝す將兵の志に報ゆる所以でもある。吾人市井の一町人に過ぎずと雖も、文化建設の一兵卒として涓滴の誠を致して君恩の萬一に報いんことを念願とする。

眞に學術振興のため岩波講座岩波全書を企圖したるが、今茲に以て人の現代的教養を目的として岩波新書を刊行せんとする。これ一に御誓文の遺訓を體して、島國的根性より我が同胞を解放し、優秀なる我が民族性にあらゆる發展の機會を與へ、躍進日本の要求する新知識を提供し、岩波文庫の古典的知識と相俟つて大國民としての教養に遺憾なきを期せんとするに外ならない。古今を貫く原理と東西に通ずる道念によつてのみ東洋民族の先覺者としての大使命は果されるであらう。岩波新書を刊行するに際し茲に所懐の一端を述べ。 昭和十三年十月帝國神社大祭の日

岩波新書既刊

定價各册五十錢  
送料各册六錢

奉天三十年上下	矢内原忠雄譯
支那思想と日本	津田左右吉著
天災と國防	寺田寅彦著
萬葉秀歌上下	齋藤茂吉著
家計の數學	小倉金之助著
雪	中谷宇吉郎著
世界諸民族經濟戰夜話	白柳秀湖著
現代支那論	尾崎秀實著
人生論	武者小路實篤著
ドイツ戰歿學生の手紙	高橋健二譯
死とは何かその他	高橋健二譯
神祕な宇宙	鈴木英通譯
科學史と新ヒューマニズム	鈴木英通譯
ペーローヴィエム	森島恒雄譯
	長谷川千秋著

森鷗外妻への手紙	小堀杏奴編
荊棘の冠	山本有三著
春泥・花冷え	久保田万太郎著
薔薇	横光利一著
抒情歌	川端康成著
大帝康熙	長與善郎著
ミケルアンジェロ	羽仁五郎著
日本的性格	長谷川如是閑著
世界文化史概観上下	H.G.ウェルズ著 長谷部文雄譯
メチニコフの生涯上下	オリガ・メチニコフ著 宮下義信譯
アフリカ分割史	大熊眞著
鼠はまだ生きてゐる	J.H.チェムバレン著 吉阪徳臨譯
回教徒	笠間朶雄著
日本本刀	本間順治著
支那社會の科學的研究	ウイットフォード著 平野・宇佐美譯
海	宇田道隆著



物質と光上下  
 日本美の再発見  
 北極飛行  
 三民主義解説上下  
 野口英世  
 科学と宗教との闘争  
 學生に與ふる書  
 雷  
 戦争とふたりの婦人  
 結婚・友情・幸福  
 零の發見  
 物理學はいか上下  
 に創られたか  
 芝居入門  
 日本資本主義史  
 上の指導者たち  
 儒教の精神  
 インフレーション  
 バルカシオン

河野・ア  
 プルノ・タウ  
 藤田ノ・タウ  
 ヲドビヤノ  
 米川正  
 岡養佛  
 小泉丹  
 森島恒  
 天野貞祐  
 中谷吉郎  
 山本有三  
 モ盛好  
 河盛好  
 吉田洋一  
 アインシュタイン  
 石原純  
 小島八  
 北村喜  
 土屋翁  
 武内義雄  
 木村禧八郎  
 芦田均著

支那のユーモア  
 世紀の狂人  
 トルキスタンへの旅  
 哲學入門  
 日本文化の問題  
 日本文化の數話  
 能本の學問  
 山間の時  
 空の尊敬する人物  
 余の命と物  
 生軍人の思想  
 一軍人の思想  
 フアラデ  
 人種の問題  
 スエズ運河  
 今日本の運河  
 傳日エズの運河  
 アラビアのロレンス

吉村正一  
 安田徳太郎  
 神近市子  
 三木清  
 西田幾多郎  
 小倉金之助  
 野上豊一郎  
 辻村太郎  
 矢野龍太郎  
 矢内原忠雄  
 服部静夫  
 藤田英祐  
 矢島祐利  
 J・ハックス  
 A・ハックス  
 小島ハックス  
 シン・ハックス  
 大内ハックス  
 柳田好男  
 中野好男著



IT-65-10

